
white:white

光瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

white：white

【Nコード】

N0282J

【作者名】

光瑠

【あらすじ】

ある日屋上から落ちる。しかし目を覚ませば見知らぬ場所。森の中にいた女の子の言葉から推測するに、ここは異世界？様々な出会いと別れ。自分を問う旅。死に往くもの達の、物語。

プロローグ

今、落ちている。

屋上に呼び出された。

それはラブレターなんて青春を感じさせるモノなんかじゃなくて、別の意味で青春を感じさせる手紙——所謂果たし状だった。

学校の中でも、外でも、ある程度名の知れた問題児。それが俺。売られた喧嘩は買うし、売られなくても買う。街の喧嘩じゃ負けたことなんてない。

家が道場だっただけで武術と剣術を叩き込まれた。嫌だったが、使う機会は腐るほどあったから仕方なく習っていただけ。

使う機会——所謂イジメ。

明らかに日本人離れた容姿のせいで蔑まれた。蔑んだ奴は1人残らずボコボコにしたが。

色素欠乏症、つまりアルビノ。

俺の場合肉体にそこまで影響は無いが、白髪と赤い目のせいで異端扱いされた訳だ。

そのせいか解らないけど性格もねじ曲がった。

今回の喧嘩をふっかけて来た奴らもそのせいか類だろう。

結果からいえば、勝った。

相手は三人。全員何かしら武器を持っていた。俺は鉄パイプを持ってた奴を最初に叩きのめして武器を奪った後、残る二人を死なない程度に殴り倒した。

ここまででは全く苦労はなかった。問題はここから。

フェンスの建て付けが悪いのに気付かず、フェンスに寄っ掛かったらどうなるか。

当然フェンスは壊れて、寄っ掛かった俺は落ちた。

何かに捕まるうにもフェンスは壊れて落ちた。周りには何も無い。突き出した手は虚空を掴んだだけだった。

――落ちる。

ここは四階。落ちた体勢も悪い。死ぬだろう。

来世ではもう少しマシな人間になるように願って……意識を手放

した。

「ああ……？　ここ、どこだア」

木漏れ日が眩しい。

どこかの森の中らしいのだが、こんな森は見たことがない。天国にしては……どうもイメージと違う。

（俺は……死んだんじゃなかったのかア？）

死んだんじゃ無いにしても、ここがどこだか解らない。このままでは遭難……最悪野垂れ死にだ。さすがにそれは避けたい。

起き上がって体を少し動かしてみたが、異常は無いように思う。むしろ以前より軽くて反応も早い気がする。

（とりあえず歩いてみるかア……人がいるかもしれねエ）

歩き出そうとした時、すぐ近くの草むらが揺れた。

「なんだア？ ウサギかなんかア？」

もう一度激しく揺れて、何故か人が出てきた。

まだ小学生程度だろうか。幼い女の子だ。こんな所に、こんな幼い女の子がいると言うことは、近くに街があるのだろう。

「お……手間が省けたなア」

女の子はこつちをに気付いて一瞬ビクツとした。女の子に近付くと、ビクビクした目でこちらを見ながら後ずさった。

「なんだよ、何もしねエよ。道を聞きてエんだけど、ここから一番近い街ってどうやって行けばいいんだ？」

女の子は尚もビクビクした目で見てくる。恐らくこの容姿が原因なんだろう……？

（つて、なんでコイツの髪、赤いんだア？ ここ……日本だよなア？）

今更だが気付いた。明らかに日常見ている日本人とはかけ離れた容姿をしている。

（とりあえず……意志の疎通図ってみるかア）

地面に座ったままの女の子に視線を合わせるようにしてしゃがむ。

「俺は真田刀哉ツツーんだ。お前に何かする気は全くねエよ。ただ街に出てエんだ」

「トーヤ……さん？」

「あア。街、どこだか知ってつか？」

「街は……その、遠いです……ここからじゃ大体100キロ近く、あります……」

女の子から紡がれた言葉に、刀哉は愕然とする。一体どうなっているのか。

「なんで学校から落ちて街から100キロも離れてんだよ……それじゃ、お前はどっやってここまで来たんだア？」

「えと……私、近くに村があるんです……」

「村ア？ このご時世に？ なんつー村だよ？」

「ルクの村って言います……」

ルクの村？ 全く聞いたことが無い名前だ。外国か？ 俺は外国に飛んだのか？ いやでも考えて見る。日本語が通じてるって事は日本で合ってるんじゃないのか？

「なア、一応聞いておくけどココ、日本だよな？」

「ニホン……？ 何でしょうかそれは……？」

日本を知らない……外国でも知らない人間の方が少ないこの時代に、日本を知らないだと？

「ちょっと聞いていいかア？ ここはなんて国なのか教えてくれねエか？」

「は、はい。えと、この国はジュレルの国と言います。緑豊かな国なんですけど……土地を狙ってくる国のせいで戦争が絶えません……」

いよいよ聞いたことが無い名前が出てきた。まさか……まさかとは思うが……異世界に飛ばされたのか？

日本を知らない上に、日本人離れた容姿の女の子。極めつけは何故か意志の疎通が出来る事。いったいどうなっているのか理解できない。

(とりあえずこの女の子に村までつれてってもらおうか。情報を集める意味でも現地の人間は貴重だ)

一通り思案をしてから、この先どうするかを決めた。

「なア、どうも俺は迷っちまったみてエなんだ。オマエの村まで連れてってくれねエか？」

「は、はい！ えとエリー・ルーフアです！」

「あ？ あア。よろしく頼むな」

エリーに連れられて僅かに草が無くなった道を歩く。

なんとというか、どうやら俺は――……異世界に迷い込んだらしい。

プロローグ（後書き）

こっちはゆっくりの更新になります。

第一章 【慟哭の空】 一（前書き）

ゆっくりな更新の癖して、話が進むのも遅いです。

「ココ、かア？」

「はい！ ここがルクの村です！」

森を抜けた先に見えたのは、現代ではもう過去の遺物であろう、藁葺きの家が立ち並ぶ、小さな村。村の周りには獣除けか、木の囲いがある。しかし、それも所々壊れていたり、歪な形を成していたりした。

「まア、仕方ねエな。エリー、この村で一番地理に詳しいのは誰だ？」

「村長さんだと思います。あちらの大きな家に住んでらっしゃるんですよ」

エリーの指差した方向に目を向けると、確かに周りの家より一回り大きい家が建っていた。その外見は他の例に漏れず藁葺きの家だ。村人から高い税を徴収して私腹を肥やす強欲村長……という訳ではなさそうである。

（しかし……まさかマジで異世界かよオ。このままこっちにいてもいいんだが……一応帰る方法は探さねエとなア）

刀哉はエリーと視線を合わせるようにしゃがむ。

「ここまでありがとなア。俺はすぐ行くか、しばらくここにいます」

かも知れねエが、なんかあった時はまた頼むぜ。オマエもなんかあったら俺を呼べよ」

「は、はい！ 無事に街に行けるといいですね！ 頑張ってください！」

「ああ。じゃア俺は村長のトコ行ってくるわ。またなア」

「はい！ お気をつけて！」

エリーの声を背中に受けながら、村長の家の方向に歩く。

(そういやア、人とマトモに話したの、久しぶりじゃねエか？

……たまには、悪くねエかもなア。さて、とりあえず村長とやらに話聞かア)

村長の家と思われる家の近くまで来た。周りの家と比べると、作りがしっかりしている。

簡単に言ってしまうえば、藁葺きなのは変わらないが、民家は壁が木材。村長の家はレンガで作られているという違い。

「現代に比べると、やっぱり劣るって訳かア……オーイ、村長サンいるかア？」

扉を叩いて村長を呼ぶ。余程耄碌せうろくしていない限り、聞こえたはずだ。

「はい？ どちらさん？」

「……あア？」

出てきたのは、女性。若い。まだ二十代と思われる容姿をしている。使用人か何かだろうか。

「あー…村長サンいるかア？」

「村長は私だけだ」

「……冗談だろオ」

「いやいや、いきなり失礼だね君も。冗談なんかじゃないよ。私が村長に就任したのはつい最近。前の村長、老衰で死んじゃってさ。それで私が継いだってわけ」

（なんてこつたア……若い奴じゃ知識なんてないんじゃないのか？）

いや待て、この村に紙媒体の情報があればいいんだ。そうすれば街までの道くらい分かるだろう。

「ちよつと聞きてエんだが……街に行く方法ってあるかア？」

「街に行きたいんだ？ タイミングいいね。ちよつと一週間後にストレの街から商人が来るんだ。それに同乗させてもらってストレに行くといい。ただお金はかかるけどね？」

「金かア……残念ながら俺ア文無しなんだよ。タダで行けねエか？」

「そんなうまい話は無いよ。だけど……そうだね、護衛とかならタダでいいんじゃないかな」

なるほど、護衛か。

幸いそつち方面の心得がある。全く問題ない……いや、一つあるな。

（武術でもある程度いけるんだが……流石に得物が無いとキツいんじゃないか？）

願わくば刀が一番いいのだが……無ければ適当な物を持てばいい。

「まア、とりあえず一週間は暇なわけだなア……村長サン、一週間三食付きで泊めてくれ」

「働かざる者食うべからず、だよ」

「この世界でその言葉聞くことになるとはなア……じゃあ、刀つてねエか？」

「刀……？ 東国のアレかい？ 流石にないんじゃない？……いや、ちよつと待ってて」

村長は言うやいなや、奥の方に行ってしまった。何か心当たりがあったのだろう。

しばらく待った。村長は埃だらけになりながら、長い袋を持って出てきた。あれは――刀袋か。どうやら刀があったようだ。

「随分古いものだけであつたよ。コレ、どうするんだい？」

「しばらく貸してくれ。見たところこの村、なんかの被害にあつてんだろオ？ 俺が用心棒でもやってやるよ。なアに、腕はそこそこ立つから心配すんな」

「そうだなあ……じゃあ任せようかな。しかし住むところは自分で何とかしてくれ。暮らしていける分のお金は私が出そう。私が出るのはここまでだよ」

刀を受け取った。竹刀や木刀とは違う、ずっしりとした重さ。命を奪うことができる武器。

「仕方ねエな。とりあえずは仕事の内容だア。基本的には村の見回り、害あるモノが現れたら殺せばいいんだな？」

「ああ。農作物の被害は主に魔物の仕業だよ。基本的に現れるのはゴブリンだけど、群れで来る場合もあるから気をつけること。じゃ、任せたよ」

「あア、りよーかい」

刀を腰のベルトに差す。一度鯉口を切って抜刀。太刀筋がブレない。相当の業物のようだ。

(しっかし……魔物なんているんだなア。流石ファンタジー。侮れねエ)

刀哉は改めて自分が異世界に飛ばされたことを認識した。だが、同時に疑問も浮かんでくる。

(なんで俺は異世界なんざに飛ばされたんだ？ ただ屋上から落ちただけじゃねエか。普通は死ぬはずなのに……あー、訳わかんねエ)

いつも使っていない頭を総動員したところで答えなど浮かんでくるはずもない。

とりあえず今は仕事をするという事だけ考えて歩いていく。

村の入り口にある井戸の近くまで来ると、見たことのある赤い頭が見えた。

「よオ、エリー。俺ア一週間程度ここにいるからよオ。なんかあったら教えてくれ。……あア、あとこの村の用心棒として働くからなんかあったら言うてくれよ」

「そうなんですか！ じゃあ、しばらくの間お願いしますね！

……あ、住むところは決まりました？」

「それがなア、仕事は村長サンから貰ったんだが、住むところまでは貰えなくてよオ。仕事終わったら探そうと思ったんだよ」

「あの……もし良かったらうちに来ませんか……？」

「……オマエの家に泊まっていいつつー事かア？」
「はい！」

まさに渡りに船。ありがたい限りだ。しかし……親とか大丈夫なのだろうか。

「ありがてエんだけだよ……親御さんの許可とかあンのかよ？
見ず知らずの赤の他人がいきなり泊まるつつつて許してもらえ
とは思えねエんだけだなア」

「十中八九大丈夫です！ けど、一応聞いてみますね！ お仕事、
いつに終わりますか？」

「この村は夜間の明かりがねエみたいだからなア……日暮れと同
時に終わらせるつもりだ」

「あ、じゃあ終わったらまたこの井戸まできてください！ 私の
家まで連れてきます！」

「お、おオ……頼むぜ」

エリーは一度大きく頷くと走り去ってしまった。何だか物事が順
調に進みすぎている。

しかし、これで一週間分の仕事と住処を得ることができた。なん
とか野垂れ死には避けることが出来たようだ。

「さアて、見回りにでも行ってくるかア」

異世界に飛ばされて動揺していた心も、少しは落ち着きを取り戻
した。例え元の世界に戻れなかったとしても、この世界の方で暮ら
していくことができるーそう思った。

「もオ日暮れかア。特に何もなかったなア……まアいきなり何か起こるなんて思ってたねエけどなア」

沈んでもう見えない太陽。赤い空を見ながら刀哉は呟いた。

今日はこれといって被害は何もなく、平和に終わった。

「さアて、村長サンに報告でもすつかア」

一日の仕事を終えた事を村長に報告するために、彼女の家に向かう。幸い、この村はそう大きくなく、村長の家までそう距離もない。

「オーイ、村長サン。いるかア？」

「ん、誰かな？ ああ、君か」

村長が扉を開けて刀哉の顔を見た。

「とりあえず日暮れだしよオ。一応報告に来たぜ。まア何も無かったんだけどなア」

「そつか。うん。ご苦労様。……そういえば君の名前を聞いていなかったね？」

「あア、そうだったなア。俺ア真田刀哉っつーんだ」

「サナダ、トーヤね。私はシラフィ・トーレストっていうんだ」

「シラフィ、な。あア、ちなみに刀哉が名前だからなア。真田は性だ」

「ほう……珍しいね？ どの出身だい？」

「日本っつーんだが……ここにはねエよなア」

「ニホン……知らないなあ。どこにあるんだい？」

「……異世界、だろうなア。話すと長くなるから話さねエが、気付いたらここにいたんだよ。とりあえず帰る方法探さねエとなア」

なんの躊躇いもなく、自分が異世界の住人だと言っことを話す。
この村長なら特に気にしないだろうと思ったのだ。

「へえ。異世界とはね……まさかそんなものがあるとは。となる
とどういった現象なのかな？ 服装を見る限りこの世界より文明が
進んでそうだけど……」

「あア、ここの世界よりは進んでると思うけどなア……っと、俺
アそろそろ行かなきゃ行けねエな。また明日だア」

刀哉は窓の外がもう暗くなっていることに気付いて慌てた。もう
エリーは井戸にいるだろう。

「おや、住むところが見つかったのかい？」

「そんなとこだなア。じゃあな」

村長の家を出てすぐ井戸に向かう。井戸の近くに人影。おそらく
あれがエリーだろう。

「待たせたなア」

「あ、トーヤさん。お仕事お疲れ様です」

「まア、疲れたってほど仕事してねエんだけどよ。じゃ、まア、早速案内してくれっかア？」

「はい！ こっちです！」

エリーが進んでいくのに倅い、刀哉もそれについていく。

この世界に来てから、自分がだんだん変わっていくのを感じる。

今まで、誰か人と言葉を交わすのはほとんど無かった。あったとしても、その後には必ず喧嘩。会話は喧嘩する前の前座のような物だった。

たった数時間いるだけなのに、何故こうも変わってしまったのか
ー刀哉には分からない。

ただ、一つだけ分かることがあった。

ア
（この世界は……元の世界より、居心地がいいのかもしれない）

郷愁の念は刀哉にはない。

この先、この世界に居続けた方が自分のためにもなるのではない
かーそんなことを思い始めていた。

そう、選択は自分で出来るのだ。

第一章 【慟哭の空】 二（前書き）

こっちの方が執筆スピードが早いのは何故だろう。

村の中に立ち並んだ同じような藁葺きの家の中の一軒。その扉の前でエリーは立ち止まった。ここが、エリーの住む家なのだろうか。他の例に漏れず、裕福でもなく貧困な訳でもない、至って普通の家のような家だ。

これもあの村長の治め方がいいということなのだろうか。若いというのに、なかなか頑張っているらしい。

「トーヤさん。どうぞ上がってください。お父さんとお母さんが待っていますよ」

「ああ……じゃあ上がらせて貰うけどよ。本当に大丈夫なのかア？」

「大丈夫です！ 両親とも優しいですから、まず間違いなく歓迎されますよ？ ささ、入ってください！」

それは優しいんじゃないの、ただ人が善いだけじゃないのかー。刀哉は思ったが、口には出さずに心の中で押し潰した。

「お父さん！ お母さん！ この人がさっき話したトーヤさんだよ！」

「あー……初めまして、真田刀哉ツています。エリーから一週間ほど泊めていただけて事でも伺ったんですけど……」

「ああ、君がトーヤ君か。村の用心棒をしてきているそうだ

ね。そんなお世話になつてる人を泊めない訳にはいかないよ。好きなだけ泊まつていつてくれ……といたいたんだが、残念ながら部屋が空いていないんだ……エリー、トーヤ君といっしょでいいかい？」

「そのつもりだよ！ ね、トーヤさん。いいですか？」

「あ、あア……エリーがそれでいいのなら……」

父親の言葉にエリーは即答。

刀哉は、エリーの勢いに押されて思わず頷いてしまった。まあ別に幼女趣味はないので、特に問題はないのだが……。

「ああ、そうだ、自己紹介をしていなかったね。私は父のアレックス・ルーファだ。よろしく、トーヤ君」

「私は母のリタです。娘が迷惑をお掛けします」

「お母さん！ 迷惑なんか掛けないよう！」

微笑ましい家族の光景。刀哉には無かったモノ。知らなかったモノ。

(羨ましい……のかなア)

遙か昔にソレを望んだ事もあった。しかしそれは、望んだとしても手に入らないものと悟つて、諦めた。逃げ出してしまった。そして刀哉は――壊れた。

刀哉は思う。せめて目の前にいる少女だけは、家族の暖かさを知っておいてほしい。自分みたくにならないように。壊れてしまわないように。

傷付ける事もなく、傷付く事もなく。ただ、幸せに。

「さ、食事にしましょうか。ごめんなさいね、トーヤさん。大し

たもの用意できなくて……」

「ああ、そんなに気を使わないでください。居候させて貰ってる身なので、質素なモノだけで十分過ぎるくらいですよオ」

刀哉が物思いに耽^{ふけ}っている間に、テーブルの上に食事が並べられていた。たしかに現代日本から見たら質素かもしれないが、刀哉にとってはご馳走だった。

学校には行っていた。家族と一緒に家にもせよ住んでいた。しかし、それは家族と言えるような状況ではなかった。

会話もせず、顔も合わせず、ただ一つの家に住んでいるだけの他人。刀哉は深夜まで家に帰らなかったし、親もそれを咎めようとしなかった。

寝るだけの家。食事はいつもコンビニで済ませるか、食べないか。

思えば、誰かが作った温かい食事の記憶なんて、相当遡らなければ見つからないくらいだ。

「ああ……じゃ、いただきます」

合掌、そして自分の食事に手を着ける。……美味い。

「お口にあつたかしら？」

「ええ、凄く美味いッす。久々にこんな美味しいモン食べましたよオ」

率直な、思ったままの感想。本当に、こんなふうに食事をしたのも、こんなふうに人の温かみに触れたのも、久しぶりだった。

しかし、そんな思いとは反対に、哀しい気持ちもある。いままでずっと人を傷付けたこの手が、自分に幸せになる価値などない、そう言っているようだ。

「……」馳走様ツす」

自分に出された分の食事を食べ終えた。今、ここにいるのはツライ。いろんな感情に押し潰されそうだった。

「おや、もういいのかい？ まだ食べてもいいんだよ？」

「あア、いえ、大丈夫ツす。元々そんな沢山は食べないか夕チナンで」

「そうか、それならいいんだ。お風呂には入るかい？」

「……そツすね、お願い出来ますかア？」

「じゃあ用意してこよう。できたら呼ぶからここで待っていてくれ」

アレックスは楽しそうに笑みを浮かべて走り去っていった。刀哉には、その笑みの意味が分からず、一瞬考えたがすぐに考えるのを止めた。いつもの癖である。

「ホントすいませんねエ。何かから何までお世話ソなっちゃって。代わりと言っちゃアなんですけど、何でも言ってください。俺にできることなら何でもしますよオ」

元の世界では荒れていた刀哉でも、お世話になっっている事に対しての礼くらいする意識はある。……とは言え、こっちに来てから性格が丸くなった気もするわけだが。

「いえいえ、村の用心棒というだけで私たちは助かっているのですよ。これ以上を望んでしまったら罰が当たるといふものです」

「そうですよ！ トーヤさんがいることで私たちも安心して暮らせますしね！」

「そういつてもらえると助かるぜエ……………」
「トーヤ君！ お風呂用意できたよ！」

アレックスがニコニコの笑顔で戻ってきた。なにがそんなに嬉しいのか、刀哉にはやっぱり理解できなかった。

「じゃあ、おやすみなさい、トーヤさん」

エリーはベッド横のテーブルに置いてあった蝋燭ろうそくを消した。

「……………あア。その前に一つ聞いていいかア？」
「え？ あ、はい。何でしょう？」
「……………なんで同じベッドで寝てんだア？」
「……………嫌、ですか？」

「ッ！……………嫌じゃ、ねエよ……………」

負けた。何かに負けた気がする。

「良かった！」

「いや、オマエがいいなら、いいんだけどよオ……………」

暫くして、静寂が訪れた。

しかし刀哉は、その静寂を打ち破ってエリーに話しかけた。

「なア、エリー」

「？ なんですか？」

「オマエは幸せかア？」

「幸せ……………ですね。お父さんがいて、お母さんがいて、裕福じゃないけど貧困でもない、普通の暮らしができる事が、幸せだと思います」

「無くすなよオ、その幸せ……………俺みたいには、絶対なるんじゃないぞ」

「トーヤさんは……………幸せじゃなかったんですか？」

エリーに問われたことに対して、過去の記憶が蘇ってくる。

エリーになら話しても問題ないだろう。

「エリー、最初に言っとくがよオ、俺アこの世界の住人じゃねエ。俺が居たのは、地球の日本ツツー国だ」

「宇宙人さん……………ですか？」

「いや、人間だなア。そこからなんでか、わかンねーが、気付いたらこっちに居たんた。俺が話すのはそれより少し前の話だア」

ぼつりぼつりと刀哉は自らの過去を紐解いた。

「俺が生まれたのはなア、真田ツツ一武術と剣術のデケエ道場だった。まア、言ってみりゃア富豪の家に運良く生まれたンだろぅなア」

刀哉は思い出す。自分が壊れる前の事を。壊れることになったあの時を。

「俺が生まれた国じゃ、髪の毛は黒、目の色も黒が普通だったんだ。俺はちよつとした病気でなア、こんな髪と目になっちまったんだア」

部屋は暗くて、刀哉の容姿などエリーからは見えないうかが語り続ける。

エリーは何も言わない。

「誰も悪くねエ。それがあの時の俺には判らなかつた。母親が死んで、やっと気付いたよ。……人ってやつはよオ、異質な物があるとなそれを認めようとしねエ。認めようとしねエのに、そこに異質な奴が居ると、どうしても排除したくなるんだろぅなア。結果俺ア、いじめられた」

びくり、とエリーが震えたような気がした。

「だがなア。運が良かったのか悪かったのか、俺が生まれたのは戦闘技術の名門、真田家だア。物心着いた頃には殆どの技を覚えてたよ。だから、イジメに加担してた奴は片っ端から潰してった。ま

ア俺が暴れればその責任は当然親に行く。父親はともかく、母親はもともと体が弱かった上に俺が心労を掛けちゃったんだア……俺が母親を殺したようなモンだ」

（ここら辺で、俺ア壊れちゃったんだよなア）

「それでよオ、俺ア人を傷付けるってことになンも感じなくなっちゃったア。親とももう数年話してねエ。ただ、暴力に取り憑かれたバケモノだよ俺ア。……壊れちゃったんだよなア」

ねじ曲がった心。もう真っ直ぐには戻れないほど曲がってしまった。

折れた鉄板に付いた折れ目が消えないように、この過去はもう消えない。

「だからよオ、オマエは俺みたいに曲がって生きるなよオ？ ……

…エリー？」

「……すう……すう……」

「寝てンのかよ……まア、いいかア。……こいつは、曲がらねエよなア」

窓からはいる微かな月明かりが、エリーの顔を照らす。穏やかな寝顔は、刀哉の濁いた心を少なからず落ち着かせた。

（明日は村長サンにでもこの世界の常識を教えてもらうかア）

刀哉は明日すべきことを頭の中で反芻して、眠りについた。

明日は、きっと晴れるだろう。

第一章 【慟哭の空】 三（前書き）

コメントとか、欲しいなあ。

…ほしいなあ

人を初めて殴った時、凄まじい罪悪感が襲ってきた。

他人を傷付けた。

他人の血が手に付いた。

自分の手が熱い。

自分の身体が熱い。

他人が倒れた。

血を流して。

――人殺シ

「ッ！ …… ハア …… ハア …… なんだよ、夢かよオ ……」

窓の外は明るい。ここにきて不便に思うのは時間が判らないことだった。とはいえ、アツチにいたときも特に時間を気にしていなかったため、なにか弊害があるわけではなかった。

「クソ、嫌な夢だなア畜生 …… てか、なんか重てエな …… ってエリーかよ」

どうも重いと思ったらエリーがくっついていて。そして離れない。

(俺ア抱き枕かア？)

引き剥がそうと試みってみるが、がっちり手を回されて動くことが出来ない。

今の状態を説明すると、仰向けになっていた刀戟の上に、エリーが覆い被さっている体勢になる。寝息を立てるエリーは可愛らしいのだが、起きてほしい。

「オーイ、起きろオ ……」

「んー …… じゃ」

(にやって何だア?)

とりあえず判ったことが一つ。エリーに起きる気は全くない。引きずっていくか。

「ッたくしょうがねエな」

刀哉はエリーを抱っこする形で起き上がった。未だ起きない。仕事もあるし、仕方がないのでそのままリビングに降りていく。

「あア、おはようございます」

「あら、起きられましたか。……あら?」

「あア、エリー、起きないんですよ。離れてくれないし起きないし。だからそのまま連れてきました」

「迷惑かけないって言ってたのにねえ。困った子だわ」

「いえ、これくらい何でもありませんよ。こいつ軽いですしねエ」

「これでも一応13歳になるんですけれど……」

驚いた。まだ10歳くらいだとばかり思っていたため、少なからず動揺した。リタの口振りから、同年代くらいの間でも小さい方なのだろう。

「まア、子供の成長なんてすぐですからねエ。あっという間にデカくなると思いますよオ」

「そうだといいのだけど……あ、トーヤさん、お昼はどうします? よろしければお弁当かなにか作りますけど……」

「あア、いえ、そこまでしてもらわうわけには……でも、そうツすね、一度帰るので一緒にいてもいいツすか?」

「そうですね。わかりました! では時間になりましたらエリーに呼びに行かせますね」

「助かります。……で、コイツ、どうしますかア」

未だくつついて離れないエリーを見る。本当は起きているのではないか、と疑うほどにつかむ力が強い。これでは仕事にも行けない。

「ああ、これ、コツがあるんですよ。この耳の所で……ふー……」

「ひゃあんっ」

「……おオ、すげエ」

さすが母といったところか。一撃でエリーを起こしてしまった。今までの苦労はいつたい……。

「はれ？ トーヤさん……？ って、はわわっ！」

意識が覚醒したとたん、エリーは、ずささっ！ っと後ずさりした。

「ここまで露骨にやられると少し悲しいものがある。

「んじゃア、仕事行きます。」

真っ赤な顔をして隠れている（つもりの）エリーを一瞬見るが、すぐ家を出た。

「こんちゃツす。なんか問題ないっすかア？」

畑で農作業をしているオジサンに話しかけた。この村では基本的に自給自足。たまに手に入らない香辛料や金属類、それに米が商人

によって運ばれてくる。

「ああ、用心棒の……トーヤ君、だっけ。こっちは特に問題ないよ。魔物も日が高い内は来ないからね。来るとしたら逢魔が時——日暮れかそのあたりだろう」

「なるほどオ。ンじゃ、俺ア村長サンとこいるんでなんかあったら村長サンのとこまでどーぞ」

「ああ、わかった。じゃ、私は仕事に戻るね」

オジサンはそう言って黙々と農作業を続ける。刀哉もこれ以上話すことが無かったため、村長の家に向かう事にした。

「村長サン？ 起きてるかア？」

昨日と同じように扉をドンドン叩く。

「そんな乱暴に叩かなくても聞こえてるよ……どうしたんだ？」

「俺が異世界から来たつてのは言ったよなア。そんで、俺アこの世界の常識を知らねエ。そんな訳で村長サンにご教授頂こうかと思つてよオ」

「なんだそんな事か……まあ入りなよ」

村長は体を扉からずらして刀哉を招き入れた。刀哉が異世界人というのもう興味がそられる対象ではなくなったらしい。その証に、心底面倒くさそうである。

「はい、お茶。……それじゃ、何から話そうかな……」

村長——シラフィは少し思案した後、ぼつり、ぼつりと話し始めた。

この世界は、神の化身だ。

この世界に生ける生物は全て、この星の恩恵を受けている。

神は平等で、公平で、それ故に無慈悲で、無関心だ。しかし人は弱い。神は仕方なく助けを出した。

世界に四柱の精霊王と大気を満たす精霊を作り出して、人に力を与えた。

人はその力で精霊の力を使う。それらを総称して魔法と呼んだ。魔法と言うのはいくつか分かれているが、ここは割愛させてもらう。ほとんどの一般人は知らないことだから常識とは言い難いからね。

魔法というのは誰にでも素養があるけど、誰にでも使えるわけではない。魔法を使うには世界を感じ、精霊を感じ、己の魔力を感じなければならぬ。

感じ方は人それぞれ故に、コツなんて物は存在しない。だから自分自身で見つけなければならぬんだ。

だから魔法使い、魔術士とも呼ばれるがーこの存在は少ない。とは言っても人口の三割近くはいるけどね。

この魔術士が魔法を使えない人間の生活基盤を作る。君は疑問に思ったことはないかい？水はともかく、火をどうやって起こしているのか。

それは全て魔術士がやっている。各家庭に一つずつ、百年は消えない火種を与えて生活することが出来るようにする。この火種は一米ートル以上燃え広がる事が無いように記憶をさせてからね。

大きな魔法の火は太古の魔術士が置いていったと言われているよ。

そして次に、魔物だ。

これに関しては発生した期限が分からない。いつの間にかいた存在だったとしか言えないね。この魔物にはランクがある。DSSSまでだね。

中には人語を解したり魔法を使ったり、知能の高い魔物もいる。こと魔物に対しては、討伐を仕事にする人もいるからね。そのための組織、ギルドが作られている。

後は、魔族かな、

魔族といっても別に魔物と同種と言うわけではない。れっきとした人間さ。ただ、普通の人や魔術士にはない特殊な力ー超能力を持っている。

特徴としては、赤い目だね。赤という色が血を連想させて嫌悪を生んだ。幸いにもこの村には魔族がどういったものか知るものはない。

かく言う私も魔族だからね。

「……ーとまあ、こんなところかな？」

大体の事は話した、といった顔をしてお茶を一口すすった。

「赤い、目……でもアンタは黒じゃねエか。それに俺は……」

「ほら、これでどうだい？」

ずっとシラフィは自分の目の前に手を一瞬かざす。再びその目が現れた時、色は赤になっていた。

「私は魔族だよ。トーヤ君は異世界人であるから、こちらの常識が通じるか分からない。私が君に何か力があるか見ようか？」

「あ、あア……って、んな事出来んのかよ？」

「それが私の力だからね。人の意識に侵入して支配する。それが本来の使い方だけど、すこしヒネれば深層意識に侵入して能力の判別をするくらいワケないよ。さ、こちらへどーぞ」

椅子の方を差し座ることを促す。だがここは従うほか無いだろう。

「ツたくよオ……手短に頼むぜエ」

「お任せを。んじゃ、深層心理の世界に失礼しまーす」

シラフィが目を合わせた瞬間、視界がブレた。意識が遠のいていく。

強制的に意識を閉ざされるような感覚。抗う事も出来ず、それに

身を任せる。そして意識が飛びそうになったところで、突然解放された。

「はあっ……はあっ……君は、一体……」

「なんだよ、何が見えたんだア？」

「……喰われそうになった」

「はア？　なんだそりゃア？」

「だから、喰われそうになったんだよ。君の深層心理に侵入を果たしたところまでは良かった。だがそこから先、深層心理の無意識を覗き見ようと思ったら、何かがあった。普通、無意識を覗き見るためには意識を掌握しなければならぬ。しかし、掌握するつもりが逆に掌握されて、私の意識が喰われるところだったんだ……」

「つまりあれかア、結局何にも判らなかつたつー事かア？」

「ああ、そうだよ……トーヤ君、君はとんでもない力を秘めているだろう。いずれこの星さえも破壊できる力を手に入れるかもしれない……」

シラフィは脂汗を垂らしながらこつちを見てきた。

「そんだけわかりゃアいい。悪かったなア。じゃ、俺ア仕事に戻るわ」

「あ、ああ……そうだ、これが昨日の分の報酬。ほんとは昨日渡すべきだったんだけど、つい、忘れていたよ」

「ああ、くれんのか？　まあくれるつーなら貰つとくかア」

小さな袋に入った貨幣が、揺られて音を立てる。

刀哉はそれをポケットに無造作に突っ込んだ。

「ああ、今日はもう仕事に戻るからいいけどよオ、明日は貨幣の

レートと国政、世界の情勢を教えてくれるかア」

「ん、わかったよ。じゃ、今日も仕事終わったらここまで来てくれ」

出て行く背中にかけられた言葉に刀哉は反応せず、片手をひらひら振って村長の家から出た。村長の家から出ると、朝よりも強くなつた日差しが刀哉に降り注いだ。

アルビノ……色素欠乏症がいくらか軽度だからといって、この日差しはツライ。皮膚がチリチリと焼ける感覚がする。

「街に行ったら服買うかア」

刀を腰に差しながらゆっくり歩く。畑仕事をしていたオジサンも言っていたが、日中はあまり魔物が出ないのだという。

ぐるりと一度周りを見渡す。魔物は居ないようだが……何故か人の姿が少なくなっている。

(もしかして……昼かア?)

はっとして、村の入り口の井戸まで走る。刀が揺れて若干邪魔だが気にしていられない。

「あ！ トーヤさん！」

「エリー……もう飯なのかア？」

「はい！ ご飯用意できましたので呼びに来ました！ さ、行きましょう！」

「あア……悪いなア、待ったろ？」

「いえ、呼びに来たらちようどトーヤさんが走ってきたので全然待ってないですよ」

ニコニコしてエリーが答える。そんな笑顔を見て刀哉は思った。

（あア、嘘じゃねエらしいなア。まア、コイツが嘘なんてつけるとは思っちゃいねエけどなア。……つたく、純粹なのは、羨ましいなア）

エリーの家、ルーファ家の前まで来たところでいい匂いがしてきた。この匂いがまた、刀哉の空腹を誘う。

「じゃ、まア、メシ食うかア」

「はい！」

エリーがドアを開けて、刀哉はそれに続く。
中には笑顔のアレックスとリタがいる。

「ー守りたいと、思った。たとえ自分が人を傷付けた人間だとしても。」

第一章 【慟哭の空】 四（前書き）

話がこっちの方が書きやすい…
ルークスが進まない…

何故？

第一章 【慟哭の空】 四

「お仕事、どうですか？」

「まア、今のところ何もありませんねエ。リタさん、も何かあったら言ってください」

昼食を食べ終わって、お茶を飲みながら一息つく。

「私からは特には何もありませんね。あ、そうそう、いつもでしたらそろそろ魔物が来てもおかしくないですから、気をつけてくださいね」

「そろそろツすかア。たしか来るのは日暮れあたりでしたツけ？」

オジサンが言っていた言葉を思い出して言う。やはり魔物というのはイメージ通り闇に生きる種族らしい。

「そうですねえ。それでめ稀に昼間来る魔物もいますからね。見回り、お願いします」

「あア、わかりました。……ンじゃあ、そろそろ行ってきます」

「はい。それではまたエリーを迎えに行かせますね」

「あ、いえ、大丈夫ツす。仕事終わったらそのままここ来ますから」

「そうですね？ わかりました。気をつけてください」

「お仕事頑張ってくださいね！」

「あア、行ってくるわ」

家のドアを開けると眩しい光が刀哉を照らした。それを手で遮りながら村の入り口に向かって歩く。村の入り口の近くには井戸に水を汲みに来た人たちがいる。

「あー、スイマセン、この辺に人が来なくて少し広い場所ってないツすかア？」

「広い場所かい？ それならあっちだねえ。村からでちやうから少し危ないけど大丈夫かい？」

答えてくれたのは気が強そうな、オバサン。こういうタイプは必ず^{かっぶく}恰幅がいい人というのが相場だと思っていたのだが……

（どうやら例外がいるみてエだなア。まア、この村の質素な食事が太るのを抑えてるンだろうな）

「あ、アンタもしかして用心棒さんかい？ あっはっは！ よろしく頼むよ！」

バシバシと刀哉の背中を叩く。テンションが高い。そして痛い。

「あア、はい……じゃ、俺ア行きます」

言うや否や、言われた通り村の外に向かって歩き出す。後ろの方では未だにオバサンの笑い声が聞こえる。

「……ノリが分からねエよ」

しばらく歩くと、開けた場所に出た。ここがオバサンの言った所だろうか。

「ここなら……邪魔されねエな」

腰に差していた刀に手を掛ける。

そのまま、抜刀。

鋼鉄の刃と鞘が擦れて鋭い音が辺り一面に響く。

流れの動きで刀を返し、手首をクロスさせた上段の構え。そこから大きく袈裟斬り、返す刀で逆袈裟斬り。半歩下がって中段に構える。

「……マトモに刀振ったのは久々だなア。最近は鉄パイプやらなんやらで片手でしか使ってたからなア……」

ひゅっ、ひゅっと風を斬る音が断続的に響く。過去の記憶を呼び覚ます為に基本的な動きだけを繰り返し返していたのだが、思いの外体が覚えている。それに――体が付いてくる。いや、それ以上だ。

「ちゃんとした稽古してなかったからとつくに衰えたと思ってたんだがなア……これなら、少しくらい技使っても問題ねエかな」

刀を一度収める。そしてもう一度ゆっくりと刀を抜く。

中段の位置まで刀を持ち上げ、捻り、左肩の上の位置で止めて構える。

目を閉じて、呼吸を整えた。ゆっくり息を吸って、体の隅々まで通すイメージ。そこからまたゆっくりと吐く。

目を開き、刀に力を入れた。

「初曲・閃花」

たん、たん、たんー

リズムを刻んで舞う。最初の足運びで体を捻り回転して虚空を斬る。次の足運びで逆回転。3つ、4つ、5つー一つ一つの動き全てが違う。しかし、繋がっている。娯楽として世に出ている剣舞とは一線を画す、流れる動きで翻弄し、確実に仕留める真田家独自の剣術。一人が相手だろうと複数だろうと相手を死に導く業。

争いのなくなった現代日本で街の喧嘩相手を倒すのには鍛えた胴体視力だけで十分。しかしこれから先はそうは行かないだろう。

「初曲・閃花・絶」

流れの終わり、左に体を捻り、1秒にも満たない時間、瞬間的に力を溜めて解き放つ。

全方位に向けて一回転。

足元から土や草が千切れて散った。

「……なんだア？ こんな威力強くなかった気がしたんだけどなア」

周囲を斬った衝撃だけで風が起こるなんて今までは無かった。来たときから感じていた事だが、これはー

「身体能力が向上、してるツツーことかよオ。……まあそうじゃねエと説明がつかねエけどな。ツたく、どうなってんだかなア」

一つの技を終えて、刀を鞘にしまう。鋼と鞘が触れて音を立てた。

「ツーか……腰に差すの面倒だなア……普通に手で持ってるやい

いかア」

刀を腰に差すのを止め、左手で持つ。

「一気配。

「……出て来いよオ。隠れてんじゃねエ。バレバレなんだツツ」の

ガサリと草むらが揺れて、人の半分程度のイキモノが出てきた。手には棍棒らしきものを握っている。おそらくこれがゴブリンとやらだろう。

「へエ……一匹だけかア？ まあいいや。死ねよ」

刀哉が向けた殺気に危険を感じたのか、ゴブリンは棍棒を振りかざして向かってくる。

刀哉はそれに慌てる事なく、腰を落とし、抜刀の構えを取る。ごく冷静に。

「ギイツ」

ゴブリンは刀哉の胴体を狙い棍棒を横に振る。対峙する刀哉はギリギリまでゴブリンを引きつけて――

「一閃」

居合いの要領で刀を引き抜く。鞘走りを利用した高速抜刀術。狙い澄まされた凶刃は棍棒すら切り裂き、ゴブリンを二つに切り落とした。

血飛沫も飛ばず、ただ崩れ落ちたゴブリン。切り裂かれたゴブリンから、ゆっくり血が広がり、大きな血溜まりが出来た。

「なんだア？ 呆気ねエな……」

刀に付いた僅かな血を振って落とす。

イキモノの命を奪うのはこれで二度目。壊れた刀哉の心が揺れ動くことはない。命を奪うことに、なんの躊躇いも無くなってしまっている。

「……村に戻るかア」

元来た道を引き返す。日はだいぶ傾いていた。

「ここを……こつしてつと……」

外はもう暗い。村長への報告をすませた後、家に戻って食事と入浴を済ませた。まだ寝る時間ではないし、エリーも風呂に行っているので、空いた時間を利用して刀の手入れをしていた。

「よオし、外れた」

刀を分解し、目釘や鰐を外された鋼鉄の塊が姿を現す。

銘と刀匠の名が入られている部分には、見たことのない文字が彫られていた。

(見たことがねエのに……読める?)

不思議に思いながらも、彫られた文字を読み上げる。

「刀匠の名は……ヒザキ？ 銘が……カエデ。……楓かア。それにしても、この世界には漢字ツツー概念はねエのか？」

異世界なのだから当然かーなどと思いながら、刀に付いた血を拭き取っていく。拭き取った刃に浮き出る波紋。緩やかな乱れ刃。この乱れ刃が楓という銘の由来なのかもしれない。

「……いい刀、だと思っただがなア」

自分には刀の良し悪しなどは分からない。故に、振った感覚で良し悪しを決める。だがこれは、美術品としても一級ではないかーそう思う。

刀をあらかた拭き取ったところで、元に戻す作業を始める。

丁寧に、一つずつ。

「さて……終わりつとオ」

全て戻して刀をしまう。

それと同時に部屋のドアが開いた。

「お待たせしましたー」

頬を赤く染めながらエリーが入ってきた。髪が全く乾いていない。

「オイ……髪乾いてねエじゃねえか。タオル貸せ。こっちこい」

半ば強制的に連れてきて髪を拭いてやる。エリーのような長い髪は1人ではしつかり拭けないのだろう。

「……そオいえばよオ、昨日俺の話聞いてたかア？」

ふと、昨日エリーが途中で寝たことを思い出して聞いてみる。

「えとー、トーヤさんが宇宙人さんだっっていう所までですか……」

どうやらあの時びくりと震えたのは、寝ているときに良く起きるアレらしい。

「……異世界人だ。宇宙人じゃねエ。……まア聞いてなかったらそれでもいい。でもな、これだけは覚えとけよオ？ “今の幸せを逃がすな”……それだけだア」

「あ、はい……わかりました！」

「よオし、いい返事だ。ホラ、拭き終わった。寝るかア？」

「はい！ ありがとうございます！ それじゃ、寝ましよう」

エリーがベッドに潜ったのを確認して、唯一の光源である蠟燭を消す。ランプといるのがあることにはあるらしいのだが、この部屋には無い。若干不便だ。

「今日みたいに抱き枕にすんなよオ？」

「し、しませんよ！今日は……その、たまたまです！」

「そオか、たまたまかア……まア、いいや。そついや、なんで俺に敬語使うんだ？」

「え？いえ、年上ですから敬語は当たり前じゃ……」

「ガキが敬語なんて使わなくていいんだよ。それに俺が気持ち悪い」

「が、ガキじゃないですっ！ですから敬語も使えます！」

「ほオ……敬語止めねエってか。それなら……こつしてやる。…

…ふー」

「ひゃわっ」

ベッドの中で暴れるエリー。リタと同じ事を行ったのだが、効果は予想以上だった。

「さて……敬語、やめるよなア？止めねエならもう一回……」

「や、止めます！止めますから止めてくださいい！」

「止めてねエじゃねえか」

「や、止めるよお……これでいい……？」

「オーケー。じゃ、寝るかア」

「わかりまし……じゃなくて、わかつた！」

「よしよし……お休み、エリー」

「うん！お休み！」

静寂が訪れる。

この村をでるまで後5日の予定。

エリーヤ、シラフィ、アレックスやリタと分かれるまで、あと5
日――

第一章 【慟哭の空】 五（前書き）

矛盾を発見しましたので
修正して再投稿しました。

第一章 【慟哭の空】 五

「……さて、始めるかア」

エリーが起きないようにこっそりベッドを抜け出す。幸い今日は抱き枕にされてなかったので比較的簡単に抜け出せた。ベッドのすぐ近くに立て掛けてあった刀を手に取り、忍び足で部屋を出る。

「んむ……」

「ッ！……ンだよ、寝言かア？」

エリーが起きてないのを再確認して部屋を出た。

「まだ少しさみいなア」

刀哉は昨日来たあの空き地（？）に来ていた。この世界ではいつも以上に力が出せるとはいえ、何が起こるか分からない。ある程度は鍛えておかないと死ぬことになる可能性だってあるのだ。

「さあて……始めるかア」

左手に持っている刀――楓を抜いて、鞘を放り投げる。

まずは中段に構えて集中。

目をゆっくり開いて、仮想の敵をイメージする。

腕を捻り、刃を上に向ける。

「はアッ！ せいッ！」

左、右、上、下――あらゆる方向に白刃が軌跡を残す。

刀哉以外には誰もいない空間に、空気を斬る音と刀哉の声が響く。

「……あと5日、かア」

少しだけ、寂しくなった。

（自分でも気付かねエ内に、居心地良く感じてたッてことかよ）

雑念が混ざって少し剣筋が乱れた。刀哉はそれに気付いて、また集中する。

「……今日はこんなモンにしとくかア」

刀を振るのを止めて、鞘を取りに行く。黒く塗られた鞘に、刀をしまう。

刀を左手に持って、森を出た。

「あ、おはようございます。今日はお早いですね」

「あア、ちょっと体を動かさに行ってきたンですよ。どうも最近鈍ってる気がしてね」

「そうなんですか？ では汗もかいているでしょう？ お風呂に入りますか？」

「あア、いやいや、そこまでしてもらわなくても大丈夫ツす。思ったより汗はかかなかったし、どうせ夜になるまでに汗かきますから」

居候の穀潰しの立場でそこまでお世話になるわけにはいかないと思ひ辞退する。

少しくらいはお金を渡した方がいいのだろうか。いや、しかしこの村ではお金が殆ど使われていない。ということはそこそこ大きい所に行かなければお金は意味を持たない。

刀哉はお世話に泣いている代わりにお金を渡すという案をボツにした。

「そうですか？ それなら良いのですけれど……あ、ではご飯にしますか？」

それならばありがたいと、その提案に乗る。

「ンじゃあ、お願いします。何か手伝うこと、ありますかア？」

「いえ、大丈夫ですよ。少しの間待っていてください」

「あー、じゃアエリー起こしてきます」

「ふふ、ありがとうございます。ではお願いしますね」

「承りましたア」

階段を上がって部屋の扉を開けた。エリーはまだ寝ているようだ。

(まア、寝る子は育つツてよく聞くしなア。……それともただ単に朝が弱いただけかア?)

もう忍び足をする必要が無いので、足音を気にせずベッドに近づく。これで起きればよし、起きなければ、アレをやればいいだけだ。

「まア、当然のごとく起きねエよなア……仕方ねエ、やるか。…

…ふー」

「ふにゃあつー!？」

「よよし、起きたな。朝ご飯だから行くぞ？」

「はれ……? トーヤさん? ……ってもう朝ですかあ!？」

「敬語」

「あ……ごめん。忘れてたよお」

頬を赤らめてエリーが笑う。

可愛いと、すこし思ってしまった。

「ツたく、ホラ、下行くぞオ」

「ま、待ってよう」

慌てて付いて来るエリーを横目に見ながら、階段を降りていった。

「ンじゃ、仕事いつてきます」

朝食を済ませて刀を手取る。

「はい。お気をつけて」

「お昼になったらまた呼びに行くね！」

「あア、頼む」

「トーヤ君、ちょっといいかな？」

「アレックスさん？ あア、じゃ外出ますか」

アレックスが纏う雰囲気真剣なものを感じ取って、外に出るよう提案する。アレックスはすぐそれを了承して、二人で外に出た。

「て、どうしたんすかア？ なにかマジメな話なんでしょう？」

「君が聡い人間で助かるよ……昨日、深夜に村長から報告があった。どうやら敵国の一団がこちらに向かってきているらしいんだ。この村は国境に一番近い。狙われるには十分な理由だろう。敵の数は少ないから、おそらく先遣隊だろう。この村はここままでは滅びる。持ってあと4日……」

「この村には戦える人間は？」

「実際に戦ったことがある人間など1人もいない。だから君は、先に逃げー」

「なるほどオ。じゃあ俺が守ります。一週間も泊めてもらおうだア、このくらいしなないとねエ？」

アレックスの話を遮って刀戟が口にした言葉ーそれは、力を振るうという宣言。

「ば、バカな！ 少ないとはいえ百人近くもいる兵士をどうやって！ 私達もすぐ逃げる。君は早くこの村を出てー」

「アレックスさん、ソイツは嘘だア。4日ある。ならみんな一緒に逃げてもおかしくない。途中で分散するならまだしも、時間差で逃げるなんて、囷になるって言ってるようなモンだよなア」

そう、アレックスは嘘を吐いている。言葉の端々から綻びが見つかる。

「それにこの村には馬もねエ。百キロ離れた街まで徒歩かア？

食料は？ 水は？ 魔物がいるのに何の装備もなく野営？ ーア
ンタ、死ぬ気だろオ？」

「……ああ。せめて私達が囷になっていれば村の殆どは助かる……
エリーやリタだって死ぬことはないんだ……だから、トーヤ君には逃げ出す村人の護衛をしてもらいたかった……」

アレックスは俯いて事実を話した。しかし、その考えを刀戟は良しとしない。

「俺が、守ってやるよオ。あア、もちろん協力はしてもらおうけどなア」

「しかし……どうやって……」

「任せるオ。俺アちよつと村長サンとこ行つてくるからよ」

答えを待たずに村長の家に向かう。現実を知った今、一分一秒が惜しい。

「村長オ！ 出て来い！」

いつもより強く、激しくドアを叩く。これなら寝ていても間違いない。なく起きる。

「朝からうるさいね……どうしたんだい？」

「しらばっくれんな！ ネット上がってんだよ！ テメエ戦わずに村人見殺しにする気かッ！」

「逃がす、と言ったはずだがね……」

「逃がすだア？ 途中で追いつかれるか、野垂れ死ぬかのどっちかだろオが！」

「へえ……じゃあ君には他にいい案があるのかい？」

刀哉の剣幕に全く怖じ気づくことなく、ただ淡々と質問を返してくる。

「先遣隊ごとき、潰しやアいいだろオが」

「その間に本隊が来たら？」

「来る前に救援を要請すりゃいいだろ。時間は有るんだ」

「ふ……ふ、いいだろう。トーヤ君。君の案に乗るよ。かつて【誘惑支配者】と呼ばれた私の能力彼らに味わって貰おう」

「そんじゃア、出始めに村人を全て集めてこの事バラせ。事前に知って置いた方が動揺は少ないだろオ？」

「ふふ……はははは！ 君は一体何者だい？」

「俺かア？ 俺アただの人間だよ。心に欠陥を抱えた、なア」

暫くして、村長の家の前に村人全員が集まった。今この村に迫っている危機を村長に打ち明けられ、村人は動揺している。無理もない。村長から告げられた言葉は、いわば死を示すものだから。死にたくない者は逃げることを。起死回生を願い戦うことを願う者にはともに戦おうという意志を。

「はは、見事に動揺しているね。これでは戦う以前の問題ではないかな？」

「だったら奮い立たせりゃいいだろオ」

刀哉が村長を後ろに下がらせて前にでる。そしてありったけの声を
出して叫ぶ。

「聞けエ！ お前らは逃げたきや逃げろ！ 全部俺が殺る！ 俺
ア逃げねエ！ この村には世話ンなつたからなア！ 俺と共に戦つ
意志がある奴ア来い！ これだけはテメエらに言つとくけどよオ！
逃げても追いつかれて殺される！ ここにいても何もしなけりや
死ぬ！ どつちか選べエツ！！」

しん、と静まる。

「……へえ………凄いね。君は人身掌握の術でも心得ているのかな
？」

「ンなモン知らねエよ。つーかよ、シラフイ、テメエがチカラ使
えば一発なんじゃねエの？」

「私の力は仲間を傷付ける為に非ず。私に敵対する者を徹底的に
苦しめるために存在するんだ。故に、私に楯突いた敵は――生きな
がらにして地獄を見る」

「おオ怖。そオいや、攻めてきたのはどこだア？ 説明求む」

「そうだね………国から説明しようか」

この世界は三つの島の中にある六つの国家で形成されている。――

つはどこの国にも与することなく、どこの国にも争いを仕掛けない完全中立国家、東の海に浮かぶワコウ。

二つ目は圧倒的な技術を持ちながら人々に嫌悪され閉鎖的になった、西の海に浮かぶ魔族の国、シン。

そして一つの広い島に四つの国。

東のルノー。

西のザカ。

南のジュレル。

北のフェルディ。

私たちの住む国はジュレル。そして今回攻めてきたのはザカだろ
う。あの国は比較的好戦的であるからね。

好戦的ということは兵士も強い。今回の戦いは苦戦を強いられる
ことになるね。

「はッ……なアシラファイ、一騎当千ツて言葉知ってつかア？」

「む？ なんだいそれは」

「一人で千人を葬ることが出来る人間のこと。もしくは一人で千
人の力をもった人間のことだア。自惚れる訳じゃねエが、俺アそん
だけの戦闘技術を持つてるつもりだア」

ちゃきりと左手の刀が音を立てた。

「それは心強い。となると私とトーヤ君が組めば無敵、といったところかな？」

「ハハハ！ 期待してるぜエ」

戦闘開始まで、あと4日――

「オオ、どんくらい集まるかなア？」

第一章 【慟哭の空】 六（前書き）

もうすぐ一章終わるんじゃないかな？
とか思いながら書いてます。

少しずつ読者数が増えてくこの感動、プライスレス

第一章 【慟哭の空】 六

「なるほど……集まったのは4世帯、15人ねエ。まあいいか。他は全員村の外だな？」

あの宣誓からしばらく時間が経った。村からは人の気配が薄くなり、残った人間は僅か一握り。

「おそろく、ね。とはいえそこまで遠くへは行けないと思うよ。なにせ当初護衛にする予定だった君がいないせいで村人には魔物に対する戦力が皆無だ。今頃街道で立ち止まっているだろうね」

「まあ、これから戦闘が起きるツツーのに戦意がない奴がいても困るしなア……ツて、エリー？」

集まった村人の中に見知った顔を見付けた。どうやらルーファ一家は村から出なかったようだ。

「トーヤさん！」

「エリー……なんでオマエ逃げなかったんだア？」

「だってトーヤさんが言ったんだもん。村の外にいても死んじやうって。だから私、トーヤさんを信じる。この村を守ってくれるって」

信頼されている。たかが2日、3日一緒にいただけの余所者を信頼してくれている。

ならばすることは一つ。

「そうかア……なら、それに応えなきゃなア？」
「うんっ！」

エリーの笑顔が眩しく感じる。この笑顔を、守らなければ。――たとえ、他の誰かが犠牲になっても。自分の身を犠牲にしても。

(いつから俺に自己犠牲の精神が身に付いたんだかなア……)

自分の変化に首を傾げる。

「……私は、何をしたらいいんだい？」

エリーと一緒に近づいてきたのはアレックスだった。

「アレックスさん……やってもらいたいことはたくさんありますよオ。それじゃ、始めますかア」

喧嘩しかしたことのない素人が、一体どこまでできるのか。刀戟は産まれて初めて、何かを守るために力を使う。

「いいかア！？ まず男と女に別れてくれ！ 別れたら代表は1人ずつこつちに来ること！ やる仕事を伝える！ 始めエ！」

「ふふ、何をする気かな……？」

「それは見てからのお楽しみみて奴だぜエ？ それより、地図はあるかア？ あと村の見取り図もあるといいなア」

「ああ、それならここにあるよ」

後ろにあった袋から二枚の紙を出した。一枚は、村を含めた周辺数キロの見取り図。もう一枚は世界地図となっているようだ。

「シラフィ、敵はこの国境側から来るんだな？ で、この村は国境側から見ると森ばかり。となると村の入口、真正面からはこねエだろうな」

「その通り。入口は街道に繋がっているから他は全て森だよ。隣国に行くには決められた街道がある。だから、この村を襲うとしたら国境側の森から来るだろうね」

地図に攻めて来るであろう予想ルートを書き込む。森から来るという事は、敵が予想より少なくなるのではないかーそんな期待を抱かせる。

だが、それは実際見てみなければ分からないだろう。安易な憶測は危機を招く。

「シラフィ、この村に移動手段はねエのか？」

「馬が一頭、私の家の裏にいるよ。昔私が流浪していたときの相棒さ」

「よし、なら誰か1人、国王に伝えに行ってくれ。出来るだけ早く。うまく行けば先遣隊が来る前に救援が来るかもしれねエ」

そうでなくとも、先遣隊の次は本隊だ。そうなったら絶対に勝つことは出来ない。

「さア……俺とシラフィは装備探すぞ」

「探すって……どこをだい？」

「シラフィの家だよ。刀があったんだ。防具や他の武器も少しはあんだろ？」

「ゲホっ……こりゃア、何年間放置したらこうなるんだア」

村人たちに指示を与えた後、刀哉とシラフィは村長の家の物置―もとい、埃が山のように積もった部屋を漁っていた。物を漁る度に埃が舞う。それが呼吸と共に入ってきて咽せてしま

う。
「シラフィ、なんか口に巻く布とかねエか？」
「あるよ。少し待ってて」

シラフィが布を探しに戻った後も、手当たり次第に武器や防具を探す。

「トーヤ君、あつたよ。ほら」
「ああ、悪いな。シラフィ、これ見てくれよ」
「これは……剣かい？」
「ああ。十分な数あるなア。男にはコレをもたせりゃいい。……こっちは弓矢かア？ 女はコレだな」
「まさかこんな物があるとはね……私はこれがいい」

シラフィは箱の中に入っていた剣を一振り出した。
さほど長くなく、女性でも片手で扱うことのできる剣――細剣だ。
レイピア

「そんなモンどうすんだア？」

「私の能力を忘れたのかい？ 無抵抗の相手に死に至らせるのはこれで十分。あまり大きくても扱うのに困るしね」

「なアるほど。……さて、これを人数分運び出すぞ」

剣を持てる男は六人。弓を使えるのは五人。これならひとりでも運び出せるだろう。

「シラファイ、コイツを家の前に運び出しておいてくれ。矢はけっこう量あるから数回に分けてくれていい。俺ア防具と他に使えそうなモン探す」

「りょーかい。じゃ、そっちは任せるよ」

シラファイから貰った布を顔に巻いて、探すのを再開する。

武器があつたという事は、対になる防具もあるはずだ。刀戟は武器の入っていた箱の近くから、もう一度手当たり次第に開けていく。

「これも違う、これもだア……絶対あるはずだ。こっちはどうだア？」

武器の入っていた箱より少し奥。今まで見てきた箱よりも一回り大きい気がする。

「ビンゴオ……しかも甲冑じゃなくてラフなタイプじゃねエか。好都合だな」

箱の中は一見ただの服にも見える、簡易型の鎧。下地は革で覆い、心臓などの急所の部分には鉄が充てられている。

その他にも籠手や脛当てなど、フルセットで揃えられていた。

「おオ、ご丁寧に剣士と弓使い用、両方あるじゃねエか。歴代の村長はずいぶん用心深かったんだなア」

剣士と弓使い用の鎧を人数分抜き出して、物置を出る。
物置は荒らしたまま放置。

「おや？ その手にあるモノを見ると……防具はあつたみたいだね」

物置を出ると、武器を置いて戻ってきたらしいシラファイがいた。

「まアな。しかし、なんでこんなモンあるんだろうなア」

「二代前の村長が現役の頃、戦争が激化していたからね。戦場が遠いとは言え、備えておくに越したことはない……とか、そんな理由じゃないかな？」

「まアいいか。大切なのは、今どうするかだしなア」

剣や弓が置いてある所に鎧も一緒に置く。

「よオし……作業も順調、差し当たって問題はねエな。シラファイ、そういうえば早馬は出したのかア？」

「ああ。青年を一人行かせた。順調に行けば王都まで1日半。青年には私からの要請書を渡して、国王に届けるよう言った。届けたらすぐ帰るようにもね」

「上等。アレは三日で完成させる。ラスト一日は見張りと休養だ。戦闘に関してはぶっつけ本番……てか身を守ってもらっただけだなア」

「主な戦闘は私ら二人でやる、と」

「あア。仕方ねエ。……俺ア男の方の作業を手伝ってくる。シラファイは女の方を頼むわ」

「その前に矢の残りを運び出さなきゃならないんだけど……」

気まずそうにシラフィがうつむく。心の中で、まだやってなかったのかよ……とか思っただけ。ということにした。

「あー、分かった、俺も手伝ってやるよ……ホラ、早く終わらせんぞオ」

あきれながらも、矢を運び出すために物置に戻る。

埃の量は全く変わらないが、矢の位置が分かっていると云うだけで随分行動が楽になる。

武器のしまつてある箱から大体使つと予想される矢を出して、半分程度シラフィに渡す。

「気を付けるよオ？ そんなモンで怪我したら笑いモンだ」

「私はそんなミスはしないよ。それに、どんなものも私を傷つけることは出来ない」

刀哉は少し驚いた。ただの軽口かもしれないが、傷つけることは出来やしないなどと中々言えることではない。

「へエ……その自信はどっから出て来るンだア？」

ちよつとだけ期待をして聞いてみる。

「なあに、私が完璧だというだけのことさ」

「……そうかよ」

期待した自分が馬鹿だった。

刀哉はシラフィが言うことを真に受けないと心に決めたのだった。

「日も暮れたし、今日はこのくらいにしとこうかア……」

空を見上げると、夕焼けは身を潜めて、藍色の空が一面に広がっていた。

「そうだね。いくら村の中とは言え、魔物が来ないとは言えない」「わざわざ作った仕掛けを無駄にされちゃたまんねエからなア。それじゃ解散！ エリー！ アレックスさん！ 帰りましょオカ」

作業に没頭していた村人たちに解散の旨を告げ、エリーたちの元へ行く。

「トーヤ君……住まないね。村人でもない君にこんな事をさせてしまつて……本来ならば私たちがやらなければならぬことなんだが」

アレックスが開口一番、出てきた言葉は謝罪だった。

「まだ確実に守れるとわかつた訳じゃ無いんで。もしかしたらこの人たちを無駄に殺してしまうかもしれない。もしかしたらみんな無事に生き残れるかもしれない。どつちかわからない以上、やつてみなきや分らないつて事ですよオ。それに……俺が戦うのはほんのお礼ですよオ」

刀哉がそう言うと、アレックスは悲しそうに目を伏せた。なにかおかしいことを言つた覚えもない。

「お礼、か……私たちが何もしていないというのにね……」

「それは違いますよオ？ あの家で俺ア忘れてた物を思い出させて貰つた。その上に色々貰つた。なら返さないとならない。それが俺の流儀です」

「すまない……この戦いが終わつて生き残れたら、また一緒に食事しよう」

「ええ、必ず」

ささやかな約束。

しかし二人にとっては大きく、守らなくてはならない物になった。

生き残る、それだけを胸に秘めて。

第一章 【慟哭の空】 七（前書き）

やうと...？

第一章 【慟哭の空】 七

3日後――つまりは、襲撃の前の1日。

ルクの村は簡易ではあるが、要塞となっていた。

襲撃に気付いていない事をカモフラージュするために村の周囲には敢えて何も設置されていないが、一度村に踏み込めばトラップがガザの兵士を襲うだろう。

「滅った兵士を全滅させるのが、俺等の仕事って訳だなア」

「しかし、上手く行くのかい？ 相手にバレている可能性だってあるのに……」

シラフィは眉を顰めながら言った。

「ああ、バレてはねエだろうな。ちゃんと見張りから連絡は来るし、おそらく敵さんは油断してんだろオ。『まだ国境を越えなければ、敵は気付いていない』ツてなア」

「まあ、ね……私の感知にもまだ引つかからないから、偵察も来ていない。つまり、来るのは先遣隊のみって事だ」

「……んな便利な力があるなら早く言えよ」

あはは、とシラフィは笑う。悪いなどとは微塵も思っていないよ
うだ。

「来るとしたら、今日の夜から明日にかけて……早馬は帰ってきたかア？」

「いいや、まだまだよ。だけでももうすぐ帰ってくるだろう。そうだ

な……昼頃かな？」

「まア、そんなもんか」

刀哉は立てかけてあった刀――楓を引き寄せせる。

「見張りを残して各自休養を取るように言っといってくれエ。俺ア寝る」

「ノンキなものだね……ま、それもいいか」

呆れか、達観か、判別のつかないため息を残してシラフィは家を出ていった。

「……ホントは、わかってたんだろうなア……俺が寝る気なんてないこと」

村長の家に1人残されてシラフィの気遣いに感謝の念を、ほんの少しだけ――抱いて消えた。

「あ！ 村長さん！」

仕掛けに近寄らないようにして1人遊んでいたエリーにシラフィは声をかけた。

「やあ、エリー。こんな所で1人遊びかい？ 気をつけなよ。いつ敵が来るか分からないからね」

「私がお家に帰っても、みんな忙しそうですから……」

エリーの顔に悲しげな色が混じって陰が落ちる。

「すまないね……私たち大人が皆、エリーのような心を持っていたら……戦争なんて起きはしなかったのに」

「……私、戦争、嫌いです。みんな……死んじゃうから」

「そうだね。私も嫌いだ。これで何度目になるのか……もう終わりにしたい。私たちはただ、ここで生きるだけなのに。大切な物を守るためには、必要な事なのか……？」

その言葉はエリーに対して向けたのだろうか。それとも、自分自身に向けての問いかけだったのだろうか。

「……もう、日が傾いてきた。家に帰りにくいのであれば私の家に来るかい？ ……トーヤ君もいるよ」

「あ、はい！ じゃあ少しだけ……お邪魔します」

すつと差し出された手を取って、刀哉がいる村長の家へと向かった。

村は人が少なくなってしまうたせいで、いつものような活気はなく、どこか寂しい、静かな空間が作られている。

（寂しいな……）

何故戦争なんて起こるのだろうか。みんなが仲良くなれば、みんな

悲しい思いをしなくて済むのに……。そんな思いがエリーの頭の中でぐるぐると回った。

「トーヤ君、今帰ったよ」

「ん……。あア。お？ エリーもいるじゃねエか」

「あ、うん。少しだけお邪魔させてもらうの」

刀哉には自分の抱く悲しい思いを悟られたくない。そう思って無理やり笑顔を作った。

「……。そんな顔で笑うんじゃないよ。見てることがちが痛エ」

「え……」

ちゃんと笑顔を作ったのに。刀哉に通じなかった。

「なんで悲しい顔してるのか俺には分からねエ。けどな、ガキがそんな無理やり笑顔作るな。悲しかったら泣け。嬉しかったら笑え。ガキのうちはそれが出来るんだ」

「トーヤさん……。ふえっ……。うえええん……」

涙が。

声が。

今まで抑えていた感情が。

堰を切って溢れ出てきた。

一生懸命抑えてきたのに。誰にも心配をかけたくなかったから、ずっと笑顔でいたのに。

「泣いとけ。いつかは泣きたくても泣けない時がくる……。それまでは、なア……」

胸の中で身を震わせるエリーを、刀哉は優しく抱きしめた。
この小さな子の不安が少しでも無くなるようにと。

ー 乾いた音。

部屋の中に吊した、大量の竹の切れ端。いわゆる鳴子と呼ばれる物だ。

それが音を立てた。

鳴子は一度だけに止まらず、何度も揺れて乾いた音を鳴らす。この鳴子が示すもの、それはー

「来たようだなア」

「ああ。これが第一報だとすれば、敵はもう数キロ圏内に入っている。すぐに到着するだろうね」

「エリー、オマエはみんなと一緒にいる。俺が行くまで外には出るなよオ？」

「う、うん……トーヤさん……」

まだ目の端に涙が残る顔でこつちを見てくる。

「どオした？」

「死なないで……死んじゃ、やだよお……」

また、涙が溢れてくる。

「……法律はかいくぐるためにある。規則は破るためにある。契約は穴を突くためにある。……ただひとつ。約束は守るためにある」
「……？」

「エリー、俺アオマエに約束する。たった一つ、死なないことを」

ぱつと晴れた顔になって、また泣きそうな顔に戻った。

「それじゃア、行ってくる」

エリーに、また戻るといふ意志を含めて別れを告げる。

「いってらっしやい……トーマさん」

「夜……かア。いいか、篝火かがりびや人影が見えたら。一気に矢を放て。手持ちの矢が切れたらすぐにシエルターに行け」

左手の刀がちゃきりと音を立てる。緩やかな乱れ刃の業物……楓。
人を斬るだけの刀。
人を守る力。

一度鯉口を切って、また戻す。

「落ち着かないかい？」

「まア、な。俺のいた世界の、もとの国じゃ戦争なんて無かった。
この力もただの暴力だったのにな……世の中わからねエ」

「それも全て君の運命って奴さ。受入れるといい」

「ハツ……運命かア。面白れエ」

「敵襲！」

誰かの声が攻めてきたことを知らせる。物見櫓の上に居る村人が
一斉に弓を引く。

「……撃て」

矢が風を裂き、ガザの兵士に牙を剥く。

「撃つたらすぐ次の矢を装填！ 間を空けるなア！」

断続的に風を裂く音が響く。

森のあちらこちらで悲鳴が聞こえる。

「……シラファイ、行くぞオ」

「ああ」

刀哉は楓を左手に握り、シラファイは右手に細剣レイピアを。

物見櫓から降りて、遠回りしながらガザの兵士の背後に回る。

「シラフィ、逃げる奴は？」

「一人。……都合がいいね。ちようどこっちへ向かってくる」

シラフィが言い終えた直後、刀戟たちと同じような鎧に身を包んだ兵士が走ってきた。

「だ、誰だっ！」

「あア？ 死神様だ。シラフィ、殺れ」

「仕方ないね……『動くな』」

シラフィがガザ兵士の目を見据えて、一言告げる。それだけで、今にも飛びかかって来そうだった兵士は、言葉も発せず静止した。

「恨むなら君らを先遣隊にした上司を恨んでね」

右手に持った細剣を、首を狙い横凧に一闪。

一瞬血が吹き出して、ドロドロと黒い血が溢れ出る。

兵士は息を吸い込もうとするがままならず、ゴポツと口の中に溜まった血溜まりに息を少しだけ吐き出した。

「凶悪、だなア……」

「今のは1人だったからね。これが複数になると難しい。完全に動きを止めることは難しいし、能力の有効人数は十人が限界さ」

シラフィは苦笑混じりにため息を吐いた。

「まアいいか。それより、そろそろ矢が切れる。逃げ出しそうな奴はまだいるかア？」

「今のところはもういないね。村に急ごう」

まだ降り注ぐ矢に当たらないよう迂回して、村に戻った。

物見櫓にはもう誰もいない。

おそらくもうシエルターへと避難したのだろう。

何故か、村長の家の地下に作られた隠し部屋。五十人は入れそうなスペースと、堅牢な扉。それに床とうまく同調するように作られた入り口。

よほどのことがないかぎり、まず見つかりはしない。

「さて、あとは俺らの仕事だア……シラフィ、頼むぜエ」

「りょうかい」

すうつと一息、肺に空気を含んで、ありったけの声を出した。

「ガザの兵士共オツ！ かかってこい雑魚がツ！」

森の中から殺気が膨れ上がり、次いで雄叫びが上がる。

「……シラフィ、敵は何人だ？」

「四十」

「じゃああと三十だなア」

森の中で、雄叫びとは違った声。あれは、悲鳴。

「簡単なブービートラップ……まア、ただの落とし穴だけだよオ」

「あと三十二だね」

シラフィの声が敵の残りを告げる。

刀哉は無言で楓の鯉口を切って――ゆっくり、抜いた。

「殺戮、開始だなア」

トラップを抜けた兵士が刀哉たちを視認して、雄叫びを上げながら走ってくる。

「――初曲・閃花」

たん、たん、たん――

軽やかなステップで刀を振るう。それと共に刀哉の周りを舞う鮮血。

そう、それはまるで――花のよう。

兵士の身を包む鎧さえも軽々切り裂いて、次々と絶命していく。兵士の動きが鈍いのは、シラフィの力故だろう。

「――初曲・閃花・絶」

ほんの一瞬、時間にしてコンマ数秒。それだけで体のありとあらゆる関節とバネを駆使して、力を右腕に集約する。

1秒に達するか達しないか……その瞬間、刀哉の周りで人が舞った。

さながら、一瞬のみ閃く花のように。

「あと二十三だよ」

「すぐ終わらせる」

シラフィに向き直って、返事を返した時――聞き慣れた声の、緊迫した声が響いた。

「トーヤ君っ！ 危ないっ！」

振り返る。

遅い。

剣が。

『彼』の体へ。

ずぶり、と肉を裂きながら。

血管を喰い千切って。

命を奪おうとする。

「アレックリースッ！！」

アレックスが倒れた。

ガザ兵を睨みつける。

楓を鞘にしまって腰溜めに構えて一気に引き抜く。

この間、1秒にも満たない。

「一閃」

体を二つにして、ガザ兵が崩れ落ちた。それを捨て置き、刀戟はアレックスに駆け寄る。

「アレックスさん……なんで……シエルターにいろって言ったろオが……」

「はは……なんで、かな……わからないけど、君の姿が見えたら駆けだしてたよ……」

「馬鹿かよオ……クソ、もう一緒にメシ食えねエだろオが」

「済まない……ね。リタと……エリーを、頼……む」

「あア……任された」
「……逝ったようだね」

シラフィがアレックスの顔に布を被せる。刀哉は、ただ、静かに立ち上がった。

「シラフィ。オマエ、シエルター行け」

「君は、どうするんだい？」

「1人残らず殺す。……初めてだ。こんな気分はよオ……大切な物を失うってのは、こんな気分なのかア……？」

シラフィは、刀哉の頬を伝う雫に気付いたが、見なかったフリをした。その雫には刀哉さえ気付いていないようだったから。

「クソツ……クソツ……俺は……俺はッ……アアアアアアアアアッ」

響く慟哭。

悲痛な叫び。

シラフィには刀哉に掛ける言葉を見つけることは出来なかった。

「許さねエ……」

シラフィは見てしまった。

刀哉に重なるようにして、刀哉から湧き出でるようにして、刀哉を包む空間に滲み、虹彩のように揺らぐ、黒い光。

刀哉は自分自身に誓う。

「誰一人、生きて帰さねエ」

静かに、歯車が動き出した、音がした。

第一章 【慟哭の空】 八（前書き）

戦闘って難しい。

今回はなんだか微妙です。

だいぶグロ配合。

感想とか、待ってます。

怖い。

ただ純粹にそう思った。

生物としての本能。目を合わせたら死んでしまう。殺されてしま
う。そう思わせる程の重圧^{プレッシャー}。ただ一つ救いなのは、その矛先がこち
らへと向いていないこと。それだけにシラフィはほんの少しだけ安
堵した。

「本当に……君は何者なんだい……？」

シラフィは見てしまった。

刀哉から立ち上るあの黒い光。矛盾しているようだが、あれはま
さしく黒い『光』だった。揺らぎ、弱々しさを感じさせるのに、圧
倒的な威圧感を出す、力の奔流^{ほんりゅう}。

あれは――魔力。

しかし、おかしい。シラフィが刀哉の精神^{なか}を覗いた時にあったの
は、間違いなく超能力の片鱗。自分と同じ魔族だと思った。魔族と
言うのは魔力がなく、超能力を持っている人間の事を指す。故に、
刀哉に魔力があるのはおかしい。

それに、魔力が視覚化して溢れ出るなんてまず有り得ない。余程
高密度の魔力でなければ。

だから、化け物だ――そう思ってしまった。

「化け物、か……そう呼ばれる悲しさは、私たちが誰よりも知っ
ているのに、ね……」

自分を嘲笑う。

シラフィは沈んだ心持ちのまま、シエルターへと向かった。

「死ね……死ねっ……死ねええっ！」

逃げる者にも容赦なく刀を振るう。体から立ち上る黒い光が、刀にも絡みつく。

一度に襲ってきた兵士のおよそ半分――十人程を僅かな時間で切り裂いた。

「一度に来いよ……瞬殺してやる」

ザカの国の兵士は好戦的だ。要は頭に血が上りやすい。

仲間を瞬く間に殺されて、少しだけ恐怖が芽生えたが、刀戟の挑発によって再び闘争心を煽られた。

血にまみれた楓を右手だけで持って、左手を横に伸ばす。

それだけで黒い光――魔力の奔流は腕に絡みついて、^{つた}蔦が伸びるように絡まって――刀の形になった。

楓より僅かに短い、黒い刀。

それを楓とともに刃を前へ突き出す。

「――協奏曲・蓮華」

ひゆるん、と緩やかな風の音。ザカ兵の首が飛んだ。

ごろりと首が落ちて、頭を失った首が血飛沫を上げる。手が、血を止めようと傷口を押さえようと動くが、すぐに力を失って崩れ落ちた。

「協奏曲・蓮華・一輪裂」

ぼそりと呟く。そしてすぐ次の動作に入る。

流れるような動き。足音が立たない、不自然な摺り足。

そしてまたも緩やかな風の音。

刀哉を 囲むようにして立っていたザカ兵の二人の首が落ちた。

ごとつと重たげな音の次に、倒れる体。ザカの兵は何が起こったかも認識できずに、ただ呆然。数瞬後にはっとして、剣を振りかざして襲いかかる。

「協奏曲・蓮華・二輪裂」に続き――「協奏曲・蓮華・三輪裂」

振り下ろされる剣さえも切り裂いて、三人の首が落ちる。しかし一度振られた剣は止まらない。それを無視して更に襲いかかる四つの剣。

「次いで“協奏曲・蓮華・四輪裂”」

刀哉の体が廻る。降りかかってくる四つの剣をいとも容易く切り裂いて、四人の首を落とす。

刀哉の周りに作られた人の山。血溜まりは既に、川となって流れていくだけ。

「ばっ……化け物がああああっ！」

ザカ兵の残った二人の内一人が自棄になって切りかかってくる。

「協奏曲・蓮華・終曲・一輪裂大輪」

ザカの兵士とすれ違つうようにして駆け抜ける。

「え……」

ザカの兵は止まる。否、止まらされた。そして、つー、と目から、鼻から、耳から、口から血を流しすべての動きが止まる。

足が支える力を失ったように、がくがくと震え、立てなくなりそうになる。

それは、数瞬してー弾けた。

残り、一人。

「最後、テメエだけだ……来いよオ。他の雑魚よりは楽しませてくれるんだろオ？」

「……」

奥に控えた、今までの兵士とはどこか違つ、威圧感を漂わせている兵士を挑発する。

「貴様、何者だ」

「ああ？ さアな？ ただ一つーオマエラ全員殺す。それだけだア」

左手の黒刀を魔力に戻し、楓を両手で構える。
揺らぐ魔力は腕を伝い、刃に絡み、妖しい光を放つ。

「貴様は脅威だ。この場で殺す」

腰からすらりと抜かれたロングソード。ただの雑魚の持つ得物とは格が違う業物だ。

「おお、やってみろ。デケェ口叩いたの一瞬で後悔させてやるよ
オ」

黒い魔力を纏う楓を下段に構えて待つ。

「うぬー」

走る。どちらともなく。

「ーー参る」

楓がザカ兵の剣と打ち付けられる。振るう度に鋼と鋼のぶつかる音が響く。

実力は同じだろうか？

否、刀哉が上回っている。

刀を振るえば、絡み付いた魔力が相手の剣を傷付ける。

少し動けば、すぐに背後を取れてしまう。

そもそも、根本的な技術の差で刀哉が上位に立っていた。

「つまらねエな……せめて苦しんで死ね」

背後に立ち、足払いをかけて転ばせる。瞬く間にマウントポジションを取った。

ひゅるりと左手に魔力を集め、四本短刀を造り出し、それを――四肢に刺す。

「ぐああっ！」

ザカの兵の顔が苦悶に歪む。

「どオだ？ 殺される側の恐怖、味わってるかよ？」

「殺すなら……とつとつ、殺せ……」

ぐりっ

「があっ！」

男の体が跳ねる。

刀哉が左足に刺さった魔力の短刀を捻ったからだ。

「それがなア……聞きたい事があるんだよオ」

「誰が、喋るか……」

「いーい覚悟だなア。……左手、貰うぜエ」

左腕に刺さった魔力の短刀を魔力に戻す。そのままそれを自分の中には戻さずに――男の腕へと浸透させる。

血管と同調。毛細血管まで完璧に起爆。

「あつ……ぎゃあああああつ！」

びちゃびちゃと流れ出す血。

男のは痛みに悶え、戒めから逃れようと体を揺さぶるが、地面と縫いつけられた体は動こうとしない。

生暖かい血。段々温度が下がっていく体。自分の血に浸りながら、死が隣にあることを認識する。

「まだ死なせねエぞ」

魔力を男の肩の辺りに集め、魔力で傷口を焼く。

「ッ……あゝっ……」

じゅう、と肉が焼け、辺りに人肉の焼ける嫌な臭いが立ち上る。傷口はぶすぶすと音を鳴らし、焦げ、血は焦げた隙間から少量漏れ出るだけになっている。これで止血という目的は果たされた。

「本隊はどの位置にいる？」

刀哉はなお、ザカ兵に問う。

質問に答えなければどうなるか——それを言葉の裏に滲ませながら。

「誰が言うかつ……」

「へエ……根性あるなア」

またも拒否。刀哉はそれに顔を歪ませて、次の行動に移った。

右腕の短刀を魔力に戻し、血管や細胞の隙間へと流す。

さつき左腕を吹き飛ばした時と同じように——親指を吹き飛ばし

た。

「ぐうっ……こんな事しても、俺は、口を割らんぞ……」
「そーかよオ……じゃ、専門家に任せるとするかア。……なア？
シラファイ」

刀哉の後ろに立つ影。赤い瞳を輝かせた、忌み嫌われし魔族ー！。

「ああ。すぐ終わる。……さあザカの兵よ。『教えてくれ』」

目を合わせて命令する。

それだけで彼の意識とは無関係に口が勝手に動き出す。人の意志を掌握して思い通りにする。

「あ……う……ここ、から……遠い。国境、付近、で、待機。2日、連絡が、なけれ、ば、こちらに、向かって、くる……」

ザカ兵の目は焦点を失い、口からは涎を垂らしながら、途切れ途切れに喋る。

「これで全部だ」

シラファイはすつと目をそらし、刀哉に向き直る。

「……そオカ。シラファイ。……離れてろ」

シラファイは刀哉に言われて、ザカ兵から少し離れる。

「死ね」

左手を、くつと握る。
ザカ兵の体は弾けた。

「これで、終わりだね」

「あア……虚しいな……」

楓を振って、纏わりついた血を落とす。

数十人を切った刀が、途端に重く感じた。

楓を納めるために鞘を探す。少し歩いたところにそれはあった。

救えなかった命と共に。

「アレックスさん……」

もう永遠に口を開くことはない彼に呼び掛ける。

「結局、救えなかったな……クソ……」

「君のせいじゃない。むしろ、これだけの被害に抑えられたただけでも良かったと思うべきだ」

ぎり、と刀を強く握る。

「救えなかったんだよ……それに変わりはないエ……あんなところで俺が油断しなけりゃア……」

震える。

過ぎたことだとは分かっているけど、それで済ませられない事だつてある。

「……エリーに何て言えばいいんだよ……」

刀哉らしくない、沈んだ声。

シラフィには、彼にかける言葉を見つけることは出来なかった。だから、責めて。

この場から離れようとした。

「戻ろう。……まだ夜は明けない」

「ああ……」

楓を鞘に納め、アレックスの体を背負う。

自分を庇って斬られた、彼をこんな場所に置いておきたくなかったから。

彼女は泣いた。

何故救ってくれなかったのかと。泣いて、糾弾して、罵倒した。リタは何も言わず、ただ涙を流した。

力が足りない！

守るための力が。

力があれば、誰も悲しませずにすべてを終わらせることが出来る。

そう思った。

刀哉は、決めた。

第二章 【都の戦火】 一（前書き）

新章突入。

あれ、こんな風にするつもりじゃ…

アレックスを殺すつもりなんて無かったのに…

あれ？

評価キボンヌ

第二章 【都の戦火】 一

「本当にもう行くのかい？」

夜が開けて、日もまだ高くならない朝。ルクの村から少しだけ離れた森。その片隅に、二人はいる。

「……あア。もうここにはいれねエ……アレックスさんから頼まれたこと、果たせねエな。でも……その方がいい」

不自然に盛り上がった土。その上に刺さった、剣。

「ルーファ母子の事は私が面倒見るよ。しかし……街は遠い。どうやって行くんだい？」

朝日に目を細めながら、墓前に座る彼を見る。

「すまねエ……街までは歩いてでも行くさ。とりあえず……シンに行ってみる」

「シンか……私の故郷だ。そうだね、それもいいかもしれない」

「そこに行けば俺が何者なのか……分かる気がするんだ」

異世界から訪れた人間。なぜ自分はこの世界に来たのか。なぜこの世界に来れたのか。疑問は尽きない。

「……そうか。それじゃ君に餞別をあげよう」

「へエ？ まア貰えるなら貰つとくわ」

「まず一つ。その刀は君の物だ。この先、必要になってくるだろう」

刀哉は自分の左手に握られた楓を見る。幾人もの血を吸った刀。

「それと……私の馬をやろう。街まではすぐだろう。……とは言え、もう老馬だ。旅の途中で力尽きてしまったら、ちゃんと弔ってやってほしい」

「……あア」

「最後に……これだ」

「これはなんだア？ レンズ……かア？」

シラフィの手に乗せられたものを見る。そこにあるのは小さな黒いレンズ。

「これは私がたまに使ってるレンズの複製だ。君は自分で目の色を変えれないだろうから、街ではこれをしているといい。赤い目はなにかと面倒だからね」

「なるほどオ……忌み嫌われた目かア。俺としてもできるだけ面倒事は避けてエからなア」

シラフィや刀哉に備わった赤い瞳。魔法という手段に頼らず、魔法以上の力を持つ人間。

「それと……君は私たち魔族とは異なつた存在だ」

シラフィは言う。あの時見たありのままを。両方の力を持つ刀哉の事を。

彼が異世界から来たという明らかな証拠。

「私たち魔族には魔力が無い。詳しい説明は私には出来ないのだけど……魔力が使えない代償に超能力を得た種族だと、そう私は聞いている」

「……俺が使った力は超能力じゃねエって事か。赤い瞳を持ちながら魔力を行使する存在……それが俺？」

刀哉は自分自身のことを推察する。しかし、刀哉のその答えにシラフィは首を振った。シラフィが言いたかったのはそんな事ではないから。

言うべきか、言わざるべきか——数瞬、シラフィは逡巡した。しかし、もうここまで言ってしまったのだ。言うしかない。

「……君の精神なかを見た時、超能力は確実にあった。それがどんなものか未だに分からないが……確かに私たちの同胞だと思った」

自分でもまだ信じられない——そんな顔でシラフィは語る。

「君は超能力と魔力、両方行使できるんだよ。……まさかとは思った。しかし、これは変えようのない事実。君は——力を持ちすぎている」

超能力と魔力の両方を行使できる……この世界の定理を無視した存在。それこそが彼を異世界人だと言っている。

膨大な魔力と、強大な超能力を併せ持つ、世界の理から外れすぎた刀哉。

なぜ刀哉はこの世界に来たのだろう。シラフィは純粹にそう思った。

「……俺がなんでここに居るのか、全く分からねエ。あつちの世界じゃ俺ア死んでたハズなんだよ。……シラフィは言ったよなア。シンは技術力が高いつて」

「ああ。少なくとも、ここの数十倍はある」

「だから俺アそこに行く。何故来たのか分からねエ。なんでこんな力があるのかも分からねエ。だったらまずは確実な――俺の体を調べる」

未だ見たこともないシンの国。だが、少しでも知りうる事があるなら、そこに行つて間違いはないはず。

刀哉はそう考えた。

「そうか……うん、それはいい。また私では説明出来ないのだが、超能力がどんな原理で発生するのは解明されている。それを使えば君の体を調べる事なんてすぐだろうね」

「そオカ……ンじゃア、村、戻るか」

墓前から立ち上がり、踵を返す。村に戻つて、馬を貰い、村を出る。数日世話になつたこの村ともお別れだ。

(チツ……なんだア？ 俺が寂しさなんて感じるなんてよオ)

この数日の間に、色々な事があつた。

いままで感じたことのない暖かさや、人との触れ合い。そして争い。初めて、刀哉は大切と思える人を失つた感情で力を振るつた。やったことは決して誉められる行為ではなかったかもしれない。だが、それでも刀哉は初めて、『誰かの為に』力を振るつたのだ。

「変わつちまつたなア……」

「……ん？ なにか言つたかい？」

「なんでもねえよ」

自分のために振るう力は、すぐに暴力へと変わる。ならば守るための力は？

どちらも振るえば誰かが傷つく。虚しさは変わらない。それでも、守るための力は自分に降りかかる罪悪感を軽くしてくれた。

――だから。

これからは出来る限り、自分の力を守るために使いたい。刀哉はそう思った。

馬に数日分の食料や、サバイバルツールなどを積んで、シラフィに別れを告げる。

「世話になったな」

「いや、こっちのセリフさ。それよりも……本当にいいのかい？ 彼女に……エリーに何も言わなくて」

「合わせる顔がねェんだよ。俺は結局、力を持った気でいたただの弱者だア」

力の無い者が、容易く守ると口には出来ない。だから、強くなる。

「そうか……それなら私から言うことは何もない。……また、戻ってきてくれ」

「……それは……約束できねェ。だが……いつか、そんな時が来たら、ちゃんと顔出さぜ」

約束にもならない約束。

守れるか分からない曖昧な口約束。

「それじゃ……またなア」

「ああ。気をつけて」

シラフィとは家の前で別れ、馬を引く。村の入り口まできて振り返った。

たった数日だけいたルクの村。その景色を目に焼き付けて、再び歩き出す。

「トーヤさん！」

後ろから呼び止める声が響いた。この村にいる間、何度も聞いた、幼さが残る声。

「エリー……なんで……？」

「黙って行かないでよ！ まだ……言いたいことたくさんあるのにつー！」

怒ったような、それでいて哀しげな顔。長い赤髪が風に揺れる。この子を守ることが、出来なかった。父親を失わせてしまった。力が足りなかったせいで。

「俺ア……アレックスさんを守れなかった。お前にも、リタさんにも……村の人たちにも顔向け出来ねエんだよ。……どんな顔して会ったらいかが分からねエんだ」

「お父さんが死んじゃったのは悲しいよ……でも、トーヤさんが行っちゃうのも悲しいんだよ……行かないでよお……」

みるみるうちに、大きな瞳に涙が溜まって、零れ落ちる。

「俺には力がねエから……みんな無くなってく。このままじゃア、アレックスさんとの約束も守れねエんだよ」

「約束……？」

「ああ、そうだ。エリー、お前とリタさんを守ってくれ……そう言われたんだよ」

思い出す。血を流して冷たくなっていくあの体を。死ぬ間際に遺した言葉を。

「じゃあ、一緒にいてよ……」

「それをするためには力が足りねエんだ。だから俺ア……村を出

て行かなきゃならねエ」

それはもう決めたこと。村を出ると言うことは覆されない。

「じゃあ、じゃあ……私も行く！」

「はア？ ……んなことしたらリタさんが……」

「お母さんはもう……いないよ……」

「!？」

いない？ どう言うことだ？

「お母さんは……起きたら、死んじやってた……」

「なんだよそれ……また俺ア……」

アレックスを守れなかったせいでリタまで死んだ。アレックスとの約束がもう、守れなくなった。

「だから、もう……」

「それでも……出来ねエ。シラフィの家に行け。それで大丈夫だア」

連れて行くわけにはいかない。魔物だって出るのに、こんな若い子供を連れて行くわけには行かないのだ。

「じゃあ、もういいよ！ トーヤさんが連れてってくれないなら一人で行くもん！」

「な……エリー！ 待て！」

叫んだかと思っただらいきなり走り出した。

そのまま村から出て街道を走っていく。

「オイオイ……マジかよオ……クソっ、追いかけるしかねエじゃねエか」

馬ならすぐに追いつくが……横路に入られたりしたら間違いなく見失う。

出来る限り遠くへ行かない内にー

「つたく、行くかア」

アレックスとの約束を少しでも守るためにー連れ戻さなくてはエリーを危ない目に合わせるわけにはいかない。

刀戟は馬にまたがり、街道を走り出した。

第二章 【都の戦火】 二（前書き）

大変お待たせしました。

ライブが近いせいであまり筆が進まなくて…

コメントが欲しいよう…

「クッソ……どこに行つたんだア？」

伸びる道は一本。しかしその両側には鬱蒼とした森が続いている。まさかこの中に入ったのか……出会つたときの事を思い出した。

「そオいやア、あんどきも……」

出会つたのは森の中。その後、村に行くために街道へ出て……

「……記憶が正しければ、こつちだよなア」

侵入者を拒むように生い茂つた雑草たち。しかし一部だけ踏み倒されたような跡がある。それも、まだ新しい。恐らくエリーが入つていった跡だろう。

刀哉はその雑草を更に踏み分けて森の中へと進む。少し進むと雑草たちの背も低くなり、脛より少し下の高さになった。

それを踏み倒した、跡。

「村人がこんなトコ通る筈がねエよなア……間違いねエ。エリーはこつちだ」

雑草を踏みしめ、進む。しばらく歩いたところで妙な音がしてきた。

「こいつア……水の音？ 川でも流れてんのかア？」

疑問に思いながらも進む。その音の元はすぐに分かった。

「泉、ツてヤツか？」

少し高い岩の壁。そこから流れ落ちる水が音の原因だろう。あまり高くないせいで水の勢いもない。滝と呼ぶには規模が小さかった。

「エリー……」

泉のすぐそばの樹に体をもたれさせて眠っているエリーがいた。ここまで走ってきて疲れたのだろう。やはり、まだ子供だった。

「オマエを旅には連れてけねェんだよ……危険だからなア。旅も……俺も。だから待っていてくれよ。帰るからよオ……必ず」

眠っているエリーを起こさないように抱き上げて、元来た道を戻る。

誰かがこの少女を守ってあげなければならない。しかしそれは――自分ではない。

「よっ……とオ。……エリー、聞こえてねエだろうけど、オマエにだけ俺ア誓う。約束よりも、重い誓いを。オマエがあのか村で俺を待っていてくれるなら……必ず帰る。絶対だ」

馬から必要な物だけを袋に詰めて、エリーを馬に固定する。

「じゃアな……頼んだぜエ、馬」

軽く馬を叩いて村の方へと進ませる。後はシラフィがなんとかしてくれるだろう。

「さアて、まずは次の街、セルだなア……馬がねエのが少し痛エが……まアなんとかなるだろオ」

刀を腰に下げ、袋を担ぐ。

未だ終わりの見えない道を、刀哉は進み始めた。

「平和、だなア……この雨を除けば、よオ」

エリーを帰して暫くは晴天が続いていたものの、日が若干傾いて

来た頃に曇り始め、すぐに雨が降ってきた。

シラフィが用意してくれた防水外套が無ければ今頃びしょ濡れになっていたところだ。

「ったく……先は長げエっつーのに雨ごときに足止めされるなんてよオ」

刀も袋も外套の中。歩きにくい限りだ。

「仕方ねエな。どっか寝れるトコ探すかア」

目の前に広がる街道には雨宿り出来そうな所など無い。残されたのは森の中。あてもなくさまよつのは気が引けるが、それ以外道がないのもまた事実。

「……はア」

溜め息一つ。気を取り直して寝床を探そうとした刀哉の耳に、この場に相応しくない音が届いた。

「足音……？ いや、馬車かア？」

水を弾く音。それに重なるようにして響く馬の嘶こななき。音からして
一―二台。

大体状況を把握した所で、破碎音と馬の大きな嘶き。

「馬車を破壊された、かア？ クク、いーいチャンスじゃねエかア」

袋を雨の届かない気の枝に引つ掛けて、腰に下げていた刀を左手に持ち、音のした方へと走る。

霧で視界が遮られていたせいで、目視する事はできなかったが、案外馬車は近かった。

近くまで来てみれば状況がよくわかる。

無傷の馬車と、片方の車輪を破壊された馬車。無傷の馬車付近にいるのは、簡素な鎧に、片手剣を握ったがたいのいい男が二人。

もう一方の破壊された馬車付近にいるのは、立派な鎧を身に付けて、片手でも両手でも扱えるロングソードを握った金髪の男。

大方貴族を護衛している兵士が何かだろう。それが道中盗賊に襲われた、と。

こちらの姿はまだ気付かれていない。

「貴様らっ！ 一体何が目的だっ！」

「ククク……これから死ぬ奴に教えたって仕方がねえだろうが！」

「っ！」

盗賊の片割れが護衛に襲いかかる。振り上げた片手剣は護衛に防がれる。しかし、その横からもう一人の盗賊が護衛の頭を狙って片手剣を振り落とした。

「ぐっ……くそっ……」

間一髪、泥水に構うことなく転がって避けたのだが、額に傷が入った。血が大量に吹き出て護衛の視界を奪う。

「じゃあな。ご苦労さん」

「くそおおっ！」

護衛の頭に片手剣が振り落とされる。

しかし、飛んだのは振り落とされた片手剣の刃。

「2対1ツツーのは関心しねエなア……男なら1対1でやったらどうなんだア？」

振り落とされた片手剣を斬り飛ばしたのは刀哉の刀。

「なっ……なんだテメエはっ！」

「さつきから聞いてりやアよオ……随分とテンプレなセリフばっか吐くじゃねエか。雑魚丸出しなんだよ。今なら見逃してやるから消える。十秒待っ」

そう言っつて刀哉は刀を納め、カウントダウンを始める。

「十……九……」

「この野郎……ふざけた真似しやがって……殺るぞ！」

二人のうち、まだ武器を持った方が刀哉に斬りかかる。しかしそれは空を切った。

「七……六……あア、面倒だなア。五四三二一ゼロ。はいカウントダウン終わり。サヨウナラ」

引き抜き、斬る。

鎧を纏っているにも関わらず、易々と切り裂かれ絶命。

「ひっ……うあああっ」

どちらりと死体が泥水に落ちたのを見て、もう1人は悲鳴を上げ、

逃げようとする。

「逃がすと思うかア？」

「がっ」

背後から心臓を一突き。

刀を体から引き抜くと同時に、男は支えを失って泥水の中へ落ちる。流れ出した血が雨と混ざって流れていく。

「終わりつとオ……よオ、大丈夫かア？」

「ああ、すまない……大丈夫だ」

「嘔吐けエ。血だらけじゃねエか。まア額つつーのは派手に血が出るモンだけだよオ、さすがに血止めくらいしねエとマズいだろオ？」

兵士の額からはまだ血が溢れ出てきている。袋は木に引っかけたままなので手当てが出来るとような物は持ち合わせていない。

「馬車中に布が血止めはねエのか？」

「い、いや……無いんだ」

「ラディ！ その怪我は！？」

「ひ、姫！ 出て来てはいけません！」

馬車から飛び出して来たのは、シンプルだが高貴さを漂わせるドレスを着た美少女。

「姫エ？ ……まアいいか。ラディとか言ったなア」

「あ、ああ」

「俺の荷物の中に手当てする道具があるからよオ、取ってくる。」

そこ動くんじゃないぞ」

「わ、わかった……」

返事を聞くや否や、刀哉は走り出した。その姿はすぐに霧と雨で見えなくなる。

「ラディ……あの方は？」

「わかりません……突然現れてあの二人を倒し、私を助けたのは事実です……おそらく、あの若さながら相当な実力者かと」

ラディの言葉からは若干の悔しさが漂っていた。守りきれなかったこと、他人の手を借りてしまったことを情けなく思っているのだ。

「そうですか……味方だと思いますか？」

「それも……わかりません。敵ではないように思いますが、味方と呼ぶには少々……」

「そうですか……では、少し様子を見ましょう」

ラディが返事を返す前に、刀哉が姿を現した。手にはさっきまで持っていたいなかった袋を携えて。

「血、まだ止まってねエみてエだな……馬車中でやるか。ラディ、入れよ。姫さんも」

「あ、ああ……」

ラディは言われるがままに馬車へと入る。続いて姫、最後に刀哉。

「ラディ、傷見せる。……あア、んな深くはねエみたいだなア。少し痛エかもしれねエが耐える」

袋から布と血止め、それと水を取り出し、ラディを寝かせる。
水で傷口を洗い流し、布で水を拭き取る。そしてすぐに血止めを
塗り、布を巻く。

「よオし、もオいいだろ。どうだア？」

「い、痛くない……？ すまない、助かった」

「あア、気にすんな。変わりと言っちゃアなんだけどよオ、姫っ
てどういう事だア」

助けた事と引き換えだと言わんばかりに刀哉は問いかける。

「そ、それは……」

「ラディ。……私から話します。この方なら話しても問題ない
でしょう」

「……わかりました」

姫が刀哉に向き直る。

「私は」

「っと、その前に自己紹介くらいしとこうかア。俺ア真田刀哉。
刀哉が名前だア。この先にあるルクの村で世話ンなつてた」

「トーヤさんですね。私はセルティ・ジュレル・カルディナと申
します。このジュレルの姫です」

「へエ……で、その姫サマがこんなトコに何の用だア？」

王都から相当離れた辺境に何故。不自然すぎる。

「隣のザカへ行く為です。戦争が起きそうだと言うことで外交の
ために」

「へエ……なるほどなア。入れ違いだったみてエだな」

「？ 何がですか？」

「ルクの村はザカ兵に襲われた。四日前に早馬が行ったんだが、姫サマの耳には入らず、そのままこっちに。おそらくザカ兵はルクの村を滅ぼした後、村で姫サマを待ち構えて暗殺でもする算段だったんだろオ」

セルティの目が驚愕の色に染まる。外交の為だった思っていた旅が、自ら畏に向かっていている旅だったのだから。

「そ、それでルクの村は！？」

「一人、犠牲が出たが、大半は無事だ。姫サマ、王都に引き返しな。もうすぐザカ兵の本隊が来るし、王都の兵も来る。ここは戦争になるからよオ」

「そうですね……王都へ行かなくては」

ニヤリと、刀哉が笑う。

「ンですよ、ものは相談なんだが、俺も連れて行ってくれねエか？ 歩いて行くのはさすがに辛いんだよ」

「そんなこと出来るわけがっ……」

「ラディ。いいのです。……刀哉さん、ではご一緒しましょう」
「悪いな。頼むぜエ」

セルティとラディ、そして刀哉は荷物を盗賊の馬車へと積み替えで、来た道を引き返した。

(ククク……馬車ゲットオ)

心の中で刀哉の笑いが響いたのだった。

第二章 【都の戦火】 三（前書き）

戦闘シーンが苦手な割に多く取ってみたり。
グロ成分配合。

とはいえ文才がないため上手く書けない…！

何故だ！

何がいけないんだああっ！

「晴れた、なア」

「そうですねー」

「……………」

あの後、すぐに雨は止んで晴れ間が見えた。すぐとはいっても、時刻は既に日暮れ。もうじきに夜になるだろう。

「あら？ ラデイ、どうかしましたか？」

「……………いえ」

馬車が動き始めた辺りから、ずっと黙り込んだままのラデイ。会話は刀哉とセルテイのみ。

「どうしたんだア？ 言いたいことがあるなら言えばいいじゃねエか」

「……………別に、何も無い」

明らかに拗ねた態度。それでは何も無いと言っているも何かありますと言っているようなものだ。

「なんだよ気持ち悪いなア。それで隠してるつもりかア？ 俺が気に入らねエんだろ？」

「……………ふん。そうだ。お前が気に入らない。どこの誰かも分からない人間。それに見たことのない白い髪……………貴様何者だ？」

易々と言い当てられて、もう隠せないと悟ったのか。

「へエ……この国には白髪はいねエのか。それに言っただろオ？
記憶喪失なんだよ」

「ふざけるな……そんな見え見えの嘘で私が騙されるとも……」

「ラデイ！ 止めなさい！」

ラデイの声に被さってセルティの声が響く。

「しかしっ！」

「私が決めたことですから私が責任を持ちます。トーヤさんは悪い人ではありません」

きつぱりと言い切る。何を根拠に言っているのかは分からないが、好都合であるから刀戟は特に口を挟まない。

（まア……どうせこの赤い目見たら考えも変わるんだろうけどなア。とりあえず、王都までは行かねェと）

「なぜそんな事が分かるのですか！ どこの国かも分からない……
ガザの手の者かもしれないのですぞ！」

「口を慎みなさい！ さっき貴方も聞いたでしょう！ トーヤさんの目的は世界を回ることのみだと！」

「口では何とでも言えます！ この者は……」

ますますヒートアップしていく馬車の中。その中で不自然なまでに冷静さを保つ刀戟。その目は言い争う二人を捉えてはいなかった。

「……こりゃア……オイ、お二人さん？ 言い争ってる隙はねェ

みたいだぞオ？」

「なんだと？ ……っ！ 何だ！？」

馬の嘶きと、揺れる馬車。その揺れはだんだんと収まっていく。

「馬車が……止まったのですか？ 何故……」

「外見ろよ。面白いくらいの魔物の群れだぜエ」

日差しを遮るためのカーテンを開けて二人は外を見た。

「これは……ファングの群れだと？ それにワームまで……」

「これは……とても私たちでは……」

悲観するラディとセルティ。しかし刀戟は思う。

（たかだか2、30匹に何ビビってんだア？ 殺気にしても大した強さじゃねエみてエなのによオ）

狼型の魔物、ファング一匹に対して、ただの成人男性1人では太刀打ちできない。ラディくらいの実力ならば数匹の相手は出来るだろうが、群れを相手にするとなれば話は別。

ギルドランクがAランク以上の人間でなければ群など相手にはできない。

ラディの実力はC程度。良くてBくらいだろう。

「仕方ねエな。タダで運んでもらうのもアレだしよオ……ちょっと片付けてくるかア」

ぼそりと、しかし確実にセルティとラディの耳に届くように呟く。

「ま、待て！ 死ぬ気か！？」
「危険すぎます！ ここは一旦退いて……」

「んなことしても意味ねエだろオが。ここで片付けといた方が面倒が減る」

「しかし……」

なおも食い下がるセルテイ。その目は必死だ。

その判断は間違いではない。いくら強いと言えど、ファンゲ25匹とワーム5匹を相手にするなど無謀極まりない。

この魔物の群れを撃退するだけでAランク、完全に全滅するにはAの上位の実力くらいは持つていなくては不可能である。

AとA+では実力に開きがある。

「まア見とけ。少なくともそこの騎士どのよりは頼りになるぜエ？」

刀哉は楓を掴んで馬車を降りる。周りを取り囲むファンゲたちは、なんね例外もなく涎よだれを垂らして唸っている。

「来いよ雑魚がア」

「ガアッ」

刀哉が言葉を放った瞬間、ファンゲの群れの一部が飛びかかる。数にして、5匹。

「ハッ……頭悪いなア……“初曲・閃花”」

跳ねるようなステップ。

相反するように流れる白刃。

それはまるで紙を裂くように、ファングの体を易々と切り裂く。体を真つ二つにしたファングの血が地面に落ちる前に、次のファングへと白刃が襲いかかる。

ぶしゃっ

飛びかかったファングの2匹目は頭から胴まで、真つ直ぐに両断され、重力に従って落ちる。

頭蓋さえも容易く切り裂き、脳漿と血が混じった液体を派手に散らせる。

残ったファングの牙はするりとかわす。

「オイオイオイッ！ テメエラの牙はそんなモンかア！？」

嘲りの声が響く。

仲間を殺されたというのに、ファング達は戦意を失わない。むしろ逆にいきり立っている様でもある。

「まア、姫サマとその他が待つてるみてエだからな。とつと片付けさせてもらうぜエ」

両手から右手に楓を持ち替えて、左手をす、と伸ばす。

伸ばした左手に絡みついて伸びる、黒い魔力。それは段々と形を成していき、あの時と同じように黒い刀へと変貌する。

「“協奏曲・千年桜”」

無形の構え。

両手に持った刀をだらりと垂らし、飛びかかるのを待つ。

「来いよオ……」
「ガアアツ」

さつきよりも圧倒的に多い数が飛びかかる。
正面、左右、背後――ありとあらゆる方向から刀哉を噛み砕こうと襲いかかってきた。

――刀哉は動かない。

ファング達の中の一匹の牙が刀哉の喉にえぐり込もうとした瞬間――叩きつけるような音が響いた。

それは斬撃の音。体のバネを最大限利用した上に、魔力で強化した肉体で限界以上の速度で斬撃を打ち出した結果。瞬間的に数十の斬撃を繰り出す“協奏曲・千年桜”

一瞬にしてみれば全てを叩き斬る、その技の由来は斬撃を繰り出す際に生まれる刀の煌めきと――

「次……来いよオ」

――遅れて降り注ぐ血の雨によるもの。

刀哉自身には血の一滴も掛かっていないが、足元は肉塊と血だけ。ファングたちはさすがに恐怖を覚え、後ずさる。

ワームたちは危険を察知したのか、既に逃げ去った後だ。

しかし、ファングたちはそうはいかない。狼型の魔物であるファングはプライドが高い。逃げ出そうものなら他のファングから排斥されるだろう。

「故に、負けるのを覚悟で立ち向かってくるのだ。」

「ハッハア！　　いーい度胸だア！　　そうこなくっちゃなア！」

刀を振り上げ、飛びかかってくるフアングに応戦する。

しかし、ただ飛びかかってくるだけのフアングでは、刀哉にかすり傷一つ付けることすら叶わない。

刀哉の黒い刀が腹を裂き、首を斬り飛ばし、右手の楓が体を二つに裂いて血飛沫を飛ばし、心臓を貫く。

勝負は、あつと言う間に付いた。

「ま、数が多いだけのことはあつたなア。久々に運動したぜエ」

黒刀を魔力へと戻し霧散させ、楓を血振りしてから鞘へと戻す。馬車へ戻ると、啞然とした顔が二つ。ラディとセルティだ。

「なんだよ？」

「き、貴様は一体……」

「何者、ですか……？」

二人で一文になっている。割と息のあつた二人のようだ。

「あア？　　記憶喪失の旅人だつってんだろオ？」

「馬鹿な！　　旅人があんな戦闘能力をー」

「あんな膨大な魔力をー」

「「持つてるわけがない（んです）！」」

息がピツタリだ。まるでコントのよう。

「んなこと言われてもなア……知らねエよ。どうせ王都までたア。気楽に行こうぜエ。気楽によオ」

「むっ……」

(ラディ。ここは諦めましょう)

(し、しかし……)

(これだけの力を持っている者を旅人やギルドに入れておくのはもったいないです。わが国が『保護』しなければ)

(……了解しました)

(いくらあなたが気に入らないと言えど、心象を良くすれば籠絡するのが楽になります。そのためには……わかりますね?)

(はっ！ 了解しました!)

「取り敢えずよオ、日も暮れちまったし、このあたりで野営しねエか？」

「そうですね！ それがいいです！」

「……」

言われてもなかなか行動に移せない男、ラディ。

こいつも大概プライドが高い。

(ラディ?)

につこり黒い微笑み、セルティ。ラディは本能的に逆らってはならない相手だと認識。

「そ、そうしよう！ いい判断だ！」

「……？ あア、じゃア、火でも起こさねエとなア」

そう言つて馬車の外へと出て行く刀哉。セルティもそれに続く。

ラディは馬車の中で一人、ため息をついた。

我らの姫は、腹黒い。

第二章 【都の戦火】 三（後書き）

うわぁぁんっ

感想が…

感想がこないよう…

元気が無くなっていく…

頑張っ更新した僕に救いの手を！

第二章 【都の戦火】 四（前書き）

うん、誰からも感想こない…

人気はないようだ。

第二章 【都の戦火】 四

「ところで……何故トーヤさんは魔力を？」

「あア……なんかあった。案外不便だなア。もっとこう……火と
か出せるモンだと思ってたよ」

焚き火を囲みながらの談話。魔物の肉は食べることが出来ないの
で、仕方なく持ってきた携帯食料を食べた。

「……それは、使い方を知らないだけでは？ 視覚化する程の密
度の魔力は今まで見たことがないので何とも言えませんが……魔力
を感じることをさえ出来れば後は簡単なはずですよ」

「ヘエ？ 知り合いに聞いた話じゃア魔法は自分で見つけるしか
手がねエってことだったんだがなア」

シラフィが言っていた事だ。

万人の術では無いが故に、使えるのは一握りだと。

「ええ、でもそれは魔力を認識するまでの話であって、魔力の出
し方さえ分かれば誰でもできますよ。そのためのアカデミーも存在
しますから」

「そんなモンがあるのかア……そこに行ってみるのも手だな。…
…金がねエから無理か」

刀哉は乾いた笑いを浮かべる。そのアカデミーとやらがどんなシ
ステムかは分からないが、イメージとしてはお金がかかりそうだ。

「まあ、優秀な人材を育てるための施設ですから、多少はかかりますね……。それでも、卒業後は王国特務部隊に配属されますので、かかるお金は教材費や生活費のみです。国の未来を担う人達から授業料を取るような事はしませんから」

さりげなく国に仕えるようアピールしてみる。しかし刀哉は首を振ろうとしない。

「俺アそーいった堅苦しいのは苦手なんだよなア……。ま、魔法なんて使えなくても問題ねエしな」

目的がある刀哉には国に仕えるなんてことは出来ない。それに、魔法なんて得体の知れない力よりも、刀という確たる力の方が信頼できる。

(憧れねエ訳じゃねエんだけどな)

一度は使ってみたい。何もないところから火を出してみたい。男特有の憧れだ。

「では私が教えましょうか？」

「いいのかア？ 使えた方が便利だしなア……。頼むわ」

どうやらセルティも魔法を使うことができるようだ。

セルティの説明が始まる。

「基本的には四大精霊と大気に満ちた精霊がいます。四大精霊はこの場では関係ありません。四大精霊はあくまで世界を支える役割を持った精霊であり、魔法そのものには干渉しませんから」

「つーことは魔法を使うためにはその大気に満ちた精霊が必要な

訳かア」

「ええ。簡略化しますと、魔力をエネルギーとして魔法という物質に変換するわけです。精霊の助け無しには魔法は使えません。つまり精霊を通さないと魔法は発動するどころか変換しようとした魔力さえも無駄になります」

「なるほどねエ」

魔力はただ魔力のまま。精霊を通すことで魔法として形を持つことになるらしい。

普通の魔術師はそうしなければ形造ることができないのだ。

刀哉は圧倒的魔力にものをいわせて無理やり魔力で刀を作っているのだが。

「属性については、火、水、雷、土があります。派生させることでそれは増えますけど、基本はこれだけです。太古には光と闇があったようですが、使える人はいません。今はですが」

「その属性に精霊を使って変化させる訳だな？」

「はい。それにはどうしても詠唱が必要になります。熟練した魔術師でも低級魔法を発動させるには何かしらワードが必要ですね。ワード自体は自分で決めることが出来ます」

「面倒だなア……こう、ぼつと出せねエか？」

「今までいろいろな人が挑戦しましたが、できる人は居ませんでした。……そもそも詠唱とは精霊にお願いするものです。精霊とは人より上位の存在ですから」

「ほオ……っーことは精霊を自分より下位にすればいい訳だ。……

……やってみるかア」

「え？」

刀哉は目を閉じる。その瞬間から森が揺れ始めた。

風が猛る。

大気の精霊が騒ぎ出したのだ。

「うるせエよ……黙って俺にひれ伏せばいいんだッ！」

揺れ動く森。

しかしその揺れも段々と収まっていく。

「ハッ……最初からそうすりゃいいんだよ」

そういつて刀哉は手を出す。

「来い」

ぼ、と、その手の内で火が燃え盛る。

「ば、馬鹿な……」

「すごいです！ トーヤさんはとても優秀なんですね！」

詠唱破棄、そして精霊を屈伏させるだけの力。人間のスペックを越えている。

「セルテイ。あとはどんな魔法があるんだア？」

「後はですね……攻撃魔法、防御魔法、強化魔法、支援魔法があります。攻撃魔法と防御魔法はそのままですね。強化魔法は魔法で身体能力を底上げしたり、属性を身にまったりできます。支援魔法は生活に密着した魔法ですね。土の肥沃さを増したりとか」

話を聞く限り使うのは攻撃、防御、強化くらいだろう。強化も使い方によっては強い力になりそうだ。

「まあその辺は追々やってけばいいだろ。明日も長エ距離行くからそろそろ寝るか?」

風呂が無いのが若干残念ではあるが、こればかりは仕方ない。

ラディとセルティは刀哉に賛同して寝ることにした。

(やはりトーヤさんをジュレルに引き込むのは難しそうですね…
…)

(私としてはその方が良いのですが…)

刀哉が寝たのを見計らって密談を始める二人。物音を立てると気

付かれそうなので移動はせずにその場で、出来る限り小さな声で話
す。

（まだそんな事を言っているのですか！ あなたも見たでしょう
？ あれほどの群れ……それもファングですよ？ それを撃退する
とは…… A+の実力がありません）

（しかし、素姓が知れませんか？ たしかに常識は知らないよう
でしたが……それが当たり前のような振る舞い、とても記憶喪失に
は……）

ラディは本能的に相容れない存在と認識しているため、どうして
も引き入れたくはないようだ。実力は認めているのだが。

セルティはそれに反して、どうしても引き入れたい様子。上手く
誘導して近衛兵士に付けたいとまで思っている。

（それは私も思っていました。しかし、それを考慮しても有り余
る戦闘力。圧倒的な魔力。精霊さえもねじ伏せる力量。どれを取っ
ても一流です。こんな人材を引き入れない手は無いのですよ？）

（ですが！）
（どうしても引き入れたくはないようですね……まあいいでしょ
う。勝負は王都に着いてからですから。父上に相談すれば応じても
らえます）

既にセルティの頭の中では、あの手この手が展開されている。
色香に惑わせてもいいし、金で釣るもよし。いざとなれば自分が
……とさえ考えていた。

（仕方ないので今日は寝ましよう……）

（……私は認めませんからね）

（あなたの意志など父上の前では無いに等しいのですよ）

ラデイの意見を一周して、背を向けて横になる。確かに刀戟の力は驚異的だ。その実力は未知数。しかし、ジュレルに忠誠心を持ってない以上、いつ牙を剥くか分からないのだ。ラデイはそれを心配している。

(何故姫様は分かってくれないのだろうか……国王に掛け合ってみよう)

結局全ての決定権は国王にあるのだった。

「くぁ……朝かア」

少し肌寒さを感じて起き上がった。太陽はまだ低く、時間で言えば7時くらいだろう。

まだ寝ている二人を起こそうかと思ったが、止めて、まず朝食をどうにかすることが先決だと判断した。

「あんまり携帯食料を減らすわけにもいかねエからなア」

あまり携帯食料が好きではないという勝手な考えもあるのだが。

「……狩り、だなア」

愛刀の楓を携えて、森の中へ入る。

雑草の朝露のせいで裾が濡れてしまうのだが、特に気にせず進む。

森の中をしばらく歩き、少し深いところまで来て、立ち止まった。

「ふう……さアて、獲物はいるかア？」

目を瞑り、感覚を研ぎ澄ます。

俗に言う、気配を探るといふ行為。この世界に来てから、全てのステータスが底上げされていると感じた刀哉は、色々試していたのだ。

その内の一つが気配探索。

覚え立てで範囲はそこまで広くないのだが、鍛えることで範囲も広がることを確認済み。

多用すれば使い勝手のいい力になるだろう。

「そつちかア」

僅かに、刀哉の探索網に引っかかった気配。刀哉は刀を抜いてそれを追う。

「ーウサギかア。朝食には上々ッ！」

刀哉に気付いて逃げ出すウサギ。

しかし刀哉はそれをみすみす逃すような真似はしない。

一瞬のうちに振りかぶって、刀を投擲した。

刀は風を裂き、ウサギに避ける暇さえ与えずに、その身に突き刺さって、地面とウサギを縫い付ける。

「よし、とりあえず血抜きだけはしとかねエとな」

皮を剥いで、肉が落ちないように身を裂く。楓の血を拭いてから、手に提げて馬車へと戻った。

「お？ 起きたかア。丁度いいなア。朝飯にすんぞ」

「貴様……それは何だ？」

「ラデイよオ、その態度もう少し何とかならねエかア？ あとこれ
れはウサギだ」

昨日の道中でもラデイは刀哉の名前を呼んだことはない。

「ふん……」

「ラデイ……？」

「ひ、姫様!？」

起き上がってきたセルティが、ラデイの肩に、ぼんと手を乗せる。

「あなたは！ 何度言ったら！ 分かるんですか！」

怒鳴られるラデイ。

まったく反抗できない状態だ。

「それとも……解雇されたいのですか？」

ゆらり、とセルティの背後から黒いオーラ。その笑顔にも怒りが滲んでいる。

「そ、それだけは！」

慌てて助けを乞うしかないラディ。いかに近衛兵士といえど、雇われの身なので解雇は困る。

「ラディはセルティに頭が上がらねエんだなア……まア、とりあえず朝飯にしようか。食ったらすぐ出発だ」

セルティは元気良く、ラディはしぶしぶと返事をして、焼けたウサギの肉を口に入れた。

街までは後少し。

第二章 【都の戦火】 五（前書き）

感想いただきました。
なるほど確かに。納得です。
ありがとうございます。

とりあえず、頑張ります。

第二章 【都の戦火】 五

日が山に隠れようとした時、森が切れて街が見えた。

「あれかア？」

「そうですね。あれがセルです。王都程ではないですけど、結構大きくて賑わった街です」

「そんじゃ、とつと入って宿取っちまおうかア」

馬を驚かせて走らせる。

十分もしないうちに街に着いた。

「商人か？」

街の門番が、馬車を止めるように指示して刀哉に聞いてきた。街に入るための検問のようなものらしい。

「いいやア、旅人だよ」

「積み荷を見ても？」

「構わねエよ。積み荷つつーより人だがなア」

門番は刀哉の言葉に首を傾げながらも、荷台の中を見る。

「し、失礼しましたっ」

慌てて幌を閉じて戻ってくる門番。

それもそのはず、一介の警備兵が姫にそう容易く目通り出来るはずがないのだから。

「通って良いぞ」

「身分証とかいらねエのか？」

異世界の住人である刀哉に身分証などあるはずもないのだが、素通りするのも変だし、姫を連れていることで特に身分を疑われる事もないだろうと思つての行為だった。

「問題ない。行け」

予想通りすんなり通されて、馬車を引いて街に入る。

「とりあえず宿探さねエとな……それより先に馬車を置く所かア？」

「馬車を置くところならすぐ右だ。あそこに見えるだろう？」

馬車置き場を刀哉が探しているのを見て、ラディが教えてくれる。言われた通りに右を見ると、なるほど、たしかに馬車置き場があった。刀哉は馬車を引いて店先に立っていた、恰幅のいい男に話しかける。

「1日預かるので幾らになるんだ？」

「はい、銅貨十枚になります」

メタボに聞いた言葉をそっくり後ろに返す。刀哉もそこそのお金はあるのだが、レートがさっぱりわからない。そしてこの馬車は刀哉のものじゃない。

言われれば半分くらいは出すつもりだが、さすが姫。快く出してくれた。

もつとも、出したのはラディだが。

「さアて、次は宿だなア。ラディ、どっか知ってるかア？」

「我々が泊まったのはあの宿だな」

ラディが指差した方を見る。

……デカイ。とてつもなくデカイ。あんなので泊まっていく客がいるのか。

ああ、ここにいた。

「馬鹿か」

「な、なんだと!？」

「あんな宿泊まれる訳ねエだろ。金がねエんだよ。……いや、お前らは好きにしてくれ。俺ア安い宿探す」

そつえばコイツらは金持ちだった。すっかり忘れていたよ。

刀哉はラディ達を置いて宿を探しに出た。

「行ってしまいましたね……」

「それはそつでしょう。あそこは金貨五枚出さなければ泊まれませんから」

「仕方がありません。私たちは先に休ませてもらいましょうか」

姫とその護衛は街を見て回る訳でもなく、すぐ宿へ向かった。

「ふうん……なる程なア。大体レートが分かってきた」

店先に並んだ商品を見て、頭の中で変換する。

銅貨一枚が百円程度。

銀貨一枚が五千円。

金貨一枚が一万円といった所だろう。

殆ど出回っていないが、白金貨と言うのもあり、これは一枚十万円くらいである。

理解した所で、自分の所持金を見てみた。

銅貨が三十枚。銀貨が十五枚。金貨は無し。日本円に換算すると七万八千円といったところか。

「随分多いなア……シラフィ、いくら使わないって言っても仕事ね対価にしちゃア多いんじゃないかねエの？」

働いたのは四日に満たない。だというのに四日で八万円と言うのは――破格だ。

「また返しに行くかア。……問題はどうかやって稼ぐかだよなア……あ？」

丁度目に止まった看板。
そこにはギルドの文字。

「ギルド、ねエ。話だけ聞いてみるかア」

刀哉はすぐ扉を開けた。

中に入ってみると、すぐ前にカウンターがあった。カウンターには二人の女性が立っている。受付とその補助のようだ。補助は雑用も兼ねているらしい。

後は端の方にシヨップがある程度か。

「なア、ギルドについての説明ってもらえるのかア？」

「はい。立って話すのもなんですからお座りください」

受付嬢はカウンター前の椅子を刀哉に勧める。

「あア、悪イな」

「ではご説明を致しましょうか？」

「頼む」

受付嬢は、はい、と頷き説明を始める。

「ギルドとは一般の人が依頼をする場所になります。職種としましては、雑事、討伐、護衛、採集、運搬の五種類からなっております。基本的に登録されますと、全ての仕事を受けることが可能です。登録に関しては、ギルド側が試験を行い、その上での認定となります。ランクはD-からのスタートですね。ランクを上げるためには相応の力が必要になりますので、その方の力の証明が必要です。」

次に依頼ですが、基本的にギルドは依頼を斡旋するだけです、依頼を受けた後は当事者同士の問題になります。こちらは関与いたしません。ランクがB+以上になりますと、ギルドから依頼が行くこともあります。……基本的な説明は以上ですが何か質問は？」

「登録するための試験の内容が知っていてエ」

なにせ今の刀哉には時間がない。明日セルティに着いていかなければ足が無くなるのだ。

「こちらが用意した職員との戦闘になります。職員が十分な力を持ってしていると認識すれば合格です」

「なるほどなア。……そんじゃア、登録頼む」

戦闘だけでいいなら簡単だ。すぐに終わる。

「かしこまりました。安全措置として、武器はこちらの中からお選びください。防具等はそのままで宜しいですよ。準備が出来たらお声をー」

「これでいい。さっさと始めようぜエ」

武器が立て掛けられた箱の中から刀哉が選んだのは、シャムシールと呼ばれる曲刀。残念ながら刀は無かった。

「……はい。かしこまりました。こちらへどうぞ」

カウンターの隣の扉から奥へ案内される。

進んだ先は、外になっていて、周りを壁で囲まれた小さな闘技場に見える。

「職員がすぐに参ります。少々お待ちください」

受付嬢が戻っていく。

隙を潰すために、シラムシールを抜いた。

シラムシールを見て刀戟は思う。なるほど、たしかに安全だ。刃は潰されているため切れることはない。当たり所が悪くない限り怪我を負うことも無いだろう。

「お待ちせしました。こちらが試験官になります」

「はっはっは！ ようこそギルドへ！ 試験官のガイルだ！ 早速始めようか？」

出て来たのは、熊のような男。頭は短く刈り込んで、顎髭を生やしたガタイのいい男。

得物は両手剣のようだ。

一言で言えば――むさ苦しい。

「ンじゃ始めようぜエ」

「それでは合図を頼む」

ガイルが受付嬢に開始の合図をするように言った。

「はい。それでは両者、構えて――始めっ」

始め、が聞こえた瞬間、ガイルが動く。

踏み込み、即座に刀戟へと接近してきた。

「ふんっ」

上段に構えた両手剣が一気に振り落とされる。これではいかに刃を潰しているとは言え、骨が砕けてしまう。

しかしそんな一直線の攻撃が刀戟に当たる筈も無く、半身でかわす。

「オイオイ、そんなモン振り落としたり死ぬぜエ？」

「加減はしているよ！ はっはっは！」

笑いながら軽々と両手剣を振り回す態。はつきり言って、これは悪夢だ。

「まア、敵じゃねエけどな」

一転、反撃へー

横薙ぎに振るわれた両手剣をかわして、がら空きの胸へシャムシールを入れる。

振り抜き、背後に回り、背中にもう一撃。

鎧が甲高い金属音を放った。

「ぐっ……むう、二撃も入れられてしまったか……合格だ。名は？」

二撃入れた事で、ガイルは止まった。どうやらこれで試験は終わり。合格らしい。

「トーヤ・サナダ」

「うむ。トーヤ君、奥で受付を済ませたまえ」

ガイルは受付嬢に連れて行くように指示する。それに倣って刀戟は受付嬢に着いていった。

「トーヤ・サナダ様。ランクはDからのスタートになります。こちらのプレートが身分証の代わりになりますので無くさないようお願いします。再発行はできません」

「スタートはD - からじゃねエのか？」

「通常ですとそうなのですが、ガイルさんがDからのスタートにする、と仰られたので」

ガイルは刀戟の力が相当なものだと判断したが、さすがに高すぎるランクにする訳にもいかないのでDからのスタートにしたらしい。

「これで登録は終了です。依頼をお受けになりますか？」

「いいや、それより、安い宿知らねエか？」

「ここかア」

受付嬢に聞いた宿に着いた。たしかに、安さが売りのようだ。風呂はなんとか付いているようだが、ほとんど素泊まり。食事は無いようだ。

「一泊頼む」

「銅貨十枚。トイレはそこ右に曲がった所。風呂はその前」

素っ気ない。

部屋の番号が書かれた鍵を受け取って部屋に向かう。
荷物を下ろし、部屋に鍵を書けて風呂に向かった。

食事は既に済ませてあるので、後は寝るだけ、といったところか。

「あー…… 1日1回は風呂に入りてエもんだ。……ま、無理かア」

ダラダラと湯船に浸かるような事はせずに、すぐ上がった。
部屋に戻ってベッドに入ったが、悲しい事実気付いた刀哉。

「……ベッド、超硬エ……」

これは朝起きたら間違いなく体が痛くなるパターンだ……そう思
いながらも、もうどうしようもない。

寝るしか無かった。

「……あア？」

せつかく寝ようとしたのに、下の階がバタバタうるさい。
しかもそのバタバタした音は階段を駆け上がりー

「嫌な予感だア」

刀哉の部屋の扉を乱暴に開け放った。

「マズいことになった……!!」

「……それ俺に関係あんの？」

非常に面倒だった。今から寝ようとした所に寝れなくなる要因が増えようとしているのだから。

ため息を一つ、面倒くさげな目を、飛び込んできたラディに向け
た。

その目は、次にラディが告げる言葉で開かれることになる。

「姫様が……さらわれた」

第二章 【都の戦火】 六（前書き）

はははははっ！

まさかの二日連続更新！

まあ、今回は短めですが。

感想、評価、お待ちしてます。

第二章 【都の戦火】 六

「さらわれたア？ 誰にだよ」

そんな事を話してる隙はないとばかりに、ラディは強引に刀哉を宿から連れ出す。

「昼間は暖かったが、夜の空気は少し冷たい。」

「私が付いていながら情けない話だが……宿を取ったその後、私
が買い出しに出ている間にさらわれたようだ」

走りながら刀哉に話す。

「さらわれた訳じゃねエんじゃねエのか？ どっか出掛けたとか
……」

「それは無い。宿の主人が言っていたよ。見知らぬ男達に運ばれ
ていくのを見た、と」

あの姫様がそう簡単にさらわれるとも思わない。魔法で撃退する
ことも出来ただろう。しかし、それをしなかったということは――

（不意を突かれて眠らされた、が妥当だろオ）

シラフィに聞いた話では、魔法を使える人間は強い。しかし、そ
れは集団戦、尚且つ威力の話。接近戦には弱い筈だ。

「だがなア……セルテイのいる場所の目処はついてんのかア？」
「先程門番に聞いた話では、奴隷商が街に入ったとのことだ。奴らめ……姫様をさらった罪、必ず償わせてくれる」

(奴隷ねエ……そんなもんがいるのかア)

異世界ということを更に実感させられる。

魔法といい、魔物といい、この世界には驚きと発見がいっぱいだ。

「あれだ！」

「正面から潰すかア？」

「当然！」

刀哉達が馬を預けた所に、一台の大きい馬車。あれが奴隷商の馬車だろうか。

ラディはロングソードを腰から抜き放ち、刀哉は楓を鞘から引き抜く。

「な、なんだ貴様ら！」

貸し厩の主人に負けずとも劣らないメタボの持ち主だ。

奴隷商は、正面から走ってくる二人を見て狼狽したが、すぐさま控えていた傭兵に指示を出す。

「オマエ左な」

「では右を頼む」

自分が相手をする標的に向かって二人は疾走する。

「試したい事あったから丁度いいなア……纏え、灼熱」

楓に魔力を通して、魔法へと変換。

一瞬の内に、楓は灼熱の炎を纏う刀へと変わった。

それを構えて、走る。

走るたびに炎が揺れて、ちらちらと燐光を散らせる。

「貴様、魔術師かつ」

「残念、不正解。俺ア魔術師じゃねエよ……不正解者には残念賞としてエー」

右手に持った楓を横薙ぎに振るった。

「速やかな死をプレゼントオ。ちなみに正解はギルドランクDの新米冒険者でしたア」

灼き斬る。

ただそれだけだった。首を落とされた傭兵は、重力に従って力無く崩れ落ちた。

「あつちも……終わったみてエだな」

ちらりとラデイが向かった方へ視線を向ける。ラデイが相手をした傭兵は袈裟切りに引き裂かれ、倒れた後だった。

残るは――汚らしいメタボ。

「ラデイ、こいつどオするよ？」

「本来ならばこの街の騎士団に引き渡して、法律に則った刑罰で

罰するのだが……都合のいいことに私は近衛騎士。そして姫様を拐かした罪は死と相場が決まっているのだがな？」

いつも堅い顔をしたラデイが今は笑顔だ。ーもつとも黒いオーラが全開な訳だけでも。

(あア、ラデイもかア……)

根は真面目で素直な奴だと思っていた刀哉にとっては、少しばかりシヨックだ。

「ソイツは任せる。俺アセルティを連れてくるからよオ」
「任された。ククク……」

(あーいう奴も怒らせると怖えエんだよなア……)

「ひいつ！ た、助けー」
「問答無用っ！ ハハハハハッ」

馬車の荷台に向かう刀哉の後ろで、ラデイの壊れた高笑いが響いた。

「お、いたいたア……オイ、起きろよ姫様ア」
「ん……む……どちら様で……？」
「トーヤ様だよ姫様」

寝ぼけたセルティに返答したその瞬間、セルティの目はカッと見開かれて後ずさる。

「ととと、トーヤさん！？ 何故ここにっ！？ ……っ、あら？ ここはどこですか？」

いつか見たような反応だ。何か。自分は寝起きに見ると後ずさりしたくなるような顔なのか。

自分で思って、刀哉は少し悲しくなった。

「ここは奴隷商の馬車の荷台だア。セルティがさらわれたってラデイが騒ぐからよオ」

「それはそれは……」ご迷惑をおかけしました」

「気にすんな。それよか早く戻って寝てエ」

刀哉の体内時計で言ったら、もう十時は過ぎているだろう。ルクからここまでで疲れているのだから、もうさすがに寝たい。

「姫様はいたか？」

「あア。ンじゃ、俺ア戻る」

ラデイが来たのを確認して、刀哉はすぐ宿へと引き返した。後ろで何か言っているような気もするが、それより眠気の方がデカイ。後ろの声など全く耳に入らなかった。

「また、行ってしまわれましたね……」

「トーヤめ……姫様に失礼だ」

「あら？ ラデイ、いつからトーヤさんを名前で？ ふふふ、いつの間にか仲良くなっていたんですねー」

「べ、別に他意はございません！ ただ、その……少しは見直し

たというだけで……」

「ふふふ」

「姫様！？ 私の話聞いてるんですかっ！？」

刀哉がいない空間でセルティの笑い声と、ラディの音が響く。

「揃ったなア。ンじゃ、出発しよオカ」

翌朝。

朝食をそれぞれ済ませて、馬車に食料や水を積む。また王都への旅に戻るのだ。

「セルティ、王都まで後どのくらいだア？」

「そうですね……早ければ2日、そうでなくとも3日で着きます」

早馬を送った時は三日で帰ってきたのに……と刀哉は思う。

まあ、馬車だし、そこまでスピードも出していないので仕方がないと思つて諦めることにした。

街道はほぼ真っ直ぐで、刀哉は御者台にいるものの、殆ど馬に任せっぱなしで、セルティとラディの会話に参加していた。

「ああ？ ラディ、オマエ男じゃねエの？」

「ぐっ……確かに私は身長も高いし、声も低いし、髪も短いが……れっきとした女だ！」

（なんだよ、そうだったのか……鎧のせいでガタイも良く見えるしなア。獲物もロングソードなんてモン使ってるし）

近くで見れば、綺麗な顔をしているのだが、ベリーショートということもあって、イケメンだな、くらいにしか見ていなかった刀哉である。

「私の名は、ラディーナ・ニコラスと言う。姫様は愛称でラディと呼ぶが……」

「おオ、名前でしっくり来た。でもよオ、何でそんな鎧着てるんだよ？」

確かに立派ではあるが……刀哉の認識が間違っていなければあの鎧は男ものだ。

「本当は女ものの近衛騎士の鎧があるんですけど……ラディッたらこの長身でしょう？ サイズが合う鎧が無くて」

「今急ぎで作ってもらっているんだ」

納得。しかし声を聞いても女と気付かないのは不思議だ。生まれてきた性別を間違えたのではなからうか。

……いや、ただ声が低いだけのようだ。

顔は整っている為、不細工ではない。綺麗と言われる部類に入る筈だ。

しかし短い髪が全てを台無しにしている。まあ、女と認識した今では、十分美人に見えるのだが。

「そうかア……それは悪かったなア。男なんて言っちゃまって」

「い、いや、構わない……初対面の人は大抵勘違いするから」

それはそれで、またつらい物がありそうだ。

「なら口調直したらどうだア？ そうすりゃいい女になると思っただけだなア」

「ば、ばか！ いきなり何を言い出すんだ！」

「……何怒ってんだア？」

怒っているわけではなく、ただの羞恥からなる照れ隠しなのだが――刀戟は気付かない。

「ふふふ」

その横で、セルティが微笑ましそうに笑っているのにも、二人は気付かないままであった。

王都までは、まだしばらくかかりそうだ。
馬車は青空の下に伸びる街道に沿って、ゆっくり進んでいく。

第二章 【都の戦火】 六（後書き）

ラディはオンナノコでした。
ツンデレでもありました。

男だと思ってた人は何人いるかな？

ふふふ

第二章 【都の戦火】 七（前書き）

下のリンクが邪魔、とのことでしたので消させていただきました。

今回は少々粗が目立ちますね…難しい。

感想、評価、指摘等お待ちしております。

第二章 【都の戦火】 七

「なんだ、結局ギルド登録したのか」

「あア。生きて行くには金が必要。一番手っ取り早いのはギルドだったからよオ」

馬車の中で雑談中。旅ももう二日目に突入していた。

魔物も盗賊も出てこないの、至って平和だ。ちらりと外を見れば、既に空は赤く染まり始めていた。

（姫様、やはりトーヤを引き込むのは難しいのでは……）

（いいえ、問題ありません。お金ならギルド以上に出す自信があります）

セルティとしては一般の近衛騎士の三倍の給金くらいは支払う予定だ。しかし刀哉は安定した暮らしに興味が無く、目的もあるが故にセルティには靡かないだろう。

このことをセルティが知るのもう少し後になる。

「長エな……後どんくらいあるんだ？」

「このスピードで行けば夜には着くな。もうしばらくだ」

かたかたと揺れる馬車。

やることもなく、暇なのでセルティとラディーナは雑談中。

刀哉は楓の手入れを始めていた。

(……なんか刀身曲がつてねエか？　もしかして……いや、もしかしなくてもアレのせいかな)

あの時使った刀に炎を纏わせる魔法。炎が白く見えるほどの高熱に曝されたせいで、微妙に曲がつてしまった。

いかに職人が鍛え上げた業物だとしても、数千度の高熱には耐えきれなかった。

(どうしたモンかなア……)

斬れない事はないが、限りなく斬りにくい。

仕方ないので新しい刀を買っしかないと諦めた。

「なア、魔法を纏わせても大丈夫な刀つてねエかな？」

「うーん……私には分かりませんね。ラデイの方が詳しいんじゃないですか？」

そう言つてラデイの方を見る。

「私は魔法を使えないからよく分からないが……そういう加工をされた武器ならあるはずだ。魔法騎士隊はそんな武器を使つてた筈だ」

「まア、王都行つてから考えりゃアいいか」

王都まで魔物も出そうにねエしな、ところの中で付け加え、自己完結した。

空はもう薄暗い。

ふと、街道の先を見ると、明かりがぼつりぼつりと見え始めている。

「お、アレじゃねエか？」

刀哉の言葉に反応して、二人が目を向ける。

「ああ、あれだ。やっと着いたな」

「早く行きましょう！」

セルティが急かす。

刀哉は馬車のスピードを上げて、王都を目指した。

明かりが見える範囲まで近づいていた事もあって、割とすぐに王都まで着いた。が、しかし中の雰囲気はどうもおかしい。静かすぎるのだ。

「あれ……どうしたんでしょう。いつもなら門は空いているのに」

「門番はいるみてエだな」

馬車を引いて門番のもとへ近づく。門番の顔もどことなく厳しい気がする。

「なんかあったのか？」

「ザカが攻めてきたとの報告が入った。今報告があった地へ部隊を出しているが、しばらくは厳戒体制が続くな」

（ルクの事かア。まア、先遣隊は潰したし、こっちの兵士が向かったと知ればザカも退かざるを得ねエだろオな）

先遣隊を潰されたというのはいもうザカの耳にも入っているだろうし、ジュレルの兵も既にルク付近まで近付いていることだろう。

わざわざ体勢が整った所に飛び込むような事は、やられに行くと同義。ザカに残されたのは退くという選択だけ。

「で、入っていいかア？」

「身分を証明出来るものと積み荷を見せろ」

刀哉は作ったばかりのギルドカードを見せる。

「ギルドの冒険者か……積み荷は？」

「積み荷って訳じゃねエが……ま、見れば分かるだろオ」

警備兵は刀哉の言葉に首を傾げながらも、荷台の中を見る。

「し、失礼しました！」

セルの門番と同じ反応だ。

若干面白かった。

「通って良いぞ……それと、その方たちは至急城にお連れするよ
うに」

「城だな。わかった」

警備兵が開いた門をくぐり、街中に入る。

厳戒体制のせいかな、どうにも活気が無い。

「厳戒体制、ねエ……」

「とりあえず王城まで行きましょう。馬車を置けるところもあり
ますので」

「……俺も行くのかア？」

特に何も無いというのに行って大丈夫なのか。

「来て下さらないんですか……？」

「……行くよ」

なし崩し的に行くことになってしまった。

(……流されやすいのか？ 俺ア)

「只今帰りました、お父様」

「セルティ……無事だったか」

セルティに付いていったら、髭だらけのオジサンがいた。
お父様って事は、あの髭オヤジが国王で間違いないだろう。

さすが国王。威厳がバリバリだ。

「こちらはトーヤ・サナダ様。私の命の恩人です」

「そんなつもりはねえんだが……」

さりげなく否定。事実としては馬車に乗れるというだけで、面倒な人間を排除しただけなのだが。

「そうかそうか！ 娘の恩人か！ ならばなにか礼をせねばなるまい！ なにか欲しい物はあるかね？」

「あー……いや、大丈夫ッす」

「遠慮などするな！ なにせ娘の恩人だからな！」

テンション高くて絡みづらい。苦手だ。こういう人。

「ンじゃ、刀が欲しいンすけど。魔力加工のされた奴が」

「刀、か。ふむ、探してみよう」

なんだかんだで貰ってしまう刀哉だった。

「わざわざここまで来て疲れてるだろう？ 今日泊まっていこうかい？」

「いや、そこまで世話ンなる訳には……」

「泊まっていけますよね」

「……ハイ、泊まらせてイタダキマス」

逆らってはいけないーそう本能が訴えかけてきた。
自分はセルティに何かしたのか。何もしてない筈なのにそう思っ
てしまうのは何故だろう。

（仕方ねエ。今日は泊まっていくかア）

明日すぐに出れば問題ない、ということにした。

「では食事にしましょうか」

なぜセルティの機嫌がいいのか……さっぱりわからなかった。

「あー……生き返るウ……」

いわれるがままに風呂に連れて行かれ、せつかくだから入ってい
るのだが……デカイ。

まるで銭湯のようだ。

絶対に個人で使うものではないと思う。

「……ン？」

カラカラカラーとドアが開く音。誰か入ってきたのだろうか。

「お湯加減はどうですか？」

「ーブツ！」

セルティだった。

「おま、何でここに!？」

「あら？ なにかおかしいですか？」

絶対わかつてる。わかつててやってる。

一応、前は隠しているものの、防衛ラインは布一枚。ふくよかな膨らみのラインが見えてしまっている。

そして歩くたびに揺れる薄い布ー！。

湯煙の間から覗く白い肢体。僅かに上気した肌は、赤みを帯びている。

「こつち来ンなっ！ いや、俺が出るっ」

「私と一緒にするのはお嫌ですか？」

「嫌じゃねエが無理っ」

出来る限り見ないように湯船から上がろうとする。

「まあまあ 今出てもトーヤさんのお着替えはありませんよ？
今洗濯中ですから」

「なっ……………」

今出ればもれなくマッパ。

そのまま城の中を歩く訳にもいかない。下手すれば着替えを持ってきた使用人（もれなく女性）に鉢合わせする。

「逃げ道は、ねエのか……」

「ですから一緒に入りましょう？」

「オーケーわかった。だが、こっちに来るなよ？」

「ふふふー それは出来ません」

ふにっ

「アゝーっ！」

背中につ！ 背中になにか柔らかいモノがつ！

「あらあら。どうなされました？」

「やめっ、離れてくれエっ！」

もがくが、抱きつく力が案外強くて離れられない。その間にも柔らかな感触は続く。

「離しません」

「アゝーっ！……」

「あら？ トーヤさん？」

いきなり力が抜けてぐったりした刀哉。

そーっとな顔を見てみると……

「気を失っているんですか……？ ちょっと、やりすぎちゃいましたかね？」

ちよっとなごころではない。

刀哉は使用人（女性）に着替えさせられて、部屋へ運ばれた。

翌日まで目を覚ます事はなかったという。

第二章 【都の戦火】 八（前書き）

なんとか更新：

コメントありがとうございます！

励みになりました！

お気に入り登録も増えてうれしい限りです。

第二章、長くてごめんなさい。

一向にタイトルに行き着かない…

第二章 【都の戦火】 八

「うぐ……」

呻き声と共に目が覚める。眩い光に顔をしかめた。

意識は完全に覚醒したが、自分が何故見知らぬベッドにいるのか把握できない刀哉である。

「どこだここ……つか、俺ア一体……」

そこまで言っただけで思い出す。

城まで来て、国王と話して、それで、それでー

「……オウ……なんてこったア……つか、誰が俺を着替えさせたんだア？」

うん。わかってる。わかってんだよ。この城の中の使用人は女性しかないことを。

それでも現実から逃げたい時がある。

「うあ、無理。気まずい。……逃げるかア」

のそりとベッドから這い出る。

逃げるとは言ったが、困ったことに服が無い。バスローブもどきを着ているのだが、ずっと着ていた制服が無い。

刀哉は決められた制服をしつかり着る性格ではなかったのだから、こ

の世界に来た時の服装は、黒のスラックスとワイシャツ、そして黒のパーカーである。

それなりに愛着もあるし、この世界の服はコスプレみたいで抵抗がある。なんとかして取り返したい刀哉だった。

「しかし……どこにあるか分からねエよなア」

とにかくデカイ。城っただけあってデカイ。そしてここがどこかさえわからない。つまり、現在刀哉は身動きが取れない状態なのだ。

「外に出るにしても……このカツコじゃ無理があるしよオ……着替えはねエのかなつとオ」

言ってるそばから発見。

ベッドの傍の棚に置かれた黒い服。というよりダークグレーか。刀哉の着ていた制服ではないようだ。

辺りを見回しても、他に服は無いようなので、仕方なくその服に手を伸ばして着る事にする。

「……なんか神父みてエな服だな……まア文句は言ってられねエんだが。……さて、どうするか」

気配を探ってみたところ、部屋の外、ドアの前に二人兵士がいる。そして楓は依然曲がったまま。できるなら手放したくない刀なので……。

武器になりそうなのは魔力だけ。別に問題はないのだが、下手に問題を起こして指名手配でもされたらかなわない。

「残るは窓かア。しかし……高エな。高いところは若干トラウマになっただけ……仕方ねエ、行くか」

窓を開け放ち、――飛ぶ。

「来い、風」

その一言で刀哉を覆うように不自然な風が集まる。

――魔法の風だ。

落下する速度は徐々に緩やかになり、地面に着く頃には落下の衝撃を感じさせない程ゆっくり降り立っていた。

「幸い旅の荷物はあつたしなア。武器屋はともかく、加工屋なんてあんのか？」

これからの行動に思いを馳せながら、衛兵に見つからないよう城門を抜ける。

街は朝ということもあり、それなりの活気があつた。しかし、その顔はどこか不安の色に染まっているような気がする。

やはり、敵が攻めてきているという事実が不安を煽っているのだろうか。

――と、余所見をしていたせいで誰かにぶつかった。

「つとオ、……大丈夫かア？ 悪イな。余所見してた」

ぶつかったのは女性。というより少女といった方がいいだろうか。深い青色の長い髪。あどけなさの残る顔。そして――同じく深い青色の目。

白い修道服おとせに身を包んだ彼女は、刀哉の手を借りて立ち上がった。

「あ、ありがとうございます。すみませんでした……私抜けてる所があるので」

「まア、余所見してた俺も悪イんだ。じゃ、氣イ付けて歩けよオ」

「あ、はい……あっ！ ちょ、ちょっと待って下さい！」

立ち去ろうとした所で修道女に呼び止められる。

「あア？ どうかしたかア？」

「えっと……最近変わったことはありませんか？ たとえば……異世界から人間が訪れた、とか」

「……知らねエな。生憎この街に来たばかりですよ」

「そうですね……ありがとうございます。では」

一礼して修道女は去っていく。一体何なのか。

「……何を知ってやがる？」

何か厄介事の匂いがする。

各地を回っているようなので、縁があればまた会う事もあるだろう。しかし、今の目的はシンに向かう事。構ってはいられない。

「とりあえず……武器屋に行ってみるかア」

今は楓を直すことが先決。

まずは武器屋で直せるか聞いてみる事にした。

「ちやーす」

見て回った限り、武器屋は何件もあった。しかし、刀戟は他の武器屋よりも、喧騒から外れたところにひっそりと建つ、この武器屋が気になった。

「いらっしやい。何をお探して？」

人の良さそうな青年が刀戟を迎える。店を経営するにはまだ若い。息子がアルバイターのどちらかだろう。

「いや、買いに来た訳じゃアねエんだ。この刀、直せねエかなと思つてよオ」

腰に提げていた楓をカウンターのの上に置く。青年はそれを手にとつて抜こうとしたが、なかなか抜けないようだ。

とは言え、抜けない訳ではないので、なんとか引き抜く事ができた。

「刀身が曲がっててよオ。これじゃ戦えねエんだ」

「なるほど……厄介ですね。少々お待ちを。……おーい！ 親父」

青年がカウンターの奥へ声を飛ばす。
しばらくすると、初老の男性が暖簾のれんをくぐって出てきた。

「どうしたレイ。クレームか？」

「違うよ。この刀を直して欲しいんだって」

「どれ……」

抜き身の刀を持ち上げて色々な角度から見ている。時折、ため息のような声を漏らしながら。

「なるほどな。直してみよう。しかし……どうやったら刀が曲がるんだ？」

「魔法を纏わせたら、ちよつとなア」

「となると、魔力加工をせねばならんかな？」

「あア、頼む。金はどのくらいかかるんだア？」

刀哉にとっては一番の心配どころだ。武器というのは総じて高いイメージがある。今の持ち合わせでは若干不安だ。

「うむ、直すだけならそこまでかからんのだがな……魔力加工の度合いにもよるの」

「出来るだけ高いレベルで頼みてエんだが……そうするといくらだア？」

「最高レベルで金貨十枚になるの」

持ち合わせの金を超えた。

しかし、これからも使うことを考えると、出来るだけ高いレベルの魔力加工が欲しい。

……ギルドで稼いでくるか。

「……じゃアそれで頼む。頭金として五万……じゃねエ、金貨五枚分置いてく。いつまで出来る？」

「そうだの……明日の昼までには出来上がるだろう」

「りよーかい。ンじゃ、頼むぜエ」

ジャラジャラと銅貨と銀貨を落とす。

残りは二万と七千。つまり手元には銀貨五枚と銅貨が二十枚だ。

刀の残金も払わなければならぬし、路銀も少し心許ない。シンに行くための移動手段も欲しいし、食料だって買わなければならぬ。

ギルドで依頼を受けるべく、刀哉は武器屋を後にした。

「武器がねエ。つーことは魔法がメインになる訳だ。ちっと面倒だが……問題ねエな」

ギルドに向かって歩きながら、自分の戦力を確認する。魔力自体はもう手足のように使えるし、魔法もほぼ完璧だ。

「魔力で刀を作ってもいいしなア」

刀という確たる物があつた方がやりやすいのは確かだがーこればかりはもう仕方がない。

「さて、依頼受けるかア」

ギルドのドアを開けて、カウンターに向かう。ギルドで依頼を受

けるのはこれが初めてである。

「依頼を受けてエんだが」

「はい、ありがとうございます。失礼ですが、ランクは？」

「Dだ」

「Dランクですと、あちらの依頼からお選びいただけます」

受付嬢は、壁に掛かっている一番端のボードを指す。

「依頼をお決めになりましたら、依頼用紙を剥がしてこちらにお持ちください」

言われた通りにボードへと向かう。ボードには五種類毎に区切っており、それぞれ紙が貼り付けてあった。

雑事には向いてないから、まずパス。

護衛は時間が掛かりすぎる……パス。

運搬も同様に時間が掛かるため、パス。

採集は……細かいことが嫌いなのでパス。

結局、討伐しかなかった。討伐の欄もそれなりの数の依頼がある。D - からC - まで。どうやらDランクの中でもC - なら受けることが出来るらしい。とは言え、C - の中でも簡単な方のようだ。

刀哉はC - の依頼に目を通す。

「ゴブリン十五匹の討伐、ねエ……報酬は、金貨四枚かア。悪くねエな。これにしよう」

即座に決めて、依頼用紙を剥がす。今から行っても、昼には終わりそう。そうすればもう一つくらい受けれるだろう。依頼用紙を受付嬢に渡し、依頼を受ける旨を伝える。

「ではプレートをお見せいただけますか？」

「あア」

貨幣袋の中に一緒に入れておいたプレートを出して受付嬢に見せる。

「……はい、確認いたしました。ではこちらの依頼を受諾いたしました。こちらが資料と地図になります。清算時に返却をしてください。ご検討をお祈りします」

「報告はこつちにすればいいんだよなア？」

「はい。討伐と採集に限り、こちらでの清算になります」

「りょーかいつとオ。ンじゃ、ゴブリン狩りに行きますかア」

まるでイチゴ狩りに行くような気軽さで、討伐に向かう刀哉だった。

第二章 【都の戦火】 九（前書き）

お待たせしました。

長い、長いよ第二章。

けど無理矢理始めるのもなあ。

詰め込みいくくない。

評価、感想、指摘等、お待ちしております。

第二章 【都の戦火】 九

ギルドで依頼を受けた場所へ着いた。

街からそう遠くは離れてない森の中。依頼の資料にはこのあたりにゴブリンの住処があるんだとか。詳細な地図は無いが、大まかな場所は分かっているとのこと、刀哉はそこに向かっていている最中である。

「しっかし……暑いな……この国は南にあるんだっけか？ どの世界も南は暑イんだな……」

まだ日も昇りきって無いというのに、この茹だるような暑さは一体なんなのか。刀哉は帽子でも買えば良かったと後悔した。というより、甘く見てた。

「今までは馬車だったから良かったけどよオ……歩きはキツいな」

色素の薄い肌に日光が燦々と降り注ぐ。ゴブリンより日光の方が強いんじゃないか。

「ハア……とつとと終わらせて帰ってエ……おオ？」

ひょこつと一匹、ゴブリンが。刀哉を見ると引っ込んでしまった。

「……追い掛けてみるか」

ゴブリンが消えた森の中へ刀哉も入った。

ゴブリンが走る。

刀哉も走る。

ーというより、ゴブリンの足が遅いので、刀哉がそれに合わせる形になっているだけ。

ゴブリンの身長は人間の半分ほど。足も短い。見れば見るほど可哀な体型である。

しばらく追い掛けて、ゴブリンが見えなくなると同時に、岩肌にはっきりと開いた穴を見付けた。これがゴブリンの住処だろうか。

「前は襲ってきたから殺したが……今回は恨みはねえんだよなア……ま、依頼だ。仕方ねえから死んでくれ」

岩肌を開いた穴に魔力を流し込む。その流し込んだ魔力から、ゴブリンの数を把握していく。

「二十つとこだなア……このまま爆破してもいいんだが……証拠持ってかねえと金が貰えねえんだよな……どうするかア」

ゴブリンは穴に閉じこもったまま出て来そうに無い。基本的にゴブリンは夕方から活動するので、当たり前といえば当たり前なのが。

どうにかしてゴブリンを引きずり出したい。穴の中には狭くて入れなさそうだ。どうしたものか。

「……待てよ?」

魔力を形にする事が出来る自分なら、簡単ではないのか? 思いたったらすぐ行動。

魔力の密度を上げて、自由に操作できるようにする。

「ここを……こうかア」

感覚で操作するのも限界だった為、両手も使う。

「出来上がリィ……ンじゃ、ゴブリンさん方いらっしやーい」

伸ばした魔力をー思いっきり引く。それだけで穴の中にいたゴブリンはズルズルと出て来た。

カラクリとしては至極単純。

伸ばした魔力の密度を高くして、刀にするように形にした。それをゴブリンの体に巻き付けて、引きずり出した、というだけのこと。

しかしながらこの方法は、言うのは容易く、行うのは難しい。…
…というより、普通の人間はそこまで膨大な魔力を持ってないし、魔力を形にするなどという芸当は出来ないので、つまるところ刀戟にしか出来ない技術だと言える。

「ギヤッ」

引きずり出された時の衝撃でゴブリンが呻く。可哀想になってきた。

「しかしまあ……仕事は仕事だ。すまねエな」

依然ゴブリンは魔力に縛られたまま。

刀哉はゴブリンの拘束をそのままにして、新しい魔力を四散させる。

そしてその魔力を二十本の剣に変えて――一斉に放った。

「指定された分のゴブリンだけでもいいんだが……どうせ復讐とかするんだろ？ つー事で全員サヨウナラ」

拘束されているゴブリンはもちろん身動きが取れない。

二十本の剣は全てゴブリンの頭に突き刺さった。

「わお……素晴らしくくらい正確なヘッドショットだぜエ……さて、と。ゴブリンの殲滅部位は耳か」

しゅるりと魔力でナイフを作り出す。

そのナイフでゴブリンの耳を一匹につき一つ、削ぎ落としていった。

「オエ……グロいな」

ウサギとかは別段問題は無いのだが……なんかゴブリンは無理。人の耳みたいで気分が悪い。

「くっ……これで全部か？ よし帰ろう」

五匹分余るのだが、刀哉はそれも削ぎ落として袋に入れた。

無駄に殺すのも何だか気が引けたというだけだ。

「……これで金貨四枚かア……次はもうちょい楽なの受けよう」
肉体的ではなく、精神的に疲れた。強い奴一匹相手にした方が楽だ。

「……コレ、頼む」

ゴブリンの耳が入った袋をギルドのカウンターに置く。

「はい、ゴブリンの討伐ですね。確認しますので少々お待ちください」

受付嬢は袋を後ろの窓口(?)に渡した。

「それでは、地図と資料を返却していただけますか？」

「あア、これが。はいよ」

バッグの中から最初に貰った地図と資料を掴み取って受付嬢に渡した。

受付嬢はそれを後ろの窓口に渡すと、代わりに何かを貰っていた。

「はい。確認しました。こちらが今回の報酬になります。それと、五匹の余剰分が加算されますので、総計が金貨五枚です」

「なるほどオ……上乗せされるのか」

話を聞けば、ギルド規定の報酬が支払われるんだとか。

「では、今回の依頼でランクがC-になりますのでプレートを示して下さい」

「ランク上がるの早エな」

「今回の依頼は昇進試験も兼ねていましたので。でもここからランクを上げるのが大変ですので頑張ってください。魔物のレベルも桁違いなので」

「桁違い、ねエ。楽しくなってきたじゃねエか」

話を聞きながらプレートを出す。プレートを受け取った受付嬢はやはり後ろの窓口に渡した。

「では、少々お待ちください」

とは言うものの、すぐにプレートは返された。見てみるとしっか

り……と刻印されていた。

「では、またのご利用をお待ちしております」

刀哉はプレートをしまつて、次の依頼を受けようとする。

……が、空腹と言うことに気付いたので、先に昼食を済ませるところにした。

よく考えてみたら、朝から何も食べてない。まあ、それは城を抜け出した自分が悪いのだが。

今頃城はどうなってるのだろうか。

さすがにあのままにしておくのもマズい気がするし、自分の服も取り戻したい。それに王様に刀を注文したままだ。受け取るか取り消すか、いずれにしても一度城には戻らなければならないようだった。

「……依頼受けたら一度帰るかア」

本音を言えばまだ恥ずかしいのだが、このままにしておくという誤解を招きそうな気がしてならない。

「ハア……うん、メシ食おうメシ」

なんだか疲れてきたので考えるのを止めた。

先に昼食を済ませることにして、目に付いた食堂に入る。

「……人多いな」

昼時故の混雑。刀哉はそれでも一つだけ席が空いてるのを見つけた。

誰かに取られない内に席を確保。メニューを開く。

「……字は読める。が、一体カロのソテーって何だア？ ……く、ここにきて異世界の弊害がっ ……」

他にもいったい何の食材なのか判別できない物ばかりだ。適当に頼んでゲテモノが出て来たらどうしよう。

「あー ……」

「くそ ……なんだこりゃア ……」

「 ……。あ、すいませーん」

「あア？」

「ひっ、す、すいません！」

誰かが話しかけてきた。

見た限り店員ではないようだ。明らかに冒険者のスタイル。

オレンジの髪を後ろで結い上げたー！所謂ポニーテールであるー！
少女。

「人の顔見て悲鳴上げるんじゃないよ」

「は、はい、すいませんっ！ し、失礼しますっ」

少女は踵を返して出て行くこととする。それを、刀哉が襟首をつかんで止めた。

「はわっ!？」

「待てよ。なんか用事あったんだろオ？」

「え、いや、そんな ……」

「あっ たんだろオ!？」

先程よりもやや強い口調で問い質す。

「はいいい……あの、相席してもいいですか？」

「なんだ、そんな事かよ……あア、好きにしろ」

刀哉が言った瞬間、少女の顔が、ぱあっと輝く。たかだか相席で大げさな奴だ、と刀哉は思う。

「ありがとうございます！ 店員さん！」

「早っ！ メニュー見てなくね!？」

刀哉の驚きの声などなんのその。店員を呼んで注文を済ませてしまっ。

「それじゃ私、定食Bで！」

「はい、定食Bですね。そちらのお客様は？」

「……同じモン頼む」

もう面倒になったので、少女と同じ物を頼んだ。同じ人間が食うんだ。食えないものが来るってことは無いだろう。

「はい、定食Bを2つですね。畏まりました。では少々お待ちください」

店員はメニューを確認して去っていく。顔がわずかに笑っているように見えたのは気のせいか。

「すごいですね！ 私以外に定食B食べる人初めて見ました！」

「……は？」

嫌な予感がした。

——その予感は、すぐに的中する事になる。

どん、とテーブルの上で盛大に自己主張する定食B。

「……なア、定食BのBってどういう意味だ？」

「それはもちろん、定食（爆裂！）のBですよ！ ささ、冷めな
い内に食べましょう！」

ふざけ。

こんな山みたいなのが胃に入りきると思ってるのか。

それ以前に、目の前の少女は一体何者だ。その細身のどこにそれ
が入るんだ。

刀哉の疑問など知る由もない少女は、ハイペースで山を処理して
いく。

ちなみに、定食Bの内容は、

ご飯（山盛り。三人前近い。）、サラダ（大皿に山盛り。パーテ
ィーとかで見るアレ。）、味噌汁（殆ど鍋。）、焼き魚（デカいの
が丸々二匹）である。

これでなんと銅貨十枚。お得と言えばお得だ。

刀哉は半分で諦めた。

「……なア、コレ、食うか？」

「え！ いいんですか！？ それじゃ、遠慮なく」

刀哉が半分食べ終わる頃には既に少女は食べ終わっていた。
そしてまだ余力があるらしい。

（俺ア今、人体の神秘を垣間見た……！）

そして、気がつけばいつの間にか少女は食べ終わっていた。

「ふー…、腹八分目です」

（……ギャ、ギャル曾_ニだ、異世界のギャル曾_ニがいる！ いや、むしろこれはギャル曾_ニ越えている……！）

一体胃の中はどうなっているのか。体のほとんど胃じゃないのか。

「ところで……お名前、教えていただけますか？」

「あ？ あア、真田刀哉。こっちで言うなら、刀哉真田になるなア。刀哉が名前だ」

「トーヤさんですね！ 私はエレン・カルコスです！ トーヤさんも冒険者ですか？」

「あア……お前もか」

刀哉の問いに胸を張って答える。胸をはるほど立派な物ではない

が。

「はい！ 今日やっとDになりました！」

「へエ。んじゃ、俺先行くわ」

ランクを聞いた瞬間興味が失せた。

昼食もすませたし、ギルドに行かなきゃならないので、話を打ち切って席を立つ。

「ちょ、ちょっとまってくださいよー！」

「なんだよ？ 俺ア忙しいんだが」

「私とパーティー組みませんか？」

パーティー。

つまりは一緒に仕事をこなす為に組む組織のようなもの。仲間がいればその分仕事もはかどるが、報酬も分散される。

が、しかし、パーティー限定の依頼も受けれるという特典も付く。

「なるほど。だが断る」

「な、なんでですか！？ トーヤさん、武器持ってないし、後衛の人でしょ？」

「後衛なんて一度も言っただけ。武器は今加工してんだ」

武器なしでも戦闘はできるけどな、と心の中で付け加える。

「そ、そんなあ……せつかくパーティー組めると思ったのに……」

……

「大体お前一人じゃねエか。組んだとしても後1人は必要だろオ。」

それに俺ア旅してんだ。そんな奴とパーティー組んでも仕方ねエだろ？」

「ひ、1人じゃないです！ もう1人います！ 一回！ 一回だけ一緒に依頼受けて下さいっ」

駄目だ。この手合いはどこまでもついてくる。

「……仕方ねえ、一回だけだぞ。後は知らねえ」

そうは言ったものの、面倒なことになりそうな予感がビシバシする刀哉だった。

「言つとくけど、俺にも予定があるんだ。依頼を受ける条件は、今日1日で出来ること。それから、俺の取り分が金貨四枚以上であること。これが守れないなら依頼は受けねえ」

「う……それは仕方がないですね……」

食事の支払いを終えて、ギルドへ向かう二人。今までパートナーを組んでいたもう1人の仲間は、もうギルドにいるらしい。

「ところで……もう1人のランクは？」

「ニキちゃんは凄いですよー。なんと！ ランクCです！ 私と同じ年なのにですよ？」

それはただ単にエレンが弱いだけなんじゃないのかーそう思ったが、間違いなく落ち込むので口には出さないでおいた。

しかし、ランクCということは自分より一段上。ラディーナと同じくらいの強さだろうか。

「で？ 受ける依頼の目星は付いてんのか？」

「はい。パーティー限定依頼で、鉱山の調査兼、ワイバーンの討伐というのがあります。ランクはB。報酬は……忘れちゃいました」

「弱エオツムだなア……まアいいや。どうせギルドで確認するんだしよ」

ワイバーンの討伐はどうでもいいとして、問題は鉱山の調査だ。エレンはすぐ近くと言っていたが、登り下りもあるから時間を取るだろう。

となれば、今日受けられる最終の依頼がコレになる。いつこの国を出るかはまだ決めてないが、そう長く滞在もできない。

「最低でも十万は欲しいなァ……」

今持つてるだけで七万ちょっと。刀の加工に五万の出費だから、あと八万。

「明日1日やれば貯まるかァ」

「あ、ホラ、居ましたよ！ ニキちゃんっ」

往來の真ん中でぶんぶん手を振るエレン。恥ずかしい。それに気付いて1人こちらに向かって来るのが見えた。

腰まで伸びる黒い髪。真っ白で眩しいくらいの白い肌。髪と同じ黒い瞳。

そしてー腰に下げた。一振りの野太刀。

まるで、日本人のようだった。もしかすると東のワコウとやらの生まれか。

服装もどことなく袴に似ている。色は上下で深い藍色だが。

「エレン……そちらの方は？」

「この人はねー、一緒にパーティー組んでくれる人！」

「一回だけな。報酬の取り分にも寄るしよォ」

余りにも説明が酷い。色々大切な部分が抜け落ちていた。

「なるほど……私はニキ。ニキ・ヒザキだ。よろしく」
「トーヤ・サナダ。よろしくなア……って、ん？ ヒザキ？」

どこかで聞いた名だ。

一体どこでだったか。

あれはたしか、ルクの村ー？

「ヒザキ……刀匠か」

「む？ 私の祖父を知っているのか？」

「いや……俺の刀にな。ヒザキって銘が入ってたんだ」

そうだ。刀の整備をしたあの時。確かにヒザキと入っていた。

「刀の名は？」

「朱塗りの緩やかな乱れ刃……楓って刀だア」

「……間違いはないな。それは祖父の作。それも、大業物だ。しかし……刀を持ってないようだが、どこに？」

出来過ぎた偶然。

だが、偶然としか思えない。

「今は修理と加工の最中だア。悪イな」

「いや、気にしないでくれ。祖父の作を見たかっただけなのだ」

「ヘエ……まア、また縁があつたら見せてやるよ」

不思議だが、この二人にはまた会いそうなー！そんな予感がする。

「それより、さつさと依頼見ようぜエ」

「あ、はい！ すいませーん！」

エレンが受付嬢に話しかける。依頼用紙を貰っているようだ。

「しかし……トーヤ殿はどうやって戦うのだ？ 刀はないのだから？」

「一応魔法も使えるんだ。そりやもちろん、刀があった方が楽なんだが……無くても問題無いくらいの魔法は使える」

「そうか……羨ましい、な……」

最後の言葉がよく聞こえなかった。ニキは一体何と言ったんだろうか。

聞こうとしたが、口を開く前にそれは遮られた。

「トーヤさん！ これですよ、これ！ ホラ、報酬も問題ないでしょ！？」

エレンが依頼用紙を持って戻ってきた。それを見て刀哉は頷く。

「ああ。金貨三十枚……いい報酬だア。ランクはB-だが……」

「エレン、やはり三人居るとは言え、B-はツライんじゃないか……？ CとBの差は大きい」

「う……やっぱりそうですか……？」

エレンは困って目を伏せる。

ここにいる三人のランクは最高でもC。2つランクが上なのだ。普通なら、死んでもおかしくない。

――普通なら。

「よし、じゃア取り分の話しよオカ」

「と、トーヤさん？ 受けるんですか？」

「当然だろオ？ 金貨三十枚……つまり、最低でも金貨十枚は俺の取り分だア。で、ワイバーンだっけエ？ 楽勝だろ。さ、幾ら俺は貰えんだ？」

お金は大切。一気に十万貯まる。

これほどの良い話、受けないでなくなんて勿体無い。

「トーヤ殿……失礼だがランクは？」

「ああ？ C-だけど？ ホラ」

プレートをニキに見せる。そこにはしっかりとC-の刻印が成されていた。

「C-とB-の差がどれほどか、知らないのか？」

「受付嬢が何か言ってたなア。けどだよオ、この薄っぺらいプレートに書いてある文字で、本当にソイツの実力が分かるのかア？」

「……どういう意味だ」

ランクが下の人間に指図されるのが嫌なのか、刀戟を睨みながら低い声でニキは問う。

「言った通りだア。ちょっと聞くが、オマエCになるのにどれくらいかかった？」

「……一年だ」

「俺アC-になるまで数日。一回しか依頼受けてねエ。……さて、本当にランクで強さが計れんのか？」

ニキは黙り込んでしまう。

返す言葉が見当たらないのだ。今までの常識では、ランク〓その人個人の力量、というふうには認識されていたのを、刀戟は根底から

覆す発言をしている。

「ならば、トーヤ殿はこの依頼を完遂できる自信があるのか」

「ああ、あるね。鉱山の調査だか何だかはよくわからねエが、ワイバーンとやらに関して言えば余裕だぜエ」

何故こんなにも自信があるのかーニキには刀哉がよくわからな
い。相手は丸腰、見るからに貧弱、魔術師だといっても杖さえ持っ
てない。

そんな人間を信用できるのかー？

「ニキちゃん、やってみましょう？ トーヤさんが一緒なら……
出来る気がするんです」

「エレン……そうだな、やってみよう。トーヤ殿、よろしく頼む」

「ああ、任せろ。……で、取り分だが……」

その後の話で、トーヤの取り分が金貨十六枚、残りの金貨をニキ
とエレンで分けることになった。

ニキとエレンの目的は鉱山の調査のついでに、鉱石の採集だとい
うことなので、報酬は少なくともいい、とのこと。

その代わり、ワイバーンの相手は刀哉がメインで行うことになっ
た。ニキとエレンが鉱石を採集するときの魔物の相手も刀哉の
担当である。

「はい、こちらの依頼を受諾しました。では、こちらが資料と地
図になります。鉱山の調査については、大まかな地図の作成になり
ますので」

受付嬢からの説明を受けて、ギルドを出る。鉱山はすぐ近く。言われた方向を見れば確かに山が見えた。

「さて、行くかア。夜になる前には終わるといいなア」

「まだ人の手が加わっていない鉱山だから、調査するのは天然の洞窟になる。それほど広くないと思うから、調査自体はすぐに終わるんじゃないか？」

「そうですねー。問題はワイバーンですが……大丈夫ですよね？」

受けては見たものの、やはり心配は尽きない。

刀哉はBクラスを受けるのは初めてだが、怖さなど全く感じていないどころか、楽しみでさえある。

「大丈夫だつて。……お？アレじゃねエか？登山道」

獣道に近いが、鉱山というだけあってゴツゴツした岩が多い。しかし歩けない程ではない為、そのまま上っていくトーヤ達。

「資料によれば、洞窟は中腹あたりに確認されているようだ。以前確認に来た人間は、洞窟付近にいたワイバーンに見付かり、なんとか逃げてこれたんだとか……」

「洞窟付近、ねエ。中腹まではどのくらいだア？」

「だいたいあと一キロ程度。そんなに遠くは無いな」

登山道はさほど険しくは無く、歩いて登れる坂道。

一キロ程度ならば十分から二十分で着くだろう。

ーーそこで、突如響く音。

「……ワイバーン、かア？ 見付かった見てエだな」

「ここで戦うのは無理がある。どこか広いところにー」

「登るぞ」

一人山を登っていく刀哉。

「トーヤさん！ そっちにはワイバーンが……！」

「下に降りても広いところなんてねエ。なら上って戦った方がい
いだろオ？」

そう言って刀哉は山を駆け上がる。

二人は後ろで何か言っていたようだが、諦めたのか刀哉の後を追
って登ってきた。

「大正解……で、ご対面かア？」

「ガアアアアッ！」

響く轟音。

開けた場所に出たと思ったら、案の定ワイバーンが待ちかまえて
いた。

翼を広げ、ワイバーン威嚇する翼竜。

どこか某狩猟ゲームのティガレッツ スに似てる。

とは言え、サイズは大きくないし、色も灰色と、似ているポイン
トは形状だけなのだが。

それでも、やはり大きい。七メートル程度だろうか。そんな巨体
が、こちらに向かって吠えてると言うのはーやはり怖いものだろ
う。

「ククク……いいね、いいねエ……さすがファンタジー、退屈しねエ」

だが刀哉は恐怖を抱かない。
その顔には愉悦の嗤いさえ浮かんでいる。

後ろの二人は、恐怖に足が竦みそうなのを気力で耐えて各々武器を構える。

そして刀哉は、魔力をどろり、と垂らした。

「さてさてさてエ、竜狩りの始まりだア。行くぜエッ！」

——翼竜ワイバーンが振り上げた腕と。

——刀哉いせかいじんが展開した魔力。

瞬く間に、勝敗は決まったー！。

第二章 【都の戦火】 十（後書き）

ゆっくり話が進みます。

ごめんなさい。

悪いのは携帯です。

感想、評価、指摘等、お待ちしております。

第二章 【都の戦火】 十一

「――襲い掛かる轟腕と爪。

エレンは思わず目を瞑ってしまったが、いつまでたっても衝撃は来ない。

恐る恐る目を開いてみると、そこには――

「なんだよ、これくらい壊せよ」

「――白銀の髪を風に靡かせた男が、怠そうに立っていた。ワイバーンの爪を止めたのは、薄いグレーの膜。揺らぎ、それでいて圧倒的な強度を保つ、綺麗なカーテン。

魔法の使えないエレンにはそれが何か分からなかった。が、一拍置いて気付く。――これは魔法だ、と。

「エレン、ニキ、下がってる。血が飛ぶからなア」

二人はその言葉に反応して即座に距離を取る。出来るだけ遠くへ。しかし、刀戟を視界に収めることができる遠さへ。

「防御したはいいが……一体どうする気だ……?」

魔術師は本来後衛である。それは魔法という物が殆ど支援に使用されるから、という理由もあるが、最大の理由は詠唱に時間がかかるからである。

詠唱するときにはどんな魔術師であろうと無防備。言葉を唱えるのもそうだが、魔法を使うのには集中力が必要なのだ。故に、強化魔法を使う戦士でもなければ前衛に出ることは有り得ない。

しかし、そのニキの考えは一瞬で覆される。

「来い、灼熱」

轟、と異常なまでの熱が吹き荒れる。

ニキはその熱に思わず身構えた。肌を焦がすような風。目を開けていられない程だ。

その高温の炎の行き先はーワイバーン。

白く燃え盛る炎は、たちまちワイバーンを包み込んで焼き尽くそうとする。だが……

「へエ……あの温度で表皮を焦がしたただけかよオ。もしかして炎に強エとか？」

竜種というのは、総じて炎に強い。属性を持つのは龍種だけで、竜種には属性は存在しないのだ。竜種は殆どが体内に発火器官を持つっており、自らの炎に耐えられるよう表皮も炎に強い。

「ま、いいかア。魔力で直接やればいい話だ」

「ガアアアアアアアッ」

ワイバーンが吠えて、空気を揺らす。だが、その衝撃は刀戟に届かない。魔力の壁が阻んでいるのだ。

「縫い付けろ」

魔力の壁を崩さないまま、新しい魔力がどろりと滲み出る。それは剣のような、杭のような形を四つ形作り、一斉にワイバーンへと向かう。

「ガツ……ギヤアアアアツ！」

魔力の杭はワイバーンの翼と足を地面に繋ぎ身動きの取れぬようにした。

「クク……」

手足に刺さった杭を引き抜こうともがくが、杭は微動だにしない。ただ傷から血が溢れるばかり。

「一体……トーヤ殿は何者なんだ……」

「凄い……あれが、魔法ですか……？」

驚愕に目を開く二人。

一人は詠唱めしないで魔法を放ったことに驚き、もう一人は圧倒的な威力に驚く。

「さてと……もう暫く遊んでもいいけどよオ……まア、待ってる奴も居るからなア、終わりにさせてもらうぜエ？」

すう、と魔力壁が消え、刀哉はワイバーンと対峙する。

刀哉は右手を伸ばし、魔力を腕に這わせた。

「楓に比べれば使い易さは格段に下がるが……オマエにはこれで十分だろオ」

右手に握られた、黒い刀。全てが魔力で構成された力の塊。

「……一閃」

ひゅ、と微かに風邪を裂く音。

次いで刀が碎ける。

散った魔力は空気に溶けて霧散した。

びちゃっ

「呆気ねエなア」

ワイバーンの首が落ちて、体から力が失われ地に落ちる。
とめどなく流れる血。血の川が出来上がった。

「ば、馬鹿な……本当に、倒してしまった……」

「一人で倒すなんて……トーヤさん、凄い」

後ろで感嘆の声があがる。一人でワイバーンを倒すのは普通ブラ
ンクなのが普通なのだが、刀哉は一人で、余裕たっぷり倒してし
まった。

「ギルドランクと実力は同じとは限らない……トーヤ殿は身を以
て私に教えてくれたのだな。済まなかった。私が間違っていた」

「あア。それよりとつと殲滅部位剥ごう。どこだっけエ？」

（まったく……底が知れない男だ……いや、底が知れないどころ
じゃないな。私はまだ彼の一部分しか見ていないのだから）

まだまだ刀哉には隠された何かがある。それに、まだ刀を持って

戦った所を見ていない。あの黒い刀もそうと言えばそうなのだが、何かが違う気がした。

「あ！ 終わったみたいですよ！ 次は鉱山ですね！」

殲滅部位を入れた袋を担いで刀戟が戻ってきた。

「さア、日が落ちねエ内に片付けちまおうか」

返答も待たずに一人洞窟に突き進んでいく。

「本当に……トーヤ殿は何者なのだ……？」

ニキは呟くが、その答えが返ってくる事は無かった。

「ンじゃア、これで依頼完了だな？」

「はい。ワイバーンの殲滅部位、鉱山の経路、ともに確認できました。こちら、報酬の金貨三十枚になります。お確かめ下さい」

その後無事に鉱山の調査を終えて、三人はギルドに帰ってきていた。空は既に赤く染まり、夕方独特の生温い風が緩やかに吹いている。

依頼を完遂したことを受付嬢に報告して、報酬を受け取った。

「約束通り十六枚、貰ってくぜエ？」

「あ、はい！ えと、今日はありがとうございました！」

九十度を越える一礼。

近くにあった机に額を打ち付けないか一瞬冷や汗が出た。

「約束通り、これでお別れだな……トーヤ殿、またどこかで会った時は声を掛けてくれ。こんな私でも何か力になれることがあるだろっ」

「ま、そんな時は頼むぜエ。それじゃアな」

金貨を袋の中に詰めて、ギルドを出る。

夕暮れに染まる街並みは、どこか寂しくもあったが、それでいて活気がある不思議な光景だった。

「……仕方ねエ、城に行くかア」

さすがにそろそろマズいだらう。結果的に丸々一日行方を眩ませ
ていた事になる。あの姫様が大騒ぎしていそうな――そんな気がし
た。

「もーちよい早く帰れば良かったかなア……」

過ぎたことを後悔しても遅いのだが、そう思わずには居られない
刀哉であった。

やはり、というかなんと言つか。
城は大騒ぎである。

曰わく、

娘の恩人がさらわれた、とか
婿候補がさらわれた、とか

実は敵国のスパイだったのでは？ とか
果ては夢だったのでは、と言う奴まで出てくる始末。

「何一つマトモなのがねー」

現在、城門で兵士に止められ、怪しい人間でないことを主張している真つ最中。で、たった今国王に伝令が飛んだ。

「トーヤくうううん！」

国王が……いや、訂正。

むさ苦しいオッサンがこっちに向かって走ってくる。両手を広げて。

飛び込んでこいってことですね、わかります。

「だが断る」

ぶつかる直前に体を僅かにずらして、オッサンの突撃を避ける。

「ぶるあつ」

近くにあった資材の山に頭から突っ込むオッサン……もとい、国王。

体が半分だけ出でる。あの様子ならなんとか生きてるんじゃないかな、とか思った。

「大丈夫つすかア？」

「当然だ。国王たる者、この程度では怯まない」

せめてそのセリフは頭から盛大に流れる血を拭いてから言っただけだった。

「ところでどうして朝から姿が見えなかったのかね？ 娘が心配していたよ」

アンタ程じゃ無いだろうよ。

「いや、ちょっと路銀に乏しかったので稼いで来たんですよ」

「それなら私に言ってくれば……」

「いやいや、そこまで甘えるわけには行きませんからねエ」

実際のところ、借りを作りたくないだけだった。刀の件はセルテ
イを助けた対価故に、チャラだが、それ以上はマズい。
必要以上に受け取ると、この国に縛られることになる。それは何
としてでも避けたかった。

「そうか……あ、それよりも刀が届いているよ!」

最初感じた威厳は何処へやら。走って城へ向かう国王を見て、こ
の人も大概変な人だと刀哉は思う。

「ほら早く早く!」

「あ、はい……」

国王に急かされて共に城へ入った。

玉座の間に連れて来られて、刀哉は国王を待つ。国王は刀を取っ
てくると言っただけで何処かへ行ってしまったのだ。

「国王自ら取りに行くとか……なんかもう威厳ゼロだなア」

今はもう、ただのフランクなオジサンにしか見えない。

「あつたあつた。さ、見てくれ」

刀袋を持って国王が帰ってきた。太刀にしては少々短い気もする。

「中々刀自体が出回ってなくてな……太刀とは言えないが、とてもいい作品だとか」

刀を受け取り、袋から出す。

見た目は黒石目のような造りだが、脇差しより僅かに長い刀であった。

鯉口を切って刀を引き抜く。直刃の刃紋。刀身全てが艶消しの黒に塗られた刀。よく見なければ刃紋も見えない。

「……ありがとうございます。大切に使用させていただきますよ」

「礼など不要だ。娘の命に比べたら安い物だよ」

国王というだけあって、やはり太っ腹である。こんな王だからこそ、こんないい国になったのではないか……刀戟は純粹にそう思った。

「こんなにお世話になったのに申し訳ないんですけど……明日には国を出ようかと思えます」

「？ 何故だ？」

「目的があつて旅をしているので……長く留まることはできないんです」

あくまで目的はシンに行くこと。ここにいればいい生活が出来るだろうが……それはダメだと思っていた。自分が何者で、どうしてここに来たのか知るまでは、ゆっくりなどしてられない。

「そうか……わかった。引き留めることは出来ないようだ。だが……いつか戻ってきてくれ。セルティが君を気に入っているようだからな。セルティに言ったら引き留めるだろっから言わないでおくよ」

「なにからなにまでお世話になります……」

旅が終わったら、また戻ってきたい。そう思った。

ルクの村のみんなを連れて、ここに住むのもいいかもしれない。

「そオいえば、ザ力軍はどうなったンすか？」

「ああ、それなら撤退したようだ。総攻撃ならたまらないのだが、いつもの小競り合いの延長線みたいなものだったよ」

「なるほど……」

内心ホツとする。置いてきたエリーやシラフィが気がかりだったから。

「さ、食事にしようか。少しだけ盛大に、ね？」

国王が使用人を呼んで、食事の準備を始める。

国王を初めとして、セルティや他の大臣、何故かラディーナも一緒に席に着く。

ドンチャン騒ぎとまでは行かないが、それなりに賑やかな晩餐会になった。

そうして夜は更けていく。

第二章 【都の戦火】 十一（後書き）

今回は難産でした。

少々納得行かないところもあつたり…

お待たせした割りには内容の濃くない話でごめんなさい。
がんばって楽しくも感動できる小説にしたいと思います。

評価、感想、指摘等お待ちしております。

第二章 【都の戦火】 十二

「……………朝かア」

差し込んできた太陽の光で目が覚めた。今日は昼に刀を取りに行つてそのまま国を出る予定だ。

起き上がつて棚に置かれた服を着る。この世界に来たときから着ていた服。

「コレが一番落ち着くなア」

貰つた刀は昨日の内に分解して整備をした。銘は夜桜。刀匠はメイヤ。ヒザキとはまた違う刀匠なのだろう。それを専用のベルト（刀用のホルスター）に差して身に付ける。

「金もそこそこあるしもう一つホルスター作つとくかア」

着替えをすべて終え、部屋の扉を開けた。両側の兵士に挨拶をして、城の中を歩く。

時間で言えば8時位だろうか。城の中を歩く兵士の姿もどこことなく多い気がする。

「そついやメシどうするかア……………昨日は逃げちまつたから城でメシ食つてねエんだよなア」

もしかしたら部屋まで呼びに来てくれるのだろうか。
もしそうだとしたら部屋から出て来たのはまずかつたんじゃ……。
いざとなれば外で食べてもいいのだが、最後だし国王とかセルテ
イ、ラディーナにも会っておきたい。

「……あつこの兵士に聞くかア」

戻ってドアの前にいた兵士に訪ねる。

「なア、俺メシどうしたらいいんだア？」

「は、しばらくお待ちいただければ使用人が迎えに来るはずです」

やはり迎えが来るらしい。下手に出歩いてメシ時を逃さないで良かった。

部屋の中で再度必要な物を確認しながら使用人を待つ。

「しつかりした貨幣袋も必要だなア……ホルスターに金貨一枚ま
で……貨幣袋には銀貨一枚で釣りが来るかな。あと外套と……帽子
かア。フード付きの外套でもいいな。これに銀貨一枚と銅貨数枚か
ア？ 後は携帯食料と水か。水筒はあるから問題ねエナ」

買わなければならない物を次々記憶の中に留めていく。
確認している時、刀戟に声かけられる。

「トーヤ様、食事の用意が出来ました。ご案内いたしますのでこ
ちらへどうぞ」

「あア、ありがとう」

使用人に従って歩く。やはり城は広い。どこをどう歩いているのかさっぱりわからない。

「こちらです」

案内されるがままに、扉をくぐる。気付けば昨日食事した部屋だった。

「おはようトーヤ君。ゆっくり休めたかね？」

「えエお陰様で。それにしても城の中複雑ですよねエ」

「ああ、それは外敵から身を守るためだよ。初見ではまず把握できない仕組みだし、いろんな仕掛けもある。なかなか凄い城だろう？」

確かに凄い城だ。

技術レベルは相当高いのだろうか。これもきつとファンタジーの成せる技。

「さ、食事しよう」

「あれ、セルティは来ないんですか？」

席に着いているのは国王と刀哉のみ。とても寂しい事になっている。

「はは、セルティは朝が弱いのだよ。もう一時間程しないと起きてこない」

「そうなんですか。あ、俺昼には出発する予定なんです」

「早いのだな。ところでどこに行くつもりかな？」

後で会いに行けばいいかと思い、食事につく二人。

「シンに行こうと思ってます」

「忌み人の国か。何故そんな所に？」

「そこに行けば……俺の捜してるモンがある気がするんですよ」

「なるほどな……聞いても教えてくれなさそうだな？」

「……そつすね」

こんな所で理由を話そうものなら何をされるか分からない。

反応からしてシンを……いや、魔族を嫌っているのがありありと見て取れる。コンタクトをしているからいいものの、赤い目のままここに来ていたらどうなっていた事が。

「ならば聞かん。それで、今日は昼までどうするつもりかな？」

「街に降りて旅の準備をしようかと思ってねエ」

刀も取りに行かなきゃならないし。

「なるほど。金は大丈夫なのかね？」

「えエ、問題ないっすよオ」

答え終わった所で食事を終える。

「ご馳走様。それじゃ、街へ出ますわ」

「ああ、これを持って行きたまえ」

そういつて差し出された国王の手には一枚のプレートが握られていた。

「これは？」

「これは王城へ入るための許可証だ。もう一度帰ってくるだろう」

「？」

「ああ、なるほどオ……スイマセンねエ」

「いや、気にするな。昼はどうするかね？」

また兵士に止められるのは勘弁願いたい。

「それじゃア、それまでに戻ってくるンで。行ってきます」

返事を返して扉をくぐる。

朝少し歩いた時よりも人の数は多く、窓から見える訓練所では多くの兵士が鍛錬に勤しんでいた。

道行く兵士に、城の出口を聞いてようやく辿り着く。

掘の棧橋にある屯所の兵士に国王から貰ったプレートを見せて、やっと街並みに入ることができた。

「さて……先ずは一辺刀を見に行ってみるかア」

もしかしたらできあがっているかもしれないという淡い期待を抱きつつ、頼んだ武器屋に足を運ぶ。

「どーもオ」

「ああ、いらっしやい。刀かい？」

「ああ。時間よりちよつと早エんだが、出来上がってたら、と思つてよオ」

「そうか。うん、出来てるよ。おーい！ 親父！」

武器屋の青年ーレイが奥の暖簾に向かって声を張る。そしてすぐに、初老の男性が顔を出す。

「何かあったか……ああ、刀を取りに来たんじゃな。ちよいと待

「つておれ」

武器屋の親父はすぐに状況を判断すると、また奥に引っ込んでしまった。

そして何か物音が聞こえたかと思えば、再び暖簾をくぐって親父が出て来た。手には一振りの刀――楓を持っている。

「ほれ、出来上がったぞ。一応確認してみるといい」

「あア」

親父から楓を受け取って、鯉口を切る。

引き抜いた楓には何の違和感もなく、あっさり抜けた。刀身には、変わらぬ緩やかな乱れ刀。変わっているのは僅かに青みがかっている所だけだろうか。

「最上の魔力加工もした。試してみとくれ」

刀哉は言われた通りに魔力を込める。あの時よりも強く、大量に。

「纏え、轟火」

言葉を紡いだ瞬間、ポツと炎が吹き出て、店内を膨大な光で照らす。

白銀の輝きを放ちながら燃え盛る炎。凄まじい熱量が顔の皮膚を撫でた。

――確かに、魔力加工は相当な物のようだ。

刀を溶かす勢いで魔法を付加したのに、全く変わった様子がない。

流石、と言ったところか。

刀哉は満足して、炎を解除、楓を鞘にしまった。

「文句なしの出来映えだア。ありがとよ。これ、残りの金貨」

袋から金貨五枚を出してカウンターに置いた。

支払いを終えて店を出ようとしたが、親父に呼び止められる。

「待て待て、これを持って行かんか」

そう言っただけでカウンターの下から出したのは、大きめのベルト。ポーチのようなものも付いている。

「こりゃア……刀のホルスターかア？ これは頼んでねエだろ？」

「サービスじゃよ。久々に大口ねお客だからの。鼻屑にしとくれよ？」

「悪いな。ありがたく受け取らせて貰うぜエ」

ホルスターを腰に巻いて、夜桜とクロスするように楓を差した。

「久々に刀を見せてもらった礼のようなものじゃ。お主の旅に幸あらんことを」

出て行く間際、聞こえてきた言葉。その言葉に刀哉は心の中で言葉を返した。

「後は……特にねえな」

外套や新しい荷物袋、その他道具を買い終えて一息付いた。残金はまだ金貨十五枚残っている。この先まだ困りはしないだろう。ちなみに貨幣はホルスターに付いていたポーチに収納してある。

「向かうは西の海のシン……だがそこに行くには海路が必要だよなア……しかも一番近い国がザカと来た。出来れば通りたくねえんだけど……」

どうするか、と頭をひねる。

そもそもシンまで船があるかも分からない。閉鎖的な国に誰が好き好んで船を出すのか。

「……ン？ 待てよオ？ ザカに行かなきゃならねえのは地図上の話であって、東のワコウから更に東に行きゃア、シンに着くんじ

「やねエか？」

となれば次に目指すのはルノー。海路に関してはワコウに至ってから考えればいい。ワコウは中立とは言え、完全な閉鎖国家では無いはず。定期便くらい出ているだろう。

「よし、決まりイ。ついでにルノーまでの依頼があつたら受けてみるかア？」

そうなれば善は急げ。

刀哉はすぐさまギルドへ向かう。

ギルドの受付嬢に、聞いてみればボードを見るとのこと。ちなみに昨日の依頼でランクがCになった。パーティー単位での依頼だったと言つことさほど上がらなかったが。

「……ン？ パーティー募集？ 行き先はみんなで決めましょう？ 仲良しクラブかつつの」

「し、失礼な！ ちゃんとしたパーティーですよ！」

後ろから突然叫ばれて、一瞬心臓が飛び跳ねる。

「エレンかよオ。で？ コレお前が貼つたの？」

「そうです。やっぱりもう1人くらいいたほうが楽しいじゃないですか」

「やっぱり仲良しクラブじゃねエか……」

呆れたように呟く。

「違いますって！ それで、トーヤさん、うちに入りませんか？」

「……話聞いただけ聞いてやるよ。後でまたギルド来るからその時に話してくれ」

「はい！ ちゃんと来て下さいね！」

出口に向かって歩く刀哉にエレンが叫ぶ。刀哉はひらひら手を振って返した。

「さて……そろそろ昼だから戻るかなア」

国王との食事もあるし、と思い、城に戻る。

街は食事を求める人間で溢れていて歩きにくかった。

「は、どうぞお通りください」

兵士に例のプレートを見せて、城の中に入る。しかし、やっぱりというか場所が分からず近くを通りかかったラディーナに案内してもらった。

「ふっ、この城は使えている人間しか理解することが出来ない。

トーヤのような外部からの人間が一日で覚えようと言う方が無理なんだよ」

「どことなくバカにしてねエか？」

「してないが？ ……お、ここだ。失礼します！ 近衛騎士ラデー

イーナ・ニコラス、トーヤ・サナダ様を案内して参りました！」

「いちおー様付けなんだな」

「……一応、だ」

しばらくして扉が開く。

「待っていたぞトーヤ君。ラディーナ君、ご苦労。君も一緒に食事を取るかね？」

「は、私は職務中ですので……」

「国王がいつつってんだ。一緒に食おうぜエ？」

ラディーナは断りを入れようとするが刀戟によって阻まれ、そして強制的に席に着かされてしまう。

「無理やり過ぎるぞ……」

「優しくエスコートしたほうが良かったかア？」

「ば、バカ言つな！……でも、それもいいな……」

一蹴されてしまった。後半に何か言っていたようだが良く聞き取れず、聞き返す前に食事が始まった。

「トーヤさん、昨日はどちらに行ってらしたんですか？ 探したんですよ？」

「それは悪い事したな。ちょっとギルドで仕事しててよオ」

恥ずかしくて逃げ出したとは言えない。そこは人間としての尊厳がかかっている。

他愛もない雑談。

自分の都合で出て行くとは言え、この面子に会えなくなるのは少々寂しかったりする。

(傲慢、だよなア)

あれも欲しい、これも欲しいとねだる子供のよう。

何かを手に入れる為には何かを諦めなければならない。当たり前のこと。

「ところでトーヤ君はーっ!? 何事だ!」

「っ!?!」

内。
どん、と爆発音。次いで揺れる城。ーそして慌ただしくなる城

「ば、化け物……」

「馬鹿な……あいつは……滅んだ筈だ……」

兵士がパニックに陥る。

「ほ、報告します! アレがー^{ヴァナルガンド}破滅が現れました! 翼を城に掠めて、現在街の西部、入り口付近に降り立ちました!」

化け物。

滅んだ存在。

^{ヴァナルガンド}破滅と呼ばれるモノ。

それが何か見極めるために、刀戟は走り出していた。
きっと自分とは無関係じゃない。

――そんな気がしたから。

また一つ、歯車が動き出す――

第二章 【都の戦火】 十二（後書き）

よしゃ、なんとか更新。

やっと本題の冒頭にありついた。

こっからですね。がんばります。

お気に入り登録80件越えありがとうございます。

活動報告もわりと更新してますので覗いてやってください。

では、評価、感想、指摘等お待ちしております。

第二章 【都の戦火】 十三

「エレン！ ニキ！ 何やってんだテメエら！」

黒く、鯨を連想させるような巨体。空から現れたそれ
元をエレンとニキが刻んでいた。

ヴァナルガンダ
破滅の足

大きな翼と二本の足。そう、まさにそれは化け物だった。

そんな化け物の足をちまちまと刻んでいたところで敵うはずもない。

「どけ！ ちつと下がってやがれエ！」

「は、はいっ」

刀哉はニキたちに退くよう指示して、楓を引き抜いた。

「一閃」

鞘走りを利用して放たれる高速の一撃。

引き抜く瞬間に構成した魔力を楓に纏わせて、破滅の足元に叩き付ける。

しかし。

（手応えがッ……ねエ！）

刃の止まる感覚。切っ先に目を向けると、それは破滅の鱗に阻まれていた。

「ちつくしょオ……つて、まず」

遙か頭上の頭部。左右で六つの赤い目が並ぶ、その先で紫電が圧縮されていた。

そしてそれは 街に、放たれた。

「あ……」

一瞬にして、街の一部が薙ぎ払われた。

「ッ！！」

聞き取れないほど低音の咆哮。

刀戟は目の前の破滅から意識を外して、街を見る。

黒煙を吐き出す家屋。

死体を抱いて泣く女性。

幾つもの、死体。

（また俺は、守れなかった　！）

なんだ。

何も成長してない。

皆を守れなければ、意味がないのに。

「おいデカブツ……」

楓を右手一本で持ち、残る左手で夜桜を引き抜く。

「許さねエ。何の躊躇いもなく命を奪いやがって」

そして、構える。

「テメエが何者かしらねエ。だが、殺す。好き勝手にはもうさせね
エ」

無意識の内にあふれ出した高密度の魔力が、楓と夜桜に巻き付いていく。

「『協奏曲・鳳仙花』」

足から体幹へ、体幹から頭へ。

いずれも人だったならば細切れになるような斬撃を繰り出しながら上へ上へと登っていく。

「『終曲・鳳仙花・絶』」

魔力で強化された刀と、身体能力。その全てを最大限発揮して、破壊に叩き付ける。

「な……なんだと」

効いていない？

「　　っ！！」

再び、咆哮。

そしてまた破滅は魔力を圧縮していく。

「またあれかつ……あんな高密度に圧縮された魔法……圧縮？」

圧縮された魔法に対抗する魔法は　　圧縮された魔法で。

「チツ……なんで気付かねェんだよ！」

楓と夜桜を鞘に戻し、あふれ出した魔力を急速に圧縮させていく。

「なんだ……？　何に変換すればいい」

向こうの魔法は雷……！　ならこっちも雷でやってやるっじゃねエか。

「テメエが放つ前にこっちからお見舞いしてやんよ！　喰らえデカブツ！」

高密度の圧縮された魔力。刀哉のそれも、街を一つ消し飛ばすくらいの威力は平気で持っている。

だが　それは、破滅にたどり着く前にかき消された。

「何！？　防壁、だと……？」

タイミングをずらしたおかげで、破滅の魔法は放たれることなく、すべての魔力が防壁へと変換された。しかし、あの防壁がある限り、こちらの遠距離魔法は届かない。

遠距離魔法が届かないとすれば、残る手段は一つのみ。

「頼むぜ、楓、夜桜。あのデカブツ、叩き斬るぜ」

すらり、と二振りの刀を引き抜く。

「ありったけの魔力をすべて圧縮してこいつらに込める……あのおっさんの腕は確かはずだ。本気で圧縮してももつはず……行くぜ」

再び破滅は魔力を攻性の魔法へと変換し始める。

間に合うか？

「『協奏曲・鳳仙花』」

最初にやったのと同じように、刻みつつ上へと上がっていく。破滅が魔力を圧縮し終わる……！

「これで最後だデカブツ！『協奏曲・鳳仙花・絶』」

二刀にすべてを込めて、破滅に叩き付ける。

その斬撃は、空気を揺らした。

「
ッッー！」

悲鳴。そうともとれるだろうか。

今までの咆哮と比べれば、悲鳴にも聞こえる。

「やったか……？ いや、まだッ……」

まだ生きている。

だが、破滅は、空高く舞い上がり、そのまま姿を消した。

「くそツ……逃げやがった……！」

辺りを見回す。焼け焦げた民家や、泣き叫ぶ子供。あの騒がしかった街の喧騒は今や悲鳴と嗚咽に支配されている。

「くそツ……また、救えなかったのかよ！」

刀哉は地面に拳を叩き付けた。

己の力のなさを。守れなかったことを悔いて。

そうして、また齒車は廻る。

第二章 【都の戦火】 十四

「危険、だな……」

一人、王が呟いた。

破滅を退けるほどの大きな力。あの大きな力がこの国に向けられたら。世界に向けられたら。

……どんなことになるか容易に想像がつく。

「何とかしてあの力を味方につけられないものか……いや、そうではなくても、矛先がこの国に向かないようにできれば……」

どうにかして刀戟を味方に引き入れたい。

そうすればこの国はもっと安全に発展していくことができる。

「王、トーヤ様が戻られました」

「通せ」

「は。……ですが、何か落ち込んでいられる様子。どうなさいませよ」

「……落ち込んでいる？」

「は。おそらくトーヤ様は守るべき人が死ぬところを始めて見られたようです。その精神的ショックによるものかと……」

好都合、かも知れないな。

落ち込んでいるという心の隙間に付け入って、この国にとどまらせることができれば、破滅の脅威からも、敵国からの行進も防げるか

もしれない。

「わかった。ここに通してくれ」

「は」

兵士が去っていくのを見送った王は、どかりと椅子に腰を下ろした。

「さて、どう言ってくるめるかの」

「トーヤ様、こちらへどうぞ」

「あア……」

まだ、頭の中でぐるぐる回っている光景。

あの化け物の炎に焼かれる街の罪もない人々。

一度敵と定めた人間ならば、焼かれようが切り刻まれようが構わない。

だが。今回は違う。

あの街で生きている人たちの笑顔が、一瞬で恐怖に変わり、焼かれ、死んでいった。

破滅から、守らなければならなかったのに。

破滅は逃げた。だが、その爪痕はまだ残っている。周りにいる兵たちは、俺のことを勇者だとか、奇跡の人だとかいうが、そんなんじゃない。

守ることのできない、ただの弱者だ。

「どうぞ、王がお待ちです」

「……」

ゆっくりと扉が開く。

王は椅子に座ってこちらを見据えていた。

「このたびは本当に申し訳なかった。そして……ありがとう。君のおかげで、街の被害は小さく、多くの民が助かった」

「俺は……助けられなかったんだ。世辞なんかいいからよ。罵倒してくれていいんだぜ」

「そうは行かない。君はあの破滅を退けた。ひとたび現れれば国を三つ滅ぼすと言われるあの破滅を。それを退けた君を、どうして罵倒できよう?」

「確かに退けたかもしれねエ。だが、人が一人でも死んだらよ……守ったことにはならなねんだよ」

「……そうか。だがね。街の民はそうは思っていないようだよ」

「何?」

「見てみるといい」

王は窓を指差して笑った。
その窓に近寄って、外を見てみる。

「なッ……」

そこにあつたのは、城を取り囲む人、人、人。
その顔には笑顔が浮かび、口々に刀哉の名を叫んでいた。

「どうだね。これこそ、君の守ったものだよ」

「なァ……」

「何だね」

「……俺ァ、間違つてなかったのか？ 守れてたのか？」

「……ああ。もちろんだ。それとも、民に聞いてみるかい？」

窓を顎で指し、微笑む。

「いいや……そんなことしなくても、もうわかつてる」

「そうか。なら、よかった……君の、守った街だ。もしよかったら、もう少しこの街に……」

「悪い。それはできねェ。やらなくちゃならねェことがあるからよ」
「……そうか。残念だ」

「けど、あんたらに危険が迫ったら、助けに行くよ。世話になったからな」

そういって、微笑んだ。

「さあつて……出てきたはいいがよオ」

ギルドの掲示板を見る。

「まるつきり以来がねエじゃねえか」

先の一件のせい、依頼がまるでない。

ルノーに行きたいのに、そっち方面の依頼もない。

つまり、陸路で行くしかないのか。

「トーヤさん」

「ああ？　なんだエレンか。ニキも。わりイな。今忙しいんだ。後にしてくれ」

「えー！　話聞いてくれるって言ってたじゃないですか！」

「あー、わかったわかったよ。ツたく。で、なんだア？」

近くにあったテーブルに腰かけてエレンの話聞く。

「私たち、これからルノーに向かう予定なんですよね！　で、ですね！　もしよかったらトーヤさんも一緒にどうかなーって！」

「……金にならねエ」
「そんなご無体な〜！」

立ち去ろうとした瞬間エレンが足にしがみついてくる。
こいつはホントに人間か……？

「実はか弱い乙女がもう一人増えたんですよ！ ニキちゃんも強いですけど、女三人は心細いんですよ！」
「むしろ俺が危ない人間だとは思わねエのかよ？」
「だってトーヤさん優しいじゃないですか！」

満面の笑みを放つエレン。

コイツ……実はバカなのか？ いや、バカだったなア……

「ツチ。わかったよ。どうせ俺もルノーに行く予定だったしなア」
「ありがとうございます！」
「すみませんトーヤ殿……またご迷惑をおかけします……」
「大丈夫だア。迷惑被った分は全部コイツに請求すつからよア」

親指で隣にいるエレンを指す。

厄介の原因はすべてコイツなのだから。

「で、そのか弱い乙女ってのは？」

「あ、もうすぐ来られますよ」

エレンが言った丁度その時、ギルドの扉が開き女性……というよりは女の子が入ってきた。

「げ、エセ修道女……マジかよ」

「あ、イルフちゃん!」

「エレンさん……あれ、この方は?」

青い髪、青い瞳の修道女。

街で異世界がなんとかとか言ってた奴だ。

……厄介事の匂いがしやがる……!

「一緒についてきてくれることになったトーヤさんだよ! ツとつても! 強いんだから!」

「そうなんですか? ニキさん」

「ああ。トーヤ殿はお強い。私では、いや、この世界に住むものは到底かなわぬ」

「それほどお強いのですね……とや、様?」

「誰がとやだア? 真田刀哉だ。ルノーまでの間、一緒させてもらう」

本音を言えば、この修道女からは早く離れたい。
嫌な予感しかない。

「私は、イルフ・ソラシスと申します。何卒よろしくお願します」

「で、だ」

「なんでしよう?」

「俺の馬がそこにつながれているのはいいとしよう……だがな、
…この馬車はなんだア?」

移動手段としては間違っていない。

なんせ国境を越えなければならぬのだから。徒歩ではいっただいど
れほどかかるか分かったものではない。

そう、間違っていない。……ただ一点を除けば。

「なんで、この馬車にはこんな煌びやかな装飾が付いてんだア!?

ピクニックじゃねエんだぞ!？」

「可愛くないですか?」

「そついう問題じゃねエ!」

「こねじゃあ狙ってくださいと言ってるようなもんじゃねエか……」

「ほら……さつそくお出ましじゃねエか」

ほぼ真つ直ぐ続いていた道の両脇、その茂みから、小汚い男が何人も。

「……どうすんだア? 殺していいのか?」

「私としては殺しても問題ないかと……」

「だめだよニキちゃん! かわいそうだよ!」

……訂正。こいつは大馬鹿だったようだ。

「できれば命は殺めぬ方がよろしいかと存じ上げます……」

「ツチ……わかったよ。追ひ払えばいいんだろオ? 馬車止める」

徐々にスピードが落ちて、馬車がゆっくる止まる。

男たちはその間に追いついて、馬車を取り囲んでいた。

「十人、ねエ。テメエら、帰れ」

「金目のものは全て置いていけ」

「……オイオイ、最初つから交渉列缺かよオ。あーあーあーあー! 修道女には殺すなって言われてるしよオ! なア、どつすりゃいいんだ?」

「なア」の時点で既に楓と夜桜を引き抜いている。

「《協奏曲・鳳仙花》」

ぱん、という音と共に、男たちの服が弾け飛ぶ。

男の裸など見ても面白くないので、上着だけにした。

「次は皮膚がいいかア？ 肉か？ 臓物かア!？」

「ひっ……う、うわあああああああああああああ」

一瞬男たちは戸惑ったような反応をしていたが、一瞬遅れて散り散りに逃げて行った。

「これで満足かア？ イルフさんよ」

「トーヤ様は、本当にお強いのですね……私、びっくりしてしまいました」

その微笑みの下になアに隠してんだか……

「……先、急ぐぞオ」

面倒な旅になりそうだ。

いや……なんか、厄介な事が起こりそうなのかな……
どうすっかなア。

第三章 【業喚ぶ声】 一（後書き）

少々短くなってしまいましたかね……

「で、さア。オマエら、ルノーに何しに行くんだア？」

あれから数時間。何事もなく馬車は進んでいた。

「私とニキちゃんはワコウに行くんですよー。ワコウ行きの船はルノーからしか出ていませんからね。唯一ワコウと貿易している国がルノーなんです」

そういえば、確かにジュレルには貿易船がなかった。漁業は盛んだったようだが、港は一つ。それも漁業のみの港だったな。コストの問題かア？

「私は、ルノーで巡教がありますので。救いを求める人々に、神の教えを説いてから次の国に向かおうと思います」

「へエ……この世界にも神様なんてモンがあつたのかア」

まアそうだろうな。

俺の世界じゃ神様なんてモンは人間が作り出した幻想だ。どれだけ祈っても救われねエし、どれだけ冒流しても神様からは裁きがねエからな。

「この世界……ですか？」

「あ？ いや、なんでもねエ。でもよ、アレだなア。アンタホントに修道女なんだなア」

まさかとは思っていたが、ほんとにそうだとは思っていなかった。てつきりそういう服なんだとばかり刀哉は思っていた。

「俺ア神様のこととかよくわかんねエから信じてねエけど、どんな神様なんだア？」

「それでは、説明させていただきますね」

イルフはゆっくりと、堅苦しくなく、子供に絵本を読み聞かせるように話し始めた。

昔、その昔。

大きな、大きな都市がありました。

世界の人々はそこで暮らし、何不自由なく生きていました。

あるとき、黒く、大きな怪物が街を襲いました。

力を持たない人々は、ただ一方的に襲われるだけで何もできません。襲ってくる国などなかったため、国を守る力もありませんでした。

その時、国の魔術師たちは考えました。

『大きな力には大きな力で。あの怪物に対抗しうるもの呼び寄せよう』

魔術師たちは急いで準備を始めました。

そうしているうちに国は滅んでいきます。

そして召喚術式が完成し、力あるものを呼び寄せました。

とても眩い光と共に、一人の男性がその場に現れたのです。

見たこともない服を着ていて、見たことのない髪と眼の色。

髪は白銀に輝き、瞳は真紅に染まっています。

魔術師たちは状況を説明しました。

男はそれに一つうなずき、怪物に向かっていきます。

男が何をしたのか。

魔術師たちはわかりませんでした。

なぜなら、男は怪物を一撃で倒してしまったからです。

そうして脅威は去って、国の人々が男に礼をしようとしたとき、男の体は砂のように溶けて、空に舞っていきました。

人々は、それからというもの、男を崇め、神とし、暮らしていきま
した。

「……というお話です」

「なんか、神話にしちゃアファンタジー性が足りねエな」

「神話じゃありませんよ！ これは史実に基づく伝説なんです！
ね！ イルフちゃん！」

エレンがいきなり出てきてちょっと焦った。

こいつはすぐに首を突っ込んでくんないア……

「はい。伝説というよりは、実際にあったことのようにです。記録も
しっかりと残っていますので」

「へエ……てことは、怪物つーのは破滅ファンタルガン下の事か」

「おそらく……というよりは、そうなのだろうな。歴史を調べてみ
たこともあるが、破滅は幾度となく現れているが、その神様が現れ
たのは一度のみ。他は去れるがままか、何とか追い払ったという話

だ

召喚……ね。

まるで、俺みたいじゃアねエか。

「ところで、その神様の名前とかってねエのか？」

「残念ながら、名乗った記述はありません……」

名前も名乗らねエ。それで怪物を一撃。

白銀の髪に真紅の瞳ねエ……

「うまく出来過ぎてんなア」

「え？」

「いや、なんでもねエよ。……それより、地図みりゃこの先に村があるみてエだけだよ。どうする？ 泊まってくか？ それともまだ走るのかア？」

大きくはないが、それなりの村がある。
村というより町だ。

「もちろん泊まっていきましょう！」

「他は？」

「異議なし」

「そうしましょうか」

全員一致、ということ次で次の村で止まることになった。

「……ここ、みてエだな。馬車預けてくつから、門番に話し通しておいてくれよ」

「わかりました！ ささ、いきましょ！」

「はええよ……ほんとに分かってんのかア？」

エレンを見て、少し……というか、とても心配になった。

でもまあ、ニキがいるから心配はないはずだ。ニキはしっかり者のはず、だから。

刃哉は馬車が停まっているところを探して、門の周りを歩く。

……が、なかなか見つからない。

「あつれエ？ 普通この辺にあんだろうがよ……なんでねエんだ？」

……ん？」

ざわめきが聞こえる。

これは、人の声じゃない。森か？ ……いや、違う。

森でもない。これは 精霊の声だ。

「なんかあるつてのかア？ 教えるよ」

……来るよ

……災厄が来るよ

……白き者の対、黒き者

……白く輝く貴方の鏡

……黒く淀む彼の者が

「黒き者だア？ は、来いよ。返り討ちにしてやるぜエ？」

馬車を近くにあつた木に繋ぎ止めて、楓に手を掛ける。

確かに、来てんなア。

殺気が飛んでくる。

間違いなく俺をとらえてやがる。調子乗りやがって。

「……オマエか。白き者、って」

「そういうテメエはナニモンですかア？ 殺気なんて調子くれたもん飛ばしやがってよオ？」

ローブを身に纏つた長身の男。

漆黒の髪に蒼い瞳。

ホント真逆じゃねエか。

「いきなりか。まあいいや。潰せばいいんだよな」

「は。テメエごときに俺を潰せる訳ねエだろうが。返り討ちだボケエ」

「……御託はいい。かかつてこいよ」

そう言つてローブの男は中指を立てた。

「……オーケー。テメエは殺す！」

第三章 【業喚ぶ声】 二（後書き）

というわけで二日連続。

第三章 【業喚ぶ声】 三（前書き）

間違えて第二章十三話だった所を消してしまいました…
書いてまた投稿します。

「オラァッ！」

楓を抜き放ち、首を狙う。

黒き者と呼ばれた男は、手を翳しただけでそれを防いだ。

「防壁かア？ 厄介だなテメエ」

「俺はサイファア！。お前、弱いな」

「ンだとコラァ！」

楓を右手に持ち、空いた左手で夜桜を抜く。

「協奏曲・鳳仙花ァッ！」

無数の斬撃がサイファアを刻む。

そのはずが、全て防壁に阻まれた。

「もっと。本気出せよ」

「ざけんなッ！」

一度距離を取る。

「纏え。テメエ等の獲物はあの雑魚だア。切り裂いて終わりにすん

ぞ！」

どろりと滲み出た魔力が刀にまとわり付き、薄く刃となった。

「協奏曲・千本櫻」

遠距離からの斬撃。

地を這ってターゲットの足元に到達した瞬間、それは立ち上がる。うねり、捻れ、圧力と斬撃でターゲットを切り裂く斬撃。

「煩わしい」

軽く、サイファーは手を振った。

たったそれだけ。

だが、それだけで千本櫻は容易く消えた。

「嘘……だろオ」

「弱すぎ。次会う時までには強くなりなよ。……』ワールドエンド』

」

黒い、魔力！

「クソッ！」

斬っても消えない。

どんだんまとわり付いてきやがるッ！

黒い魔力は球形になり、刀戟を包む。

「ガッ……アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「待ってるよ。最果てで」

体が、痛い。
冷えていく。

……ああ。

このまま、死ぬのか。

どうせ一度失った命だしな。

……いや。

嫌だ。

まだ、自分が何者か知らない。

……約束も、果たしてない。

でも、……どうする？

「ぐっ……あ？ ここ、どこだ？」
「宿だ」

声のする方へ目を向けてみれば、椅子にもたれかかったニキがいた。

「俺ア……」

「外れの森で倒れていたんだ。なかなか戻ってこないから探しに行つて、見付けたのは血だらけのトーヤ殿。さすがの私も焦った」

「他の二人は？」

この部屋にはニキしかいない。

「二人とも、夜明けまでトーヤ殿を看病していて、今は眠ってしまっている。……トーヤ殿、何があったか、話してもらえるな？」

「……あア。もう、隠せねエな。二人が来てから始めよう」

しばらくして、エレンとイルフが起きてきた。これで、全員。

「そんじゃ、俺のことから話すかア」

あぐらをかいて、刀哉は話はじめた。

「まず、俺はこの世界の人間じゃねエ」
「「「え」」」

始めっから衝撃。

三人は目を見開いたまま固まっている。

「この世界とは別の世界、その小さな国、日本から来た。屋上から落ちて、死んだ……筈だった。だが、気付いたらこの世界にいた」
「だって、そんな……」

「事実だ。信じられねエならこれを見る」

刀哉は今まで目に付けていたカラーコンタクトを外した。
白銀の髪、そして、紅い瞳が顕になる。

「魔力を持ち、異能を持つ異世界の住人……なんかの話と、似てねエか？」

「神話……!」

イルフが話した神話と、類似する所がありすぎる。
最早、疑いようもない。

「誰が俺を召喚したのかはわからねエ。だが、俺は世界に害になる存在……ヴァナルガンド破滅を倒さなきゃならねエみたいだ。それに……まだある」

昨日あったことを思い出し、刀哉は苦々しい顔になった。

「俺と対になる存在、黒き者……サイファーとか言ったなア。アイツは……強い」「それは……トーヤ殿でもかなわぬ程に、か？」
「俺の有様を見ただろオが」

今のままでは勝てない……。

「それでは、世界はどうなってしまうのでしょうか……」

「俺が勝てなきゃ、滅びるなァ」

世界を救うため、は言い過ぎかもしれないが、それでも破滅と黒き者を倒さなければ間違いなく滅びる。

「……ン？　そう言えば……」

『君はいずれ、世界を滅ぼせるだけの力を手に入れるだろう』

「いずれ、か……」

あの時の言葉が蘇る。

いずれ、ということとは、今は無いということ。

力を見いだすためには……早く、シンに行かなければ。

「ククク……潰す」

「と、トーヤさん？」

怪しい笑みを浮かべた刀哉に慌てるエレン。刀哉の笑みはそれほど黒かった。

「よし、行くぞ」

「はえ？ どこにです？」

突然立ち上がって荷物をまとめ始める刀哉。

「ワコウに行くんだろオ？」

「いや、それはそうなのだが……その傷で無理に動いては！」

ニキも心配して制止するが、聞こえてないかのように準備を進める。

「俺ア、奴に借りを返さねエとな」

黒い笑みは暫く消えることはなかったという。

第三章 【業喚ぶ声】 四

「でエ？ ルノーに着いた訳だがよオ……俺アこのままワコウに向かう。お前らどうすんだよ？」

大陸の東、ルノー。

港もある事から活気がある。

「私とニキちゃんはワコウに行くのでトーヤさんと一緒ですね！でも……イルフちゃんとはお別れですかね……」

「いえ、トーヤさんさえ宜しければ、私はトーヤさんと行動を共にしたいと思っております。……宜しいでしょうか……？」

……こういつ時の嫌な予感によく当たるものだ、と刀哉は内心溜め息をつく。

「……勝手にしやがれ」

イルフは何を言っても曲がらなさそうな眼をしてる。

ここで問答するだけ時間の無駄。諦めて好きなようにさせておくのが得策……のはず。

「じゃア……話はまとまったなア。船乗ンぞ」

「はいー」

ここからワコウへ……そして、目標のシンへ。

あの野郎を倒すために、自分の正体を知る為に……シンへ行かなくては。

波が荒い。

しかし、船は日本にいた頃に乗った事もある。船酔いもしたことが無い。このまま問題無くワコウに着けばいいんだが……

「それより……何故だア？ 太古に破滅（ウゝアナルガンド）を滅ぼした英雄とやらは……俺の容姿に似ていた。だが、紅い瞳は魔族として嫌われモン。それに、シルフィは……俺を見てその英雄を連想しなかったのかア？」

何か、隠してやがるな……

「まア、シンに行けば解る筈だア……この紅い瞳の事も、俺の事も、なア」

飛沫が甲板に散っては流れ落ちてゆく。
ふと、遠景を見れば小さく島が見えた。

「トーヤさん！ ワコウが見えましたよ！」

「なんだ、エレンかよ。今見た。もうじきか……シンまでの船が出てりやアいいんだがなア」

「大丈夫だ、トーヤ殿。私の記憶が正しければシン行きの船はある。ちようどシンまでの海が凪ぐのもこの時期のはずゆえ」

ニキの言葉に自身にツキが来ている、と思う。

「ラッキー ハードラック 幸運か悪運か……どちらにせよ、シンには行くんだ。 ラッキー 幸運って事にしよう。そついやア……イルフはどうしたア？」

「イルフちゃんは船酔いか酷くて船室で寝てますよー」

「トーヤ殿も戻って休んでは？」

「いいや……お前らは戻ってなア……来る、からよオ」

刀哉が言葉を終えた次に、地鳴りのような音が辺りに響く。
船が進む音も、相当大きいというのにそれを越える音。

……海中に、何かがあるな。

「助けは必要か？」

「いらねエよ……ニキ、エレン、お前らは船室に戻ってなア……片付けたら行く」

「わ、わかりました！ 気を付けてくださいね！」

ニキとエレンが甲板から去るのを確認すると、海に向けて叫ぶ。

「さア……かかってこいよオ！」

ドン、という音と共に現れる巨大な魚のような怪物。

「とりあえず三枚でいいかア？」

キン、と音を立てて夜桜を抜く。

この程度に楓は必要無いし……魔力を操るにはこっちの方が都合がいい。

「ガガガギガアッ！」

「まあ待てよ……力、借りるぜエ、精霊さんよ」

あの夜から、必要な事を考えていた。

自分より遥かに協力的な力を行使用するサイファー……その差を。

「『踊れ・雷電』」

言葉と共に滲み出て夜桜にまわりついた魔力が雷へと変化した。

「荒いんだ、俺ア……」

「ガガガギガアアアアアアッ！」

「これで暫く黙っておきやがれ……『天雷』！」

振りかぶり、上段から何もない所へ振り下ろす。

しかし——怪物の直上から雷は落ちて、怪物を焼いた。

「ガッ……」

感電したのか、動きが止まる。

「暫くそうしてなア……コレにはまだ時間が掛かるからよオ……」

刀哉は、再び魔力を夜桜へ纏わせる。

しかし……先程の量の比ではない。

「俺が瞬間的に纏わせる事ができるのはごく薄々の魔力だ……ス力ス力だよ。まア、魔物程度には十分だがなア」

まだ、まだ、魔力は広がり続ける。

「そこで思い付いたのが、コレだア……大量の魔力を、圧縮する」

夜桜にまとわりついた魔力が、収縮を始める。同時に、薄いグレーだった魔力は徐々に黒くなっていく。

「全てを凝縮したー黒。光さえ飲み込む漆黒の魔力だア」

最早刀身と同化しそうな迄に圧縮された魔力。その色はー深淵を彷彿させる漆黒。

「ガガガガアアアアアッ」

怪物が感電から立ち直ったのか、再び船体に向かってくる。

「コレをよオ……斬撃に乗せて飛ばすんだ。面白エだろ？ なんかの漫画にあつた気がすつけどなア」

「ゴガアアアアアアア！」

魚の割りには凶悪な顎を向けて、刀哉に迫る。

「悪いな……二枚で勘弁しとけ。『閃花・翔』」

瞬く間。

辺りには、再び船の移動音しか響かなくなった。

「まア、多分食えねエだろオ。海の幸、ってかア」

刀哉は、船室に戻る。

「まだまだ、だなア……」

第三章 【業喚ぶ声】 五（前書き）

今回も少々短め。

クオリティが低く申し訳ありません。

あ、あとツイッターやってます。更新報告も随時そちらでやってます。

よろしければフォローお願いします。

@strobe666

「あー…あ。こんな程度じゃ勝てねえな」

思い返すのは、サイファアの圧倒的な魔力。あれほどの密度を瞬時に造り出す彼の技量は、計り知れない。

今刀哉が同じ密度で魔力を作り出そうとすれば、5分はかかる。この5分、短いようで、とても長い。こと戦闘に於いては、コンマ一秒が生死を分ける。

それでも、刀哉は馬鹿ではない。「負けた」という事実には衝撃を受けながらも素直に受け止め、次に勝つ為にはどうすればいいかーそれを考えている。

「俺を殺さなかった事……絶対後悔させてやる。次は俺が叩きのめす番だぜえ」

事実、この数日程で刀哉の魔力の使い方は変わった。以前は圧倒的な魔力量にものを言わせて強制的に精霊を使役していたが、それは本来の10分の1すら威力は無い。

それを丁寧な魔力を練り上げ、精霊の力を借りて属性を付与する。これでやっと本来の半分程度の力が出せるのだ。

実際のところ、目で見える程の魔力というのはそれだけで密度の高い魔力を指すのだが、通常の魔術師は少ない魔力でも正式な手順を踏むことによって、魔力以上の威力が出せる。

「つまり知識の無さが災いしたーそういう事だなア。オーライ、それは理解してる。アイツは……サイファアは圧倒的な魔力にあわ

せて正式な手順を踏んでるからこそあの威力が出せるんだよなア」

それも、並の速度ではない。

本来魔術師というのは後衛で、詠唱や陣を構成する時間を前衛に任せるものだ。

元々魔力加工の施されている武器等は魔力を込めるだけで発動するのだが、それも属性を付与する程度。

「まア、やってみなきゃ解らねエな」

もし自分があのだの伝説の英雄とやらと同じなら……そう、破滅 ウ、
アナルガンド など瞬く間に消し飛ばせる程の力があると言っ事になる。

しかしまだあの化け物を撤退させる程度の力しか無い。まだ、何かがある。

「何にしても、シンかア？」

目標には確実に向かっている。何も問題はない。

「トーヤさん！ ワコウの港に着きましたよ！」

「あア？ 早かったなア……じゃ、降りるぞ」

先頭を切って刀哉が降りていく。それに続いてエレン、ニキ、イルフが降りる。

ワコウの港は活気溢れていた。

主に漁業が盛んで、日本を思い起こさせる様な服に身を包んだ住人

が行き交っている。
ほぼ江戸みみたいな文化体系のようだ。

「私は一度祖父の所まで戻るのだが…皆はどうする？」

ワコウはニキの故郷。祖父に会うために戻ってきたようなものかもしれない。エレンはただの興味本位かもしれないが。

「俺ア……そのジーサンに興味あるなア。悪イが邪魔してもいいかよ？」

「トーヤ殿が祖父に？ 私は構わないが……皆はどうする？」

「私は久しぶりにお祖父さんに挨拶しよっかな！」

「私は……トーヤ様についていきますので」

全員一致でニキの家に向かう事になった。

エレンやイルフの用向きは挨拶やらなんやらだろう。さして興味が湧かない。が、刀哉には目的があった。

「刀を、打ってもらおう。」

せつかく打ち直して魔力加工を施した楓だったが、サイファーとの戦闘でボロボロになってしまった。

もう刀哉の一振りに耐えられる程の強度は無い。並の敵なら夜桜一本で十分なのだが、もし今の状態でサイファーが現れたら――

次は、死ぬ。

ならば、より強力な刀を。

最早楓は捨てるしか無い。強い武器が、欲しい。

ニキの祖父ならば、応えてくれるのではないか。そんな期待をしましょう。

偶然とはいえ楓を手にとって戦った刀哉。

それを鍛えた刀匠、ヒザキ。

ニキに出会ったのは偶然であろうが、必然でもある……そんな気がする。

「それでは我が家に向かうことにしよう」

「ここだ」

ニキが指差した家は、日本の伝統建築によく似ていた。そう、あの茅葺の家だ。

もしかしたらここに工場も内蔵されているのかもしれない。後ろの方に煙突が見えた。

「ニキ、さっそくで悪いんだがよオ。爺さんに合わせちゃくれねえか？」

「トーヤ殿？ 祖父に用向きがあったのか？」

「ああ。刀を打って貰いてエ」

「しかし……祖父は刀匠をもう引退している。それにとっても頑固で……なかなか気に入った人物以外には刀を打とうとしないんだ。技

術は今も一流だと思っただが」

技術は一流。そう聞いたらますます打ってもらいたくなった。

「なんとか説得できねエか？」

「それは……」

「ニキ、帰ってたのか」

後ろから声をかけられて思わず驚いてしまうニキ。

そこに立っていたのはニキと同じ黒い髪に黒い瞳。しかしその顔には老獪さが滲み出ている。

これが刀匠ヒザキ、か。

「爺様！」

「そちらの方々は？」

「おじーさん！ エレンです！ お久しぶりです！」

最初に声を放ったのはエレンだった。

顔見知りのようなので最初に挨拶するのは当然と言えば当然か。

「イルフ・ソラシスと申します。各地を回って巡教をしております。以後お見知りおきを」

コイツはただ自分についてきただけなのだが……

「真田刀哉。アンタに頼みがあつて来た」

「ふん……礼儀を知らん小僧だな。まあ、聞くだけ聞いてやる」

噂、というかニキの話に違わぬ頑固さのようだ。大人の対応とかはできないのだろうか。

「アンタにこの刀を超える刀を打って貰いてエ」

楓をヒザキ老人に差し出しながら言い放つ。

「これは……儂の楓だな。三本ある最高傑作の内の一本だ。そして何より、これが最後の作品。これを超える刀を作れ、か。ちよいと見せてもらおうか」

ヒザキ老人は刀身を抜き放つ。

あらわになつたその刀身は、普通に使用していれば成り得ない傷つき方をしていた。

楓の芯の部分にはひびが入り、形状を保っているのがやっと。刃こぼれなど問題ではないくらいに刃の部分は摩耗し、ところどころ溶けてしまっていた。もうまともに何かを斬れるような状態ではない。

「酷いな。どう使えばこんな風になるんだ。テメエは刀をなんだと思つてやがる。ただ殺すだけの道具じゃねんだぞ。コイツは刀匠が魂を込めて作つて、使い手が魂を預けて戦う、相棒みたいなもんだ。それを……」

「馬鹿野郎……こつちだつてコイツを傷付けたくて戦つてるわけじゃねえんだ！ 付き合いは短いけどよオ……自分の一部みたいなもんなんだ。皆の心が入つてんだよ。だが、俺の力量不足が楓を死なせちまつた。それは間違いねエ」

ルクの村で守つた人。守れなかつた人。

ヴァナルガンド
破滅を相手取つて、戦つた記憶。

守ることができなかつたアレックス。

戻ると約束したエリー。

この刀を預けてくれたシラフィ。

一緒にセルティを守ったラディ。
ジュレルの国民。

「だけだよ。守るためには、新しい刀が必要なんだ。……頼む。俺に刀を打つてくれねえか」

「……ふん。知ったことでは……なんだ!？」

揺れだす地面。それに伴って鳴り響く地響き。
こういうパターンはもう知り尽くしていた。

「……なんか、きやがったな」

「いったい何が……ワコウでは大型のモンスターなどいないはずなのに!」

「そんなことは二の次だア! 行くぞ」

渡っていた楓を鞘に納め、持って外に飛び出す。

外に出た瞬間、地響きが何者によって引き起こされていたのかすぐに分かった。

「ハッ……こりゃアまた……デカいなア?」

「な……まさかこれは」

ニキの家の近くには岩山がある。高さはそれほどないとはいえ、それが海からの外敵の防壁代わりになっている。港はごく一部ののみ。しかし、その岩山の上に鎮座している大型のモンスター……あれは

「久々つーかよオ。最近小物ばかりですっかり忘れてたんだが……ここってファンタジーだったんだよなア……」

ヴァナルガンド
破滅やサイファーを除けば、魔物の中で一番の脅威。

最強のモンスター

龍種

第三章 【業喚ぶ声】 六（前書き）

今回も戦闘メインで少々短いかと……

「ああ。これがこないだのワイバーンとは別種の奴かア？ またデケエ奴だなアオイ」

岩山の上に鎮座する黒い龍種。

それはさながら伝説に出てくるような龍そのものだ。

恐竜のようなワイバーンとは違う、全く別の進化をたどった龍種。その生態は謎に包まれて知られることはない。

「あれは黒龍……龍種の中でもまた別格の存在。白龍と対をなす龍種の中でも最上位の存在だ。それがなぜこんなところに……龍種は北の島にしか生息していないのではなかったのか」

「ニキ……儂にもようわからんが、世界中で異変が起きていることは間違いないようだ。少し前にも、滅んだはずの破滅が現れたのだらう？^{ヴァナルガンド} そして……そこのおかしな小僧も」

ヒザキ老人は刀哉のほうを見て言った。

「小僧、この世界の生まれではないのか」

「……ああ。違う」

「ならば英雄か」

「それはわからねエ。だが、見た目だけなら……そうかもしれねエな」

そう。

英雄とやらは一撃で破滅を葬り去るほどの力を持っていた。だが、今の自分にその力があるとは思えない。

この世界での自分の存在の意味。何故死んだはずの自分がここにいるのか。

全て疑問だらけだ。

「そうか。今、このワコウの全戦力を集結させたとしても、あの黒龍には到底かなわないであろう。一度あの黒龍が力を放てば、ワコウの島は地図から消え去るだろうなあ」

「ジイさん。まどろっこしいぜ。何が言いたい？」

「今あの黒龍を倒すことが出来るのは、小僧しかおらん、ということだ。ジュレルで破滅を退かせた白銀の髪の少年……それは小僧のことだろう？ 葬り去るほどの力はなくとも、退かせるくらいならできる。ならば、黒龍を倒すのもそう難しいことではなからうに」

確かに、難しくはない。が、それは楓があればの話だ。

夜桜はあくまで楓の補助的な立ち位置の刀だ。もちろん業物であるから、切れ味も申し分ないのだが……使い勝手は格段に落ちる。

そもそも刀哉の使う真田家の技は、大太刀を主として構成されている。それを脇差より少し長いだけの夜桜で技を使えばどうなるか……本来の威力など出せはしない。

もちろん楓で技を使っているときも身体と楓に魔力強化を施しているため、ただ刀単体で使う際の数十倍の威力が出る。普通に使っていたら破滅など退かせることはできなかつただらう。

「この夜桜一本でやれって言うのかア？」

「それも使うといい」

そう言っつてヒザキ老人は楓を指す。

楓は持つて後一振り。この老人は、なんと無茶を言うのか。使いだころを間違えれば間違ひなく死んでしまふ。あの黒龍がどれほどの強さかはわからないが、この世界のモンスターに立つ存在だ。以前戦つたワイバーンとは別格の強さだろつ。

「ジイさんよオ……死ね、つていつてんのか」

「放つておけば皆死ぬ。それに、僕は見極めたい。小僧に僕の刀を持つだけの資格があるのか。僕がもう一度鍛冶をするだけの価値があるのかをな」

こいつ……このワコウの存亡がかかつてるつて時に俺を試してやがる……！

「いいぜエ。やってやるうじゃねエか」

「さて、トーヤ殿！ いくらなんでも黒龍相手では！」

「ニキ……前に言つたつけかア？ その人間の強さがギルドランクで決まるわけじゃねエつてよ。見てやがれ。ジイさん、ビビりすぎで心臓止めんじゃねエぞ？」

「ふん、結果出してから言わんか、小僧」

一度、楓を鞘から抜き放つ。

あの美しかった緩やかな乱れ刃の波紋はもう見る影もなく、刀としてはもう使い物にならないのは見てわかる。

「悪いな……うまく使つてやれなくてよオ。悪いが、最後の仕事、頼むぜエ。お前の親父にいいとこ見せてやんな」

楓を鞘にしまい、夜桜とともに腰のホルスターに納める。

「じゃア……行くか」

とはいえ、あの岩山を登るのは骨が折れる。もし登れたとしても、体力が尽きたところをやられるに違いない。となれば……

「こつちに呼び寄せるのが得策だなア。オイ、ジイさん、このあたりで広いところは？」

「この裏だな。平原になっておるよ」
「よし、決まりだなア」

まずはあの黒龍にこちらの存在を気付かせなければならぬ。刀哉は夜桜を引き抜いて、船の上でやったように魔力をまとわせ始めた。

「まずは一発……あいさつ代わりだア」

見る見るうちに刀身が見えないほどの魔力を纏い、漆黒に染まる。あの船上で見せた魔力の斬撃よりも待機時間が短くなっているようだ。

「これで終わってくれりゃア楽なんだがな……そう上手くはいかねエよつと……」

夜桜に十分な魔力をため込んだのか、次に刀哉は黒龍を見据える。

「喰らいやがれ！」

狙いを定め、斬撃を飛ばす

しかし、黒龍は気付いた。

斬撃が飛んでいくのと同時に黒龍がこちらを向くのが確かに見えた。その一瞬後、閃光に包まれる。

「なんだア!？」

閃光が走ったのも一瞬で、目はすぐに回復した。

黒龍は未だ岩山の上に鎮座し、こちらを見据えている。放った斬撃は消え去っていた。

「マジかよ……あれだけの魔力を掻き消したのかア？」

あの閃光……いったい何の能力かはわからないが、一瞬であの斬撃を消滅させることができるところを見ると、威力はあちらのほうが上……!

「あれはおそらく雷だなあ？ 龍種はそれぞれに属性を持つ。一つだけな。だが、最上位である黒龍と白龍は何故か二種類持っている……まあ、これは言い伝えにしかすぎんがな。真偽はさておき、二種類あるとみて戦ったほうが有利であろう」

「たかが雷ごときにあの量の魔力を消し去られるたア……だが、あつちも俺に気付いたみてエだな」

翼を広げ、黒龍がゆっくりとこちらに向かってくる。

遠距離ではどちらにも分はない。ならばもはや接近戦、それしかない。黒龍もそれは分かっているようだ。

「来るぞオ……俺は平原のほうに行く。テメエらはここに居やがれ」
「トーヤ殿!」

ニキの声も聞かずに平原のほうに走っていく刀哉。

その横顔に笑みはなかった。

その刀哉を見つけたのか、黒龍が追ってくる。

遠巻きでしかその姿を確認できなかったが、近付いてくるにつれてその大きさが分かる。

「オイオイ……デケエじゃねエか。こりゃア骨が折れるな」

そういつつも夜桜を引き抜く。それと同時に刀身に魔力を込め始めた。

「そんじゃ、とりあえずもう一発……っ」と

夜桜も最上の魔力加工が施された逸品だ。メイヤ……どんな刀匠かはわからないが、こちらも相当な腕を持った職人だということが使っているうちにわかってきた。

「こいつならまだ行けんだろオ！」

さっきと同じ要領で夜桜を振るう。

圧縮された魔力の塊は何物でも切り裂く鋭さを帯びて黒龍へと向かっていった。

「ぐっ……」

しかし、また閃光。

視界がクリアになった時には、刀哉が放った斬撃は消え去っていた。

「無駄、ってことかア？　ハハハ！　上等だトカゲ野郎！」

さつきよりも多く。一気に夜桜へと魔力を送り、圧縮し始める。しかし、先程を上回る魔力量を圧縮しようとするれば必然的に時間がかかるのは分かり切っていた。その間、黒龍が何もせずただじっと待っていてくれるか。そんな甘いことはない。

黒龍は巨大な顎の中に魔力を変換した炎を蓄え始めた。

「なるほど……雷と炎つてわけか。厄介だぜエ」

それに、今収縮を始めている夜桜の魔力をあの黒龍にぶつけても大したダメージにはならない。

魔力量的にはほぼ互角。こちらが少しだけ多いくらいか。

今放てば相殺されるか、かすり傷程度のダメージを与えられるか……その程度。

しかし、あの黒龍の熱波をまともにくらっつてしまえばこちらもただでは済まない。夜桜に集中している今、自分の前に防壁を張る余裕など微塵もないのだから。

「今、しかねエってか!？」

まだ完全には圧縮しきれていないが、今放つほかに方法はない。

放った斬撃は黒龍の圧縮していた炎に直撃して、爆発する。

（あれが誘爆を起こしてダメージがプラスされてくれりゃア最高なんだが……）

爆炎で黒龍の上半体が隠れてしまっていて状況は分からない。

「どつだ……？」

爆炎が晴れる。

黒龍は、傷一つ負っていないかった。

「オイオイ……冗談じゃねエぞ……」

まさか。

属性に炎があるから効かないとでもいうつもりだろうか。

「クソ……トンデモファンタジーだなアオイ」

「人間。貴様は何故私に攻撃を加える」

「え、しゃべんのかよ」

一見全く口が動いているようには見えないのだが、普通に人語を解して喋っている。

どこまでも都合主義な世界だ。

「何故？ テメエが人間にとって脅威だからだろうが。モノ考えられるだけの知能があるならそれくらいわかってンだろ」

「確かに、私は人間にとって畏怖される存在であるう。何千年と生き、底のない魔力を持ち、すべてを一薙ぎにできる巨軀を持つ、最強の種族だ」

刀哉は今自分のできる最上の魔力を夜桜に纏わせて、黒龍に斬りかかる。

「だからこそテメエは自分の住処でおとなしくしていりゃアよかつたんだよ！」

しかしその斬撃も甲殻に覆われた腕によって阻まれた。

「だが私も住処を追われた。あの忌むべき存在、ヴァナルガンド破滅によって」

黒龍も瞬時に炎球を構築して反撃する。

しかしそれも刀哉の張った防壁によって消失してしまった。

「だからって人間の住処を荒らすのはよくねエな！ 大人しく帰っちまいな！」

初曲・閃花。風を足場にして舞い上がり、斬撃を放つ。しかし、その悉くは甲殻に阻まれ、傷一つつけることはできない。

「今、世界は混濁期に陥っている。数百年に一度起こる、世界の理ヴァナルガンドの異常だ。それによって生み出された破滅。それを倒すために召喚された勇者」

閃光が奔る。多方向から刀哉へと向かってくる紫電を、球状の防壁ですべて防ぎ切った。

「それが、俺ってかア？ はた迷惑な話だぜ」

一撃にすべてを集中させる『一閃』。その強化された一撃を持って黒龍の甲殻には一筋の傷しか付けることはできない。

「全てはかの国、シンにある。内情や何故理の異変が起きるのか…すべてあの魔族の民が知っている」

「シン……が、元凶だと……？」

「そうだ。それに……今回の異常は今までと少し違う」

この黒龍が言っているのは、あいつ サイファールのことだろうか。確かにサイファールの存在はイルフの語る神話の中には全く出てこない。

「じゃア……てめエは何のためにここに来たんだ？」

「様子見、かな。今回の勇者様のな」

明らかな挑発。

わかってはいるが、もとよりこの黒龍を倒さないことには新しい刀もヒザキ老人に打ってもらえないし、このワコウも危ない。

「一撃で決める。いいな」

「構わん」

刀哉は右手に握っていた夜桜を左手に持ち替えて、空いた右手で楓を引き抜く。

「さあ、見せ場だぜエ」

無形の構え。協奏曲・千本桜を放った時の構えだ。それぞれの刀に魔力を込めて圧縮していく。

黒龍も同じように顎の中で雷を纏った炎球を構成していく。一目見ただけでその魔力量が圧倒的なものと分かるほどに、強大だった。

「コレ、当たったらタダじゃすまねエよな」

「当然。塵も残さぬ」

まだ圧縮。圧縮。圧縮
引き伸ばされた時間、とでもいうのか。合図など決めていない黒龍と刀哉。そのどちらかが放ってもおかしくはない。その時間が刀哉には永遠に感じられた。

「喰らえアツ!!」

先に動いたのは、刀哉。

それにコンマ一秒遅れて黒龍が炎雷を放った。その瞬間、爆炎が周囲数十メートルに渡って展開され、両者の姿は完全に見えなくなつた。

爆炎が晴れて

爆風の後。

強大な龍種の影はなく、代わりに二人地面に横たわっていた。一人はもちろん刀哉。粉々に砕け散った楓の柄を握りしめたまま気を失っていた。もう一人は、といえば。

年は20代半ばといったところか。紫の長髪をした女性が、刀哉と寄り添うようにして倒れている。

「トーヤ殿！ 大丈夫か!？」

ニキやエレン、イルフが刀哉のそばに駆け寄ってくる。

声をかけたり、揺さぶったり試してみるが刀哉は目を覚まさない。

ダメージが大きかったのか、ひとまず起こすことを止めて、ニキの家に運ぶことにした。

残るはあの女性。いったい何者なのか……いや、予想はもう皆の中ですべてしていた。

あれはおそらく先程まで戦っていた黒龍なのだろうと。

人里に姿を現すことの少ない龍種でも、伝説は数多く残っている。

曰く、一定の歳月を超えた龍種は人型に変化することができるのだとか。

「この女性も、ニキちゃんのおうちに運んであげませんか……?」

「いや、しかし……龍種だぞ？ まかり間違つてワコウに甚大な被害が出たら、と思うと……私は賛成しかねる」

ニキから帰ってきた答えは予想できるものだった。

起きた人型の黒龍に敵意がないとは限らない。それに、人にここま

でやられたのだ。恨みを持っていないほうがおかしいというものでろう。

それでもエレンには目の前で傷ついたままの女性をほったらかしにしてどこかへ行くなんてことはできなかった。

「ニキちゃん、お願い……私、ほっとけないよ……」

「エレン……わかった。ただ、この黒龍がおかしな動きや敵意を向けてきた場合は……迷わず私は殺す。それでもいいなら」
「うん、わかった」

話はついた。刀哉と女性を抱えてニキの家に向かう。

二人は、まだ目を覚まさない。

「なかなか、いい戦いだっただな……なあ、ニキ。お前もそう思うだろう?」

「ええ。トーヤどのは、すごいお方なんですよ、お祖父様。今まで見たことがないくらい強いお方なんです」

「ほう……? ニキ、あの小僧に惚れたのか?」

「お、お祖父様!? いきなり何を言うんですか!」

「ありゃ、違ったか?」

おどけたように言ってヒザキ老人は笑う。

「ぐ……あア?」

「ニキちゃん! トーヤさん起きたよ!」

「なんで私!？」

少し顔を赤くしてニキが叫んだ。

「何の話だかわからねエし、ここがどこかわからねエが……とりあえず死んでねエみたいだな。あの黒龍はどうした」

未だ状況が認識できていない刀哉。あたりを見回しながら聞く。

「黒龍さんはですね、たぶんそこにいらっしやる女性ではないかなー……と思うのですよ」

「私もその推測で正しいと思います」

エレンに次いでイルフが答えた。

しかしその答えによって刀哉は余計に混乱する。

「……いや、訳が分からねエんだが……だってそいつ普通に人間じゃねエか。どこに黒龍がいるんだよ」

刀哉の隣ですやすやと寝息を立てている女性が、今まで戦っていた黒龍だとは到底思えない刀哉。

「いやしかしトーヤ殿、爆炎が晴れた後にいたのはトーヤ殿とその女性だけなのだが……黒龍の姿はどこにもなく……」

「つーことはなんだ、つまりあれか、いつも通りのご都合ファンタジーってやつな訳だア。オーライよくわかった。じゃアそいつどこか捨ててこい」

「え、あの、トーヤさん？」

「このまま置いといたらヤバいんだろうが。とりあえずここまでやつたんだ。それとも今やつちまうか？ なアジイさんよ」

刀哉はヒザキ老人に目を向ける。

「いや、いい。ところで小僧、楓の柄はどこへやった？」

「知らねエよ。何分氣イ失ってたんてな」

「お祖父様、楓の柄でしたらこちらに……」

ニキがヒザキ老人に楓の柄を渡す。ヒザキ老人はそれをまじまじと見た。

「なるほど……こりやあずいぶん無茶な使い方をしたもんだ。だがまあ、ここまで使ってもらえてこいつも満足だろうよ。小僧、約束だ。このシガラ：ヒザキ、最後の作に全身全霊を注ぎ込んでやろう」
「へエ……頼むぜ、ジイさん」

残るは、横の女性（黒龍？）だけなのだが。

「む……むむ……はっ！」

「……ホントにこいつ黒龍かア？」

黒龍と思われる女性は突如として飛び起きた。あたりを見回し、顔ぶれを見て、そしてもう一度ベッドに

「待て、寝るんじゃないわねエ」

「ぐわっ……何するんだ」

「こつちのセリフだこの野郎。テメエあの黒龍だろうが。さっきまで気付かなかったが、起きた瞬間にわかったぞコラ」

「うん、まあそれはいいじゃん。疲れたから寝かせてよ」

「とつとどつか行きやがれ」

目を覚ました瞬間にこの女性から放たれた強大な魔力。あの感覚は先の戦闘中に感じたものと同じものだった。

「さっそくひどい。私も疲れたんだから少しくらい休ませてくれたっていいじゃない?」

「わざわざここ滅ぼしに来てるやつをのうのうと休ませるバカがどこにいるってんだ? あア?」

「まあ、白の君とも少し話したかったからいいじゃないの」「話?」

「そうそう。なんなら力が回復次第シンに連れて行ってあげてもいいよ。たしかワコウからシンへ行くルートは船だけだよ。で、その船は一年に一度。来年まで待つつもり?」

そこまでは考えていなかった。まさか一年に一度しか船が出ていないなんて。

「で、話ってエのは?」

「うん、君がこの世界に来た理由」

この世界に来た理由

「しかしまあ、断片的にしかわからないけど。詳しいことはそっちのお嬢ちゃんが知ってるんじゃない?」

そういつて黒龍はイルフを指した。

「と、その前に自己紹介だけしておこっか? 私はね、ソフィア。スリーサイズと年は秘密ね?」

「んなことはどうだっていいんだがよオ。そいつが詳しく知ってるってのはどういうことだ」

「ま、それより先に私が知ってることから話そうか? まず君はこの世界の住人じゃあないってことはもちろんわかっているよね?」

そんなことはこの世界に訪れた数十秒後には気付いていたことだ。

「でエ？ それがどうしたってんだ」

「何故、どうやって呼ばれたのか？ まずその何故、のところかな？ 君は災厄を退けるために呼ばれた。よかつたじゃない？ 正義の味方だね！」

「ワリイがそんなもんには興味がねエな。災厄を退けるだア？ 破滅ワアナのことを言ってるのか？」

先に現れた英雄とやらも破滅を倒してすぐに消え去ってしまったという。

それにとつて考えるならば自分も同じようなもの。この世界の人間にはもちえないほどの力を持ち、この世界に現れた瞬間から奇妙な出来事に巻き込まれている。陳腐な言葉でいうのならば、これが運命という奴か。

「勿論、破滅ヴァナルガンドも含まれるだろうねえ。しかし、君とつての災厄は本当に破滅だけなのか？」

「サイファーも、ってことか」

「さあ？ それこまでは私にはわかんないんだよねえ。何せこの目で見たのは一番最初の英雄だけだったから。しかし、あの英雄も破滅を消し去った後どこに行ったのか、誰も知らないんだってさ。そりゃそうだ。目の前で崩れ去るように消えたんだから」

死んだのか、どこかへまた飛ばされたのか

「オーケー、つまり俺はこの世界に災厄とやらを滅ぼすために召喚された正義の使者ってことでもいいんだな？」

「まあ、要約するとねえ」

「ハツ……正義だなんてガラじゃアねエな。俺が少しひねればこの世界なんてもんは跡形もなく消し去れるってのによオ」

地球にいた時は、喧嘩を売ってくる輩全てをなぎ倒し、何度病院に送ったかもわからない。その中には障害を抱える奴もいただろう。しかし刀哉はそれに対してもはや何の罪悪感も感じなかった。こんな自分を捕まえて正義の使者などと。滑稽だ。

「それでも君はこの世界に生きる人を守ろうと思ったんでしょ？
ならそれでいいじゃない。思うが儘に生きて何が悪いの？」

「ホオ……いいこと言うじゃねエかソフィア。で？ 次のどうやって呼ばれたのかを話してもらおうか」

何故あのタイミングだったのか。後数瞬遅かったならば、死体がこちに来ていたというのに。

刀哉を狙って召喚したのか。ただランダムに召喚したのか。

「この世界にはね……かつて、世界を破滅から守ろうとした組織があった。それが今の、アルトフィリス教団。アルトフィリス教団のことはご存知かな？」

「知らん」

「まあ、そのイルフちゃんかな？ ……が属している組織のことよ。そのアルトフィリス教団は、最初の危機に瀕したこの世界を救うため、英雄を召喚するシステムを作り上げた。……禁忌を冒すまでね」

「禁忌、だと？」

「そうよね？ イルフちゃん」

「……はい」

禁忌　それがもし本当なら、イルフは何者なんだ？

「これを語るのは、まずあの時の戦争を話さなければならぬのだけれど……どうする？」

「当然聞くに決まってるんだろうが。早く話せ」

「まあまあ。待ちなつて。せっかな男は嫌われちゃうぞ？　こんな体勢で聞いていても何だから、少し休憩してお茶でも飲みながら話をしようよ」

おちゃらけてやがる……だが、ここでこの話を聞いておかないとこれから先イルフを信用していいものかも怪しくなってきた。

あの時の直感は正しかったというべきか……。

なんにしても、ソフィアの話は興味深い。少し付き合っても、聞く価値はありそうだ

第三章 【業喚ぶ声】 八

「始まりは、皆様のご存じのとおり『原初の災厄』です。突如現れた破滅^{ヴァナルガンド}、それは多くの犠牲者を生みました」

場所をリビングに移し、全員が落ち着いたところでイルフが話し始めた。

「私たち、アルトフィリス教団はもともとは邪教と呼ばれ、人々に忌み嫌われていました。それもそのはず、禁忌であり、魔術師でも知らないような魔法を研究していたのですから……しかし、それもすべてこの地に住まう人々のため、やっていたことなのです」

「まア、それはいいからよ。次話せ」

「……はい。あの破滅によって世界人口の約半数以上が死に至りました。このままでは破滅にすべてを滅ぼされてしまう。そう考えた我々は、当時連合を組んでいた国々の長たちにある話を持ちかけました。……そうです、ほかの世界から救世主を呼ぶこと」

すべての始まりはアルトフィリス教団と原初の災厄、か。

「当時のアルトフィリス教団は、時空間魔法を研究し、その確立まで至っていました。理論上は。その時空間魔法に召喚魔法を組み合わせ、救世主召喚魔法が出来上がったという訳です」

「なるほどな。つまり今回もその方法で呼ばれたってわけかア？」

「……いいえ、違います。救世主召喚魔法は、人為的に発動されません。あなたは、破滅が来る前にすでにこの地に訪れていた。故に私はあなたを探していたのです。救世主主観魔法のある地、それは北

の最果ての、始まりの大地と呼ばれるところにあります。長い間、それは発動しませんでした。しかし何故か、誰が発動したのか 召喚場所をランダムに設定され、救世主召喚魔法は発動してしまっ
た……」

そうか。

「召喚魔法を発動したのは、サイファーか。謎を解けばまた謎が増える……性質がワリいな」

「救世主召喚魔法の発動を観測したアルトフィリス教団は、私を救世主探索へと向かわせました。白い髪、赤い目の人間を探すように
と」

「その、白い髪に赤い目ってのはなんでだ？ 何の意味があるんだ」

「白は正義、潔白、高貴 何者も触れることのできない無類の強さの色。赤は信念と禁忌 その二つを兼ねそろえた人は人ならざる力が宿る、と。だれが言い出したのかはわかりませんが、原初の災厄より以前にあった言葉のようです」

もともとあつた言葉か……神話、伝承、何かはわからないが、それをもとに自分を召喚したのは間違いないようだな。

「そして、私はトーヤ様を見つけました。これから迫りくる次なる災厄を救うお方だと」

「あア……話はつながった。が、まだその救世主召喚魔法とやらが何故禁忌なのかを聞いてねエんだが？」

そう、今は『どうやって』の話。禁忌についてはまだ一言も出ていないのだ。

「……救世主召喚魔法も禁忌です。しかし、その構成前の時空間魔

法が禁忌なのです。時空間魔法とは、世界が定めた法則を根源から捻じ曲げてしまう魔法。精霊の力も借りず、世界の法則を無視して使役されるもの。その時空間魔法が与える影響というのは想像をはるかに超えるものだ、と。故に禁忌なのです」

「し、しかし、イルフ殿、それでは原初の災厄の時、救世主を召喚したのは間違いだったと!？」

「正解など、正しさなど、どこにあるというのでしょうか。私たちは救世主様を召喚することによって救われました。しかし、救世主様は？ 誰かが幸せになる傍らでは、誰かが不幸になっているのです。それが、創世の時より紡がれてきた世界の理なのです」

「じゃア聞くがよオ。今回救世主召喚魔法が発動したことによってどんな影響が出るってんだ？」

「それにはまず、救世主召喚魔法を構成する時空間魔法と召喚魔法の詳しい話をしなければなりません。……まず、召喚魔法というのはこの世界の中から特定の条件で何かをよびだすという魔法です。その特定の条件に引っかかったものをランダムで一つ、召喚するというのがネックになります。一つしかなければ一つだけ。複数あればその中から一つだけ。召喚される側も召喚する側も、その一つを選ぶことはできません」

つまりすべては運、か。俺がこの世界に来たのも、すべてはランダム。

「そして時空間魔法。時を操作し、空間を操ることのできる魔法です。空間を操る、ということだけに限って言えば、この世界で行えば問題ありません。世界の理を外れていることにはなりませんから。しかし、それを他の空間を操る、ということになると話は変わるのです。この世界にはこの世界の、他の世界には他の世界の理があるものです。その理の垣根を越えて魔法を行使すれば、当然世界の理から外れることになってしまいます」

「理の重複、だのお」

「はい。ヒザキ様の言う通りです」

その理の垣根を越えて、自分はこの世界に召喚された訳だ。この世界と、向こうの世界を繋いで。

「そして時を操ることにより、この世界の時間と向こうの世界の時間を操るのです。そうしておかなければ召喚された救世主様の体は急激な時の流れについていくことができず、崩壊してしまうからです。そうして構成された救世主召喚魔法には、もう一つ作用が付与されました」

「新たな作用？ 召喚するだけならそれで事足りるんじゃないのかな？」

「勿論本来ならばそれだけでよかったですのですが、構成する過程でどうしても作用してしまうようです。……召喚された救世主の過去、存在は、すべて元の世界から抹消されていしまう、という作用が」

抹消 ？

つまりそれは……

「たとえ元の世界に帰ることができても、俺の戸籍は存在せず、俺を知っている奴も、俺のやってきたことも、すべて消えるってことか……」

「……いいえ。世界はその世界だけでいくつもある、というのが理論です。今、おそらくトーヤ様のいた世界では、世界が『あったかもしれない世界』に置き換えているでしょう。もし、トーヤ様が生まれていなかったら、という世界に。そして時間は補正され、あなたの存在はもともなかったものに」

「っざけんな！」

なんだ、なんで俺は怒っているんだ？

あんな世界に未練などなかったはずなのに。

自分なんて、いなくなつていいものだ……思っていたのに。

「俺は……なんなんだ!？」

「トーヤさん!」

椅子を跳ね飛ばし、部屋から出ていく。

後に残された面々は、動くことができない。

「……まだ、なにか続きがあるんじゃないの？ そう、たとえば

……あの白の少年が無事に『役目』を終えたら、とか」

「……はい。でもそれは、すべて終わった後に。今はまだ、いっぺきではないと思いますので」

「……俺がない、世界か。どうなつてんのかなア？ ま、俺がいなきゃアお袋も死ぬことはないんだ。それでいいじゃねエか。ああ。それで」

思い出す、記憶。

自分がいたことで、日に日に痩せていく母の姿を。

母が、そのまま眠りについて、次の日も起き上がることはなかった

事も。

悔しくて、強くなろうと思ったことも。

そして、独りになったことも。

今、自分にある過去は、この世界に来てからの記憶と、自分の中の記憶だけ。

その記憶さえも、もうあの世界にはない。ならば、自分はいったい何者なのだ。

救世主？ 馬鹿を言うな。そんな大それたことは何もしやいない。救えなかった人だって、大勢いる。エリーも、リタも、アレックスも。

破滅の犠牲になった人たちだって。

もつと力があれば、救えたのに

「ハツ……滑稽、だなアオイ。どうせ俺も、消えるんだろ？ 神話とやらの英雄と同じように。この災厄を片付けたらよオ」

それが、救世主召喚魔法を使用した際に起こる、この世界の作用。つまり、そうなってしまえばもうエリーとの約束を果たすこともできやしない。

「なーんだ。結局、俺は何一つ出来ねエってわけだ。この世界で、破滅とサイファーを倒したところで、また同じように破滅は出てくる。こんな意味のない存在が他にあるかよ？ なア？」

向こうの世界でも、この世界でも、結局意味のない存在。

「あーあ。急にバカバカしくなっちまった。ホント、つくづく滑稽だよなア？ 聞いてるんだろ？ エレン」

「あや……ばれちゃってましたか」

数メートルも離れていない岩陰から、エレンが姿を現す。

「俺はもう、この世界で役目を全うしたら消える。これから数日のうちになア。俺はもうシンに向かうけど、お前はどつするんだ？」

「……私は、そうですね、ついていきますよ。ニキちゃんともここでお別れです。この旅はニキちゃんをワコウまで送り届けるのが目的でしたから」

「へエ……じゃアお前の目的は？」

「死に場所を、探すこと」

風が、吹いた。

第三章 【業喚ぶ声】 八（後書き）

次話までまたしばらく間があいてしまおうと思います。

不定期更新で申し訳ありません。

更新通知はツイッターで。アカウントは活動記録にあります。

フォローお願いします。リプライをいただければリフォローいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0282j/>

white:white

2011年11月16日20時26分発行